

2013 年度

博士論文

青年期・成人期のアタッチメントスタイルに関する研究
－内的作業モデルの変化と機能－

関西学院大学文学研究科
教育心理学専攻

岡島 泰三

(指導教員 桂田 恵美子教授)

博士学位論文の要旨

Bowlby (1969/1982, 1973, 1980) によって提案されたアタッチメント理論を用いた研究は、現在、乳児期のみではなく青年期・成人期にまで拡張されている。青年期・成人期のアタッチメント研究は、アタッチメント理論に沿って、多様な領域で行われているが、これらの研究は、いくつかの仮説に基づいて行われている。本博士論文では、乳幼児期に形成された内的作業モデルがパーソナリティのように働くこと (Bowlby, 1973, 1980) と、その内的作業モデルは青年期以降では時間的安定性を示すこと (Bowlby, 1973, 1979) というアタッチメント研究における 2 つの仮定を検証した。

第 1 章では、アタッチメント理論の概要、青年期のアタッチメント研究、時間的安定性に関する先行研究のレビューを行った後、本博士論文で検証すべき青年期・成人期のアタッチメント研究における未解決である仮説について述べた。

第 2 章では、青年期において、状況に応じて活性化されるシステムとして内的作業モデルを捉える研究者の立場にたち、初対面の他者に対する行動とアタッチメントスタイルとの関連を質問紙、および、不安を喚起した状態で初対面の人に対する実際の行動を観察することによって調べた。その結果、初対面の他者に対する行動には、アタッチメントスタイルの違いが示された。個人は、不安が喚起されたときに、アタッチメント行動システムが活性化する。そのアタッチメント行動の個人差は、より以前にアタッチメント人物との相互作用によって内在化した内的作業モデルを用いていると考えられる。次に、他者に対する情報量の違いが内的作業モデルの使用と関連するかを検証するために、恋愛関係にあるカップルを対象に、交際期間によって内的作業モデルの使用の有無に違いが生じるかを調べた。その結果、交際初期は、内的作業モデルを使用した対人認知を行い、交際中期には、内的作業モデルを用いず、2 年以上交際を継続している長期間交際しているカップルでは、再度、内的作業モデルを用いた対人認知を行った。

第 3 章では、内的作業モデルの時間的安定性に関して、恋愛関係、新しく大学で出会った友人関係、夫婦関係に焦点を当て検証を行った。その結果、内的作業モデルの変化の割合は、欧米と同じように、2 度の測定を通じて約 30% であった。恋愛関係や夫婦関係では、恋人や配偶者のコミュニケーションに関して、パートナーの応答性を応答的であると認知するようになると個人のアタッチメントスタイルが不安定型から安定型に変化することを示した。また、パートナーの応答性を拒絶的であると認知するようになると、個人のアタ

タッチメントスタイルが安定型から不安定型に変化することを示した。新しく大学で出会った友人との関係において、このような結果は示されなかった。さらに、恋愛関係と友人関係において、その対象を最も重要であると認識することとアタッチメントスタイルの変化との関連が示された。

これらの研究結果から、第 4 章の総合考察において、以下のような考察が行われた。青年期以降の内的行モデルはパーソナリティのように働くという仮定に関して、本研究の結果から、青年期・成人期の内的作業モデルは、パーソナリティのように継時的、通状況的に個人内で一貫しているというよりは、少ない対人情報を埋めるために、また、不安が喚起されたときに対人関係に関するメンタルモデルとして働くことを示唆した。また、内的作業モデルが青年期以降時間的に安定しているという仮定に関して、本研究の結果から、青年期・成人期において、多くは安定しているものの通文化的に個人は内的作業モデルを変化させることを示唆した。内的作業モデルを変化させる要因に関して、個人は、新しくできた対人関係を今まで築いた対人関係の中で最も重要であると認識し、その他者に対するコミュニケーションの認知が既存の内的作業モデルの認知と合致しなくなった場合に、内的作業モデルを変化させることで、個人内に生じている認知と現実の情報との乖離をなくし、その他者との関係を維持し、安定させるのではないかと考えられた。

目次

第1章 アタッチメント理論と問題の所在.....	1
1-1 アタッチメント理論.....	1
1-1-1 アタッチメント理論の成立に至るまで.....	1
1-1-2 アタッチメント理論.....	2
1-1-3 乳児期のアタッチメントの個人差.....	5
1-2 青年期・成人期のアタッチメント研究.....	7
1-2-1 青年期・成人期のアタッチメント測定・分類.....	7
1-2-2 青年期・成人期のアタッチメントスタイル研究.....	10
1-3 アタッチメントの時間的安定性.....	13
1-3-1 アタッチメントの時間的安定性に関する理論的背景.....	13
1-3-2 乳幼児期のアタッチメントの安定性.....	14
1-3-3 乳児期から成人期のアタッチメントの連続性.....	15
1-3-4 青年期, 成人期のアタッチメントの安定性.....	16
1-3-5 内的作業モデルの変化のモデル.....	17
1-4 本論文の構成.....	19
第2章 他者に関する情報量と内的作業モデルの機能.....	22
2-1 初対面の人に対する内的作業モデルの機能 (質問紙研究から).....	22
2-2 初対面の人に対する内的作業モデルの機能 (行動観察研究から).....	28
2-3 交際期間による内的作業モデルの機能.....	36
第3章 アタッチメントスタイルの変化.....	47
3-1 恋人との関係におけるアタッチメントスタイルの変化.....	49
3-2 新入生における友人関係とアタッチメントスタイルの変化.....	61
3-3 出産を通じたアタッチメントスタイルの変化.....	73

第4章 総合考察.....	86
4-1 本研究で得られた知見.....	86
4-1-1 他者に対する情報量と内的作業モデルの機能.....	86
4-1-2 アタッチメントスタイルの変化.....	88
4-2 考察.....	90
4-3 本研究の限界と今後の課題.....	94
引用文献.....	99
注釈.....	110

公表論文

謝辞

付録

第1章 アタッチメント理論と問題の所在

本章は、アタッチメント理論の成立に至るまでの Bowlby の歴史に関する簡単な記述から始める。アタッチメント理論の成立に至るまでの簡単な歴史を記述することで、本研究のテーマである内的作業モデルの安定性やその機能に関する Bowlby の仮定がなぜ作られたかが明確になると考える。1-1では、アタッチメント理論について、そして、乳児のアタッチメントタイプの分類について記述する。1-2では、青年期以降のアタッチメント研究を簡単にレビューする。これは、本論文の主張や方法を理解する手助けになると考える。1-3では、アタッチメント研究における時間的安定性に関する研究をレビューする。これらをふまえ、1-4では、本論文の構成を簡単に述べる。

1-1 アタッチメント理論

1-1-1 アタッチメント理論の成立に至るまで

Bowlby はケンブリッジ大学卒業後、不適応児と関わる職に就き、その不適応が幼児期の環境によるものであると考えた (Homes, 1993)。すなわち、Bowlby は、幼少期の経験の重要性についてこの頃より心に留めていたと思われる。その後、ここで知り合った Alford からの薦めもあり、Bowlby は Klein 一派の Riviere から精神分析の技法を学び、Klein からスーパーバイズを受けたが、子どものファンタジーを重視するあまり環境の重要性を無視する Klein 派の精神分析学には大きな疑問を感じていた (Homes, 1993)。そして、Bowlby は、その後に執筆した2つの論文の中で (Bowlby, 1940, 1944)、子どもにとって幼少期の母親との関係が重要であることを訴えた。

さらに、Bowlby (1951) は、WHO (世界保健機構) の要請により、孤児に関する研究を行った。この報告書の中で Bowlby は、乳幼児期における母親の愛情は、ビタミンやタンパク質が身体の健康に不可欠であるのと同様に心の健康にとって重要であると述べた。生後3年間、あるいは5年間における母親による養育の完全な、あるいは部分的な喪失を意味する“母性的養育の剥奪”(maternal deprivation)を経験することは、パーソナリティの発達に深刻な影響を及ぼすという仮説を提案した。

Bowlby の maternal deprivation 仮説は、その後、いくつかの批判的になった。主なものとしては以下のようなものがある;(1) maternal deprivation とは具体的に何を指すのか。(2) maternal deprivation による障害は、実際には生じないことが多いし、生じたと

しても一生続くか疑わしい。(3) maternal deprivation を重視するあまり, paternal deprivation などの家族要因を軽視している (黒田, 1992).

このような批判や論争の中で, Bowlby の見解は比較行動学, 進化生物学, 発達心理学, 認知科学, 脳生理学, コントロールシステム理論などさまざまな分野の理論や知見を盛り込んだアタッチメント理論へと発展させることになったのである.

このような歴史をたどって考えてみると, Bowlby 自身の臨床経験と精神分析学, そして, その当時の科学を複合させたことでアタッチメント理論が形成されたと考えられる. そのため, 次節で詳細するアタッチメント理論には, いくつかの理論的仮定が残されている. その一つが, 幼少期の経験がその後のパーソナリティの発達に影響を与えるということである.

1-1-2 アタッチメント理論

Bowlby (1969/1982, 1973, 1980) は, アタッチメント研究のバイブルであるアタッチメント 3 部作において, “アタッチメント” という概念に関する明確な定義は行っていない^{*1}. そのため, アタッチメントの定義を “個人が不安や恐怖, ストレスなどという心理的危機を感じたときに重要な他者に対して接近を求めるという反応” というような狭義な定義を用いる研究者もいれば, “個体のある対象との情緒的結びつき” というような広義な定義を用いる研究者も存在する (遠藤, 2001). Homes (1993) は, “アタッチメント” と “アタッチメント行動”, “アタッチメント行動システム” という 3 つの概念を明確に定義することが重要であると述べている. Homes は, “アタッチメントは, 個人のアタッチメントの状態と質に関する包括的な用語” (p. 87) と定義し, 大変広範囲で不明瞭な概念としてとらえている. 一方, “アタッチメント行動は, ある特定の弁別された好ましい人物に対する接近, または接近を維持しようとする何らかの行動様式” (p. 87) と, 先に述べたアタッチメントの狭義な定義と同様の定義を用いている. そして, “このアタッチメントとアタッチメント行動の基盤になるのがアタッチメント行動システムである. アタッチメント行動システムは, 自己, 重要な他者, およびそれらの相互関係が表象化され, また個人によって示されるアタッチメントの特定パターンを具象化するところの 1 つの青写真あるいはモデルである” (p. 88) と Homes はまとめている. Bowlby (1969/1982) は, “アタッチメント” という概念を広義な定義である “個体のある対象との情緒的結びつき” ととらえていると考えられるが^{*2}, その “ある対象” は, 誰でもいいのではなく, 個人がアタッチメ

ント行動を向ける人物であることが重要であると思われる。個人は、アタッチメント行動を向ける対象である“アタッチメント人物”との接近を果たすと、それまで感じていた不安や恐怖、ストレスなどのネガティブな感情を減少させることができる。Bowlby (1969/1982) は、このように個人がネガティブな感情を減少させるために、接近し、それを維持する対象であるアタッチメント人物が個人の安全の基地 (secure base) として機能すると述べた。すなわち、個人は、アタッチメント人物との接近、接触によってネガティブな感情が減少すると再び探索を行うことができる。このようにアタッチメント人物が安全の基地として機能するような関係を持っている場合は、安定したアタッチメントを持っており、社会的に適応できると考えている。さらに、Bowlby (1969/1982) は、このような機能を親などに自分の安全を守らせるという進化的な生き残り方略としてとらえている。動物界では、不安や恐怖、ストレスなどのネガティブな感情が生じるのは外敵に襲撃されている状況であることが多く、そのような状況において未成熟な動物はアタッチメント対象に接近、接触することによって、アタッチメント対象に外敵から保護させる。保護された結果として、その未成熟な動物はネガティブな感情を減少させると同時に、生存も可能になる。このような機能が進化的に人間にも備わっており、接近、接触をしてきた個人をアタッチメント人物は保護する。すなわち、Bowlby の考えるアタッチメントは安全基地が保護する役目を果たしていることになる。このことから、Main (1999) は、アタッチメントという語を上述のような広義の定義での使用に警鈴を鳴らしている。通常、親が自分の安全を守るために子どもに接近することはなく、アタッチメントを親が子どもに向けるということはない。そこで、Goldberg, Grusec, & Jenkins (1999) は、アタッチメントを再定義して、“保護してもらえらることに対する信頼感 (confidence in protection)”としている。このような定義からすると、アタッチメント研究が、乳幼児期のような子どものみを対象にするのではなく、青年や成人、高齢者まで研究対象として拡張することが可能になると考えられる。

Bowlby (1969/1982) は、先に述べたアタッチメント行動を向けるようなアタッチメント関係になるには、血縁であることよりも生まれてからの数ヶ月の相互作用が重要であり、また、その過程は4つの段階から成ると述べている。第1段階は、“人物弁別を伴わない定位と発信”の段階であり、誕生から12週まで続く。乳児は、そばにいる人物に対して無差別に視線による追跡などの定位や泣きなどの発信行動を行う。第2段階は、“ひとり(または数人)の弁別された人物に対する定位と発信”の段階であり、6ヶ月頃まで続く。

第1段階で行われていた定位や発信行動は、日常的にそばで答えてくれる人物に集約されるようになる。第3段階は、“発信並びに動作の手段による弁別された人物への近接の維持”の段階であり、3歳頃まで続く。この段階では、人をより区別するようになり、前段階で弁別された人物に対して、不安や恐怖、ストレスなどのネガティブな感情を感じた際にアタッチメント行動を行ったり、探索行動のためのよりどころとしてその人物を用いたりする。一方で、見知らぬ他者に対する恐れと逃避が生じるようになる。第4段階は、“目標修正的協調性の形成”の段階である。この段階に入ると、乳児はアタッチメント人物の行動やそれにまつわる状況にある程度推察することができるようになり、それに応じて自らの行動や目標を修正するようになる。そのため、短期間の分離ならば社会情緒的に安定して振舞えるようになる。しかし、まだアタッチメント人物との長期的な分離は大変苦痛であるために、そのようなことが予想される状況では、アタッチメント人物への接近と接触を行い、苦悩を最小限にしようとする。要約すると、乳児は、第1段階ではまだアタッチメント人物を選定しておらず、第2段階においてそばにいて自分と関わってくれる人物との相互作用を通じてアタッチメント人物を選定していく。そして、第3段階では、乳児はそのアタッチメント人物に対してアタッチメント行動を行うが、見知らぬ他者には恐怖や逃避を示し、人物によって明らかに異なる行動を示すようになる。第4段階では、アタッチメント人物は確定されたものになり、その人物の行動や状況を読み取ることで、自らの行動を調節するようになる。このように考えると、乳児にとって、アタッチメント人物を選定する際にはその人物との日常生活における相互作用が重要である。さらに、アタッチメントは乳児の立場から述べられることが多いが、乳児の一方的なものではなく、アタッチメント人物との相互的關係である関係性なのである (Homes, 1991)。

以上のような過程を経て、個人は、3歳以降（第4段階以降）にアタッチメント人物との関係について確たる信念が形成される。このような信念は、アタッチメント人物が誰でありその人物にどのような応答を期待するかという他者に関するモデルと、アタッチメント人物によって自分がどのように受容されるか、もしくは、受容されないかという自己に関するモデルの2つの補完的なモデルから形成されている (Bowlby, 1973)。Bowlby (1973) は、このモデルを内的作業モデルと名付けた。“安定した (secure)” アタッチメントを形成した個人は、自分は価値があるという自己モデルと、他者は自分を助けたり応答したりするものとした他者モデルから成る内的作業モデルを内在化しており、一方で、“不安定な (insecure)” アタッチメントを形成した個人は、自分は価値が無いというような自

己モデルと、他者は自分を助けたり応答したりしないものとした他者モデルから成る内的作業モデルを内在化している。乳幼児期にアタッチメント人物が支持的で応答的であるとき、個人は安定した内的作業モデルを内在化し、アタッチメント人物が非応答的であったり、拒絶的であるようなとき、個人は不安定な内的作業モデルを内在化する。個人は内的作業モデルを内在化した後、対人関係や感情のコントロールに関する鋳型としてこの内的作業モデルを用いると考えられている。このような内的作業モデルは乳幼児期、児童期、青年期を通じて徐々に形成される (Bowlby, 1973)。その中でも、Bowlby (1973) は、5 歳くらいまでの比較的早期の段階を重視し、それ以降、漸次モデルは安定していき、内的作業モデルの可変性は減じていくと考えていた。

1-1-3 乳児期のアタッチメントの個人差

上述のような乳児とアタッチメント人物との相互作用の結果から乳児のアタッチメントの発達には個人差が生じる。このアタッチメントの個人差を測定する方法として、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) はストレンジ・シチュエーション法を開発した。ストレンジ・シチュエーション法は 1 場面 3 分からなる 8 つの場面で構成されている。この方法は、見知らぬ実験室の中で母親との分離・再会、および、ストレンジャーと対面させた時の乳児の反応と探索行動に焦点をあてたものである。この結果から、乳児を安定型 (B 型) と 2 つの不安定型である回避型 (A 型)、アンビバレント型 (C 型) の 3 つのタイプに分類する [後に、混乱型 (D 型) が加えられた (Main & Solomon, 1990)]。ストレンジ・シチュエーション法の中で、安定型の乳児は、分離時に多少泣きや混乱を示すが、再会時に積極的に親に身体接触を求め、受容されることにより簡単に沈静化する。そして、いったんネガティブな感情が沈静化すると再び親を拠点として探索活動を行う。一方で、不安定型の 1 タイプである回避型の乳児は、親との分離に際して泣いたり混乱を示すということがなく、再会時には親から目をそらしたり、明らかに親を避けようとする行動が見られる。そして、親を安全の基地として用いず独自に探索活動や遊びを行っている。また、もう一方の不安定型のアンビバレント型の乳児は、分離時に非常に強い混乱を示す。再会時には親に対して非常に強い身体接触を求めるが、その一方で激しい怒りを表現する。分離前は用心深く、親を安全の基地として探索行動を起こさず、親に執拗にしがみついていることが多い。混乱型の乳児は、ストレンジ・シチュエーション法において、上述の 3 つのタイプとは違い組織化された行動を示さないことが多い。例えば、安全の基地である親

が帰ってきたときに固まって動けなくなる (freezing) などがある。混乱型の家庭環境には虐待などが多いことが示されており、保護や、安全感、安心感を与える対象と生存を脅かす対象が同一であることが混乱を生んでいるのではないかと考えられている (数井, 2007; Lyons-Ruth & Jacobvitz, 2008)。

Ainsworth et al. (1978) の研究では、安定型が 67%、回避型が 21%、アンビバレント型が 12%存在することが発見された。しかし、その後、世界中で行われた研究により、これらの比率は社会文化的な影響によって、各国で若干異なるものであることが発見された (e.g., Miyake, Chen, & Campos, 1985)。Miyake et al. (1985) によると、我が国では、アンビバレント型が多く回避型が少ないことが示された。

上述のようなアタッチメントスタイルの違いを生じさせる要因として、Ainsworth et al. (1978) は、子どもに対するアタッチメント人物の行動が、子どものシグナルなどのコミュニケーション行動に対して、どのくらい敏感に察知し、適切に応答するかを重視した。すなわち、子どもがアタッチメント人物をどのくらいいつも接近可能で情緒的に利用可能かという認知が重要になるというのである。実際に、Ainsworth et al. (1978) は白人中流階級の母子を対象に自然観察を行っている。その結果を簡単に要約すると、安定型の子どもを持つ母親は、子どものシグナルに対して敏感であり子どもの行動を統制するようなことは少ない。一方、回避型の子どもを持つ母親は、子どものシグナルに対して回避的・拒否的に振る舞うことが多く、子どもへの身体接触や子どもへ微笑みかけることが少ない。アンビバレント型の子どもを持つ母親は、子どものシグナルに対する感受性が低く、子どもへの反応に一貫性を欠いたりタイミングがずれたりすることが多い。このように、乳児がアタッチメント人物に投げかけるシグナルに対して、アタッチメント人物がどのように応答するかということによって、アタッチメントタイプが異なるのである。

遠藤 (2001) は、これらの結果を子どもの視点から考え、以下のように述べている。安定型の子どもは、アタッチメント人物が子どものシグナルに対して情緒的応答性が高く、そのシグナルに対して一貫して応答することによりアタッチメント人物の行動を予測しやすく、アタッチメント人物に対して強い信頼感を形成している。結果的に、安定型の子どもは自由に探索行動を行い、自分のストレスレベルが上昇した際にアタッチメント人物に帰ってくるといった行動を繰り返すようになる。一方、回避型の子どもは、アタッチメント人物に対するシグナルを送出してもそのアタッチメント人物からの応答が返ってこない。そのため、子どもはアタッチメント人物に対してシグナルを送出する行動が消去されてい

く、すなわち、回避型の子どもはシグナルをあまり表出しないようになる。このような行動は、シグナルを送ると回避的・拒絶的になるアタッチメント人物に対する子どもの適応行動とも考えられる。そして、アンビバレント型の子どもは、自分のシグナルに対して一貫性がなく応答されることによって、どのようにすればアタッチメント人物に接近が可能なのか予測が出来ない。その結果、アタッチメント人物への接近を維持する努力として、子どもはアタッチメント人物に対してシグナルを出し続けるようになると考えられる。

乳児のアタッチメントタイプの個人差を形成する要因として、アタッチメント人物の応答性以外にも、子どもの気質やアタッチメント人物の身体接触の量や質など、さまざまな要因が検証されている（詳しくは久保田, 1995 参照）。乳児のアタッチメントタイプの個人差を形成する要因は、乳児側の要因とアタッチメント人物側の要因が複雑に絡み合っており、現在もその要因について検証されている。

このように、乳児期のアタッチメントの個人差は、乳児のみの個人差を示しているのではなく、乳児－アタッチメント人物との関係性の違いを示している。そのため、先に述べた3つのアタッチメントタイプは、それぞれの関係の中では適応的であると考えられる。そして、このアタッチメントタイプがその後数年かけて個人に内在化され、行動レベルではなく表象レベルで働くようになる（Bretherton, 1985）。つまり、幼児期以降は、乳児－アタッチメント人物という二者関係を行動レベルから捉えていたアタッチメントタイプから、表象レベルである内的作業モデルが反映するものをとらえるようになる。このような視点によって、アタッチメント研究は乳児期から青年期・成人期に至るまで拡張されたのである。

1－2 青年期・成人期のアタッチメント研究

1－2－1 青年期・成人期のアタッチメント測定・分類

1－1において述べたように、乳幼児期の子ども－アタッチメント人物との二者関係によって、内的作業モデルが形成される（Bowlby, 1973, 1980）。内的作業モデルは、その後の人生における対人関係に関する感情や認知の鋳型となると考えられているため、青年期以降のアタッチメント研究では、その内的作業モデルが反映していると考えられるものを取り出すことが重要であった。そこで、青年期・成人期においてアタッチメントの個人差が測定可能である2つのアタッチメント研究法が開発された。一方はアダルト・アタッチメント・インタビュー（George, Kaplan, & Main, 1985）であり、他方は Hazan & Shaver

(1987) を代表とする質問紙研究である。

前者は、主に子どもの時のアタッチメントに関連する質問項目からなる半構造化の面接法であり、世代間伝達を中心とした発達心理学領域や臨床領域で用いられることが多い。アダルト・アタッチメント・インタビューは、元来、ストレンジ・シチュエーション法によって分類された乳児の親が、幼少期の親子関係に関する語り方に違いが生じることから開発されたものである。そこでは、子どもの時のアタッチメントに関する質問は無意識を脅かすものであると考えられている。無意識を脅かすことによって、その無意識にある内的作業モデルに基づいた情報処理が行われ、質問に対する答えの語りのスタイルに個人差が生まれるという。この方法では、語りのスタイルによって3分類（自律型、軽視型、とらわれ型）、又は4分類（未解決型）に割り当てられる（George et al., 1985）。

一方、後者は、主に社会一人格系の領域で用いられることが多い方法である。Hazan & Shaver (1987) は、恋愛関係中に行われている二者間の相互作用が、乳幼児期における乳幼児－アタッチメント人物の相互作用と同等のものであり、それまでに形成された内的作業モデルを反映するものであると考えた。そこで、Hazan & Shaver (1987) は、3つのアタッチメントスタイル（安定型、回避型、アンビバレント型）を典型的に表す恋愛スタイルに関するパラグラフを作成した。この研究では新聞の広告によって集められた大きなサンプルからなる第1研究と、大学生サンプルからなる第2研究の2度にわたって調査が行われ、3つパラグラフの中から1つを被験者に強制選択させるものであった。結果は3つのスタイルの出現率は乳児で観察されたものと類似していた。すなわち、被験者のうち半数強（第1研究では56%、第2研究でも56%）が安定型を選択し、2割強（第1研究では25%、第2研究では23%）が回避型、2割弱（第1研究では19%、第2研究では20%）がアンビバレント型を選択したのである。また、この研究では、恋愛関係、および、幼児期の家族関係についても質問しており、アタッチメントスタイルによってこれらの自己報告に違いが生じている。具体的には、安定型の個人は、自分の最も重要な恋愛経験を幸せで、友好的で、信頼できるものとして特徴を述べ、また、自分のパートナーの失敗にもかかわらずパートナーを受容でき支持できると主張した。幼児期の家族関係に関して、安定型の個人は両親との暖かい関係、また、両親間での暖かい関係を報告した。一方、回避型の個人は、自分の恋愛経験を親しさに恐れを感じ、情緒的に浮き沈みがあり、嫉妬するという言葉によって特徴づけた。そして、幼児期の家族関係に関しては、冷たく拒絶する母親を報告した。さらに、アンビバレント型の個人は、自分の恋愛経験が妄想と関係すること、

恋愛関係の中で最も情緒的浮き沈みが激しく、極度に性的魅力を感じることを、最も大きな嫉妬を持つこと、パートナーを受容できること、自分は一目惚れしやすいことを報告した。幼児期の家族関係に関しては、アンビバレント型は父親を不当なものとして見ると報告した。

上述の研究結果は、Hazan & Shaver (1987) によって開発された尺度に妥当性を与えるけれども、強制選択法であるため各カテゴリーに属する人が他のカテゴリーに属している程度を測定されていないという点、また、いろいろな要素を含む 1 つのパラグラフであるという点において、批判されることとなった (Simpson, 1990)。そこで、多くの研究者が Hazan & Shaver のパラグラフを分解して多項目尺度を作成した (Collins, & Read, 1990; Feeney, & Noller, 1990; Simpson, 1990)。これらの尺度の多くは、因子分析の結果として 2 つの因子を導き出した; (a) 親密さに伴う快適さ (comfort with closeness), (b) 関係への不安 (anxiety over relationships)。親密さに伴う快適さの次元はオリジナルの安定型傾向と回避型傾向を両極に持つ次元である (e.g., “私は他の人と親密になることが比較的簡単である” vs. “私は誰かが親密になりすぎるとき神経質になる”)。関係への不安の次元は愛情に関する心配や見捨てられることに関する心配、極端な親密さの要求のようなアンビバレント型傾向が中心となっているテーマを扱っている (e.g., “私はパートナーが本当は私を愛していないのではないかとよく心配する”, “私は他者が私のように親密になりたがらないとわかる”)。我が国においても、詫摩・戸田 (1988) が、Hazan & Shaver (1987) を元に多項目尺度を作成している。

Hazan & Shaver (1987) の尺度は Ainsworth et al. (1978) の主張をもとにして作成されたものだが、Bartholomew & Horowitz (1991) は、自分が愛され、援助されるべき人物かという“自己のモデル”と他者は自分を援助するかという“他者のモデル”の 2 つの次元から構成されている内的作業モデルに関する Bowlby の主張をもとに、“自己のモデル”と“他者のモデル”の 2 次元をポジティブ・ネガティブで評価する関係尺度 (Relationship Questionnaire) を開発した。この尺度は 2 つの回避型 (拒絶型と恐れ型) を含む 4 つのプロトタイプに分類するものである; (a) 安定型 (ポジティブな自己モデルとポジティブな他者モデル), (b) 拒絶型 (ポジティブな自己モデルとネガティブな他者モデル), (c) とらわれ型 (ネガティブな自己モデルとポジティブな他者モデル), (d) 恐れ型 (ネガティブな自己モデルとネガティブな他者モデル)。この尺度も Hazan & Shaver の尺度同様、4 つのパラグラフを強制的に選択させる方法を適用していた。そのため、後に多項目尺度

Relationship Scales Questionnaire (RSQ) が作成された (Griffin & Bartholomew, 1994).

また、別の尺度として、the Experiences in Close Relationships (ECR; Brennan, Clark, & Shaver, 1998) がある。ECR は既存のアタッチメントスタイル尺度 [e.g., Griffin & Bartholomew の尺度 (Griffin & Bartholomew, 1994) や Collins & Read の尺度 (Collins & Read, 1990)] からの項目 (同じような意味の項目などを削除した 323 項目) を用いて因子分析による再分析を行った。最終的に、各 18 項目からなる 2 次元尺度 (“回避” 次元と “不安” 次元) から成る the Experiences in Close Relationships (ECR) を作成した。Fraley, Waller, & Brennan (2000) によって、ECR は、既存の尺度の中で最も安定型一回避型、アンビバレント型–非アンビバレント型を弁別する機能を持つことが実証されている。

上述のように、アダルト・アタッチメント・インタビューは、過去の養育者との記憶にアクセスする際に働く内的作業モデルの質が反映されると仮定されており、一方、自己報告式の測定では、内的作業モデルが種々の対人関係に影響すると考えられることから、特定の、もしくは、一般的な対人関係に関する信念を捉えることで内的作業モデルの個人差を捉えようとするものである (安藤・遠藤, 2005)。また、自己報告式の測定では、意識的に想起できる内容のみを捉え、アダルト・アタッチメント・インタビューは、意識領域と無意識領域の両方を捉えていると考えられるが、最近では、自己報告式の測定においても、無意識領域に影響を与え、その妥当性に何ら問題がないことを実証しようとする試みもある (e.g., Shaver & Mikulincer, 2004)。

1-2-2 青年期・成人期のアタッチメントスタイル研究

Hazan & Shaver (1987) に始まった社会–人格系領域の青年期・成人期のアタッチメント研究は、さまざまな視点から研究されることとなった。恋愛に焦点を当てたものとして、アタッチメントスタイルと他の恋愛スタイル (例えば、Lee の恋愛スタイル) との関連 (Feeney, & Noller, 1990; Levy, & Davis, 1988)、恋愛関係とアタッチメントスタイルとの関連 (Feeney, & Noller, 1992; Jang, Smith, & Levine, 2002; Kirkpatrick, & Davis, 1994) などがある。

これらの研究結果を要約すると、安定型の個人は関係の質、および、パートナーに対してコミットメントを示し、信頼をおき、満足を感じていると認知する (Collins, 1996; Levy & Davis, 1988; Simpson, 1990)、パートナーからの有効なソーシャルサポートを多く認知

する (Florian, Mikulincer, & Bucholtz, 1995), 相互作用に関してポジティブな情緒を感じる (Florian et al., 1995; Simpson, 1990), 関係をポジティブな感情で評価する (Simpson, 1990). さらに, ストレス状況下において, 安定型の女性はサポート要求を行い, 安定型の男性はサポートを与える (Simpson, Rhole, & Nelligan, 1992). このように, 安定型の個人は, 恋愛関係において, パートナーやその関係を大変ポジティブに評価し, サポートを要求し, 与える傾向がある.

回避型の個人は関係の質, および, パートナーに対してのコミットメント, 信頼, 満足が不足している (Levy & Davis, 1988; Simpson, 1990), パートナーからのソーシャルサポートをあまり認知しない, 異性に対する親密性が少ない (Guerrero & Burgon, 1996; Tidwell, Reis, & Shaver, 1996), パートナーとの相互作用中にあまりパートナーの目を見ず, 笑顔を表さない (Tucker & Anders, 1998), パートナーがネガティブなイベントを生じさせたときに神経質になる (Collins, 1996). また, ストレス状況下において, 回避型の女性はサポート要求をあまり行わず, 回避型の男性はあまりサポート与えない (Simpson et al., 1992). 回避型は, 恋愛関係において, パートナーに対して深く親密な関係を築くということをあまり行わない.

アンビバレント型の個人は関係の質およびパートナーに対して信頼しない (Levy & Davis, 1988; Simpson, 1990), 相互作用に関してポジティブな情緒をあまり感じない (Tidwell et al., 1996), 異性との相互作用を通じて, ポジティブな感情を感じるかということに大きな変動性を持つ (Tidwell, et al., 1996), パートナーがネガティブなイベントを生じさせたとき関係を葛藤に導くことが多い (Collins, 1996), パートナーからのソーシャルサポートをあまり認知しない (Florian et al., 1995), パートナーを理想化する (Feeney & Noller, 1991), パートナーやその関係に対して理想化をするために, 実際関係をネガティブなこととしてとらえることが多い.

このように, 恋愛関係におけるパートナーや関係の評価は, 乳幼児期の親子関係においてみられる親の行動 (Ainsworth et al., 1978) と類似していることが多く, 恋愛関係の評価には内的作業モデルが影響を及ぼしている可能性が高いようである.

さらに, 感情制御 (affective regulation) というトピックに焦点をあてた研究も現れた. 例えば, 不安が生じたときのカップルの相互作用を調べた研究 (Simpson et al., 1992), 湾岸戦争時のコーピング方略とアタッチメントスタイルとの関連を調べた研究 (Mikulincer, Florian, & Weller, 1993), ソーシャルサポートとアタッチメントスタイルと

の関連を調べた研究 (Anders, & Tucker, 2000; Florian et al., 1995; Ognibene, & Collins, 1998) である。これらの研究では、安定型の個人は、不安やストレスなどのネガティブな感情が生じたときに、他者を用いることでそのネガティブな感情に対処することが示されている。一方、回避型の個人は、ネガティブな感情が生じたときに、他者との接触を避け、アンビバレント型の感情制御に関しては一貫した結果が示されていない。すなわち、アンビバレント型の個人は、ネガティブな感情が生じたときに、他者にサポートを求めるという研究がある一方で、そのような関連は示されていない研究結果もある。

恋愛関係を含む対人関係を検証した研究以外に、アタッチメントスタイルと情報処理に関する研究も行われている。記憶に関して、アタッチメントに関連のある記憶の想起に関する研究 (Collins & Read, 1990; Feeney & Noller, 1990; Hazan & Shaver, 1987) やアタッチメントに関連する記憶に対するアクセシビリティに関する研究 (Mikulincer & Orbach, 1995) などがある。また、表情認知に関する研究 (金政, 2005; Niedenthal, Brauer, Robin, Inners-Ker, 2002; 島・福井・金政・野村・武儀山・鈴木, 2012) や他者の思考や感情への推論の正確さに関する研究 (e.g., Simpson, Ickes, & Grich, 1999) も行われており、アタッチメント次元と対人関係に関する情報処理との間に関連があることが示されている。

青年期・成人期のアタッチメント研究の対象も大学生を中心としたカップル研究ばかりでなく、既婚者を対象に行われた研究 (Fuller, & Fincham, 1995; Senchak, & Leonard, 1992), いくつかの年齢群を用いた研究 (Diehl, Elnick, Bourbeau, & Labouvie-Vief, 1998; Klohnen, & Stephan, 1998; Mickelson, Kessler, & Shaver, 1997) など多岐に及んでいる。

アタッチメントに関連する変数を測定する方法に関して、質問紙以外に、実験室場面での観察研究 (Guerreo, & Burgon, 1996; Simpson et al., 1992; Tucker, & Anders, 1998), 実際場面での観察研究 (Fraley, & Shaver, 1998), 生理指標を用いた研究 (Fraley, & Shaver, 1997), 日記法を用いた研究 (Pietromonaco, & Barrett, 1997; Tidwell et al., 1996), 反応時間を用いた研究 (Mikulincer, 1998) など多種多様な方法が用いられている。

以上のように、青年期以降のアタッチメント研究は、さまざまな対象、および、方法を用いて研究が行われている。先に述べたように、乳児期のアタッチメント研究は、不安や恐怖、ストレスなどのネガティブな感情が生じたときに、乳児がアタッチメント人物にそのネガティブな感情を低減させるためにアタッチメント行動が生じるかについて焦点が当てられていた。すなわち、アタッチメント行動システムが活性化した際の乳児の行動に焦

点が当てられていた。青年期以降のアタッチメント研究は、アタッチメント行動システムが活性化されていない場面においても研究が行われており、青年期以降のアタッチメント研究が、アタッチメントをアタッチメント行動システムとして捉えているのか、パーソナリティとして捉えているのかは曖昧なままである。

1-3 アタッチメントの時間的安定性^{*3}

1-3-1 アタッチメントの時間的安定性に関する理論的背景

Bowlby は、マターナルデプリベーションの概念を唱え、後にアタッチメント理論を提唱したが、その考えは親子関係（特に、母子関係）に焦点を当てていたと思われる。確かに、元来、彼が児童精神科医という職を経験し、また、Klein 一派の Riviere を通じて、児童にまつわる精神分析学を学んだこと (Homes, 1993; 黒田, 1991) から、Bowlby が親子関係に注目したことは不思議ではないが、Bowlby の構想は、親子関係にとどまるわけではなく、生涯発達の視点を帯びていた。Bowlby 自身が、自分の研究が精神分析理論の枠組みの中で展開されているということをアタッチメント理論三部作の改訂版 (Bowlby, 1969/1982) の冒頭で述べており、アタッチメント理論が、Freud を含めた精神分析理論で展開されているような乳幼児期が基礎となるパーソナリティ発達の考え方を継承しているのではないかと考えられる。Bowlby (1969/1982) によると、基本的資料として直接観察を用いることよりも回顧的なデータによって精神分析理論が構成されているという点ではアタッチメント理論と異なるものの、Freud を含めた精神分析理論は、パーソナリティの働きを個体発生によって、その健全な側面と病的な側面の両方において説明しようとする。Bowlby は、このような点において、アタッチメント理論が Freud の発達理論と矛盾するものではないことを強調しており、Freud の発達理論のように、乳幼児期のみの親子関係だけではなく、その後のパーソナリティの発達や対人関係に興味を持っていたと思われる。実際に、1-2 で述べたように、アタッチメント研究は青年期・成人期、高齢期に拡張され、その研究は多岐に渡って行われている。アタッチメント研究が乳幼児期だけではなく、その後の児童期、青年期、成人期、強いては、高齢期にまで拡張するためには、1-1 でも述べた内的作業モデルが重要なキー概念となるだろう。Bowlby (1969/1982, 1973, 1980) によると、内的作業モデルとは、乳幼児期における養育者との相互作用によって個人に内在化される。そして、いったん内在化されると、個人は、その内的作業モデルに従って、脅威的な状況に対処し、また、その後の対人関係におけるさまざまな情報を

処理するという対人情報処理の鋳型として内的作業モデルを用いるようになる。この内的作業モデルの形成は、5 歳くらいまでが非常に重要な時期であり、いったん形成された内的作業モデルは、それ以降漸次安定していくことによって、可変性が減じていく (Bowlby, 1979)。このような主張を、Bowlby (1973) は、「ゆりかごから墓場まで」という言葉を用い、内的作業モデルは、いったん形成されると比較的安定したものになると仮定している。しかし、彼はまた、Piaget (1953) の認知発達理論を応用して、多くの心理的メカニズムは、アタッチメントワーキングモデルを確証するように働くという同化のプロセスと、現在の社会的環境に応じて、アタッチメントモデルを改訂、更新するという調節のプロセスを仮定している (Bowlby, 1969/1982)。すなわち、同化プロセスを通じて環境選択していくことにより、内的作業モデルの安定性は増すが、内的作業モデルと一致しない環境に直面したとき、調節プロセスによって、自らのモデルを改訂すると Bowlby は主張している。

1-3-2 乳幼児期のアタッチメントの安定性*4

1-1 で述べた乳児期におけるストレンジ・シチュエーション法を用いたアタッチメントタイプの時間的安定性は、1 ヶ月から 12 ヶ月間の測定間隔において 45% から 96% と、幅はあるものの一般的には高いものであった (詳細は Scharfe, 2003 を参照)。これらの結果は、乳児期におけるアタッチメントタイプは、すでに比較的安定したものではあるが、変化する可能性があることを示唆するものである。このように研究結果にある程度の差が生じた理由として、アタッチメントタイプにおける安定性は生活環境が安定している時には確保されるが、生活環境が安定していない時には変化が生じるのではないかと考えられている (e.g., Egeland & Farber, 1984; Egeland & Sroufe, 1981)。

乳児期に測定されたアタッチメントタイプが、その後も継続しているかを検証するためには、縦断的に検証しなければならないが、先述したストレンジ・シチュエーション法は、測定可能な年齢が決められている (基本的には 2 歳くらいまでが適用範囲である)。そこで、乳児期以降に適用可能な測度がいくつか開発されており、乳児期に測定されたアタッチメントタイプとそれを比較することによって、その連続性を検証している。例えば、ストレンジ・シチュエーション法を改訂し、幼児期にまで拡張した Main & Cassidy (1988) は、12 ヶ月時のストレンジ・シチュエーション法と 6 歳時のこのシステムで、母親へのアタッチメントタイプの一致率は 82% ($\kappa = .76$)、父親へのアタッチメントタイプの一致率は 62% ($\kappa = .28$) であることを示した。このような結果は、乳幼児期のストレンジ・シチュ

ーション法の安定性と同様、乳児期から幼児期にかけてのアタッチメントタイプの連続性は、比較的安定したものではあるが、変化する可能性があることを示唆するものである。しかし、Bowlby (1979) は、児童期くらいまでは、かなり内的作業モデルの変化に関して柔軟性のある時期であると考えていたため、乳児期から幼児期・児童期までは、内的作業モデルが変化する可能性があっても当然のことであると思われる。

1-3-3 乳児期から成人期のアタッチメントの連続性

いくつかの研究で、乳児期に測定したアタッチメントタイプを縦断的に成人になるまで追跡したものがある。乳児期にストレンジ・シチュエーション法によって測定されたアタッチメントタイプと、成人期にアダルト・アタッチメント・インタビュー (George et al., 1985) によって測定されたアタッチメントタイプとの一致率を求めることによって、乳児期から成人期へのアタッチメントタイプの連続性を検証している。このような研究の結果は、一貫するものではなかった。いくつかの研究 (e.g., Hamilton, 2000; Iwaniec & Sneddon, 2001; Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim, 2000) では、有意なアタッチメントタイプの連続性を示し、他の研究 (e.g., Lewis, Feiring, & Rosenthal, 2000; Weinfeld, Sroufe, & Egeland, 2000) では、有意なアタッチメントタイプの連続性は見られなかった。有意なアタッチメントタイプの連続性を示した研究においても、その一致率は 61-64% であり、完全な一致率を示すものではなかった。このような結果は、乳児期や幼児期のアタッチメント分類の安定性や連続性の研究結果と比較して若干その連続性は低くなっており、内的作業モデルが変化する可能性が存在することを示唆するものである (Hamilton, 2000; Waters et al., 2000)。

内的作業モデルの変化に関する要因として、Waters et al. (2000) は、12 ヶ月時のストレンジ・シチュエーション法と 20-22 歳時のアダルト・アタッチメント・インタビューとのアタッチメントタイプの連続性を調べた結果、36% の個人はアタッチメントタイプを変化させており、アタッチメントタイプが変化した個人は、1 つ以上のネガティブなライフイベント (親の喪失や親の離婚、家族からの身体的・性的虐待、親の精神疾患) を経験していることを示した。一方、Hamilton (2000) は、12 ヶ月時のストレンジ・シチュエーション法で分類されたアタッチメントタイプと 17-19 歳時のアダルト・アタッチメント・インタビューで分類されたアタッチメントタイプの連続性を調べた結果、37% の個人がアタッチメントタイプを変化させていたが、アタッチメントタイプを変化させることとネガテ

ィブなライフイベントを経験することとの関連は示さなかった*5。このように、長期の縦断研究におけるアタッチメントタイプを変化させる要因は明確になっていない。Waters, Weinfield, & Hamilton (2000) は、アタッチメントタイプを変化させる要因は、ネガティブなライフイベントによって生じた養育者の実際の応答性や利用可能性の変化であると示唆している。

先に述べた乳幼児期のアタッチメントタイプの安定性や連続性よりも長期間の追跡調査である乳児期から成人期に至る連続性に関する結果の方が低いことは、乳児期と成人期を比較した研究の方が長期間の測定であるが故にネガティブなライフイベントを経験する可能性が高いことが考えられる。しかし、これらの長期間の追跡研究の結果は、いつ変化が生じたかが示されているわけではない。先述したように、Bowlby (1979) は、内的作業モデルについて、児童期くらいまでは、かなり可変性のある時期であると考えていた。すなわち、ここで示された研究は、まだ内的作業モデルの可変性が残されていた時期である児童期以前における変化であるかもしれない。

1-3-4 青年期、成人期のアタッチメントの安定性

青年期や成人期におけるアタッチメントタイプの安定性を測定することは、内的作業モデルの変化可能性を考慮する際には重要である。なぜなら、内的作業モデルの可変性がかなり減少していると考えられている青年期以降に、アタッチメントタイプに変化が生じないのであれば、先述した Bowlby (1973) の仮定は、支持されるからである。1-2でも述べたように、青年期や成人期のアタッチメントの個人差を測定する方法は、大きく分けて2つの伝統がある。1つは、乳児のストレンジ・シチュエーション法によるアタッチメントの個人差を予測するために開発されたアダルト・アタッチメント・インタビューであり、もう1つの伝統は、現在の恋愛関係や友人関係といった関係性に関する信念をもとにアタッチメントの個人差を自己報告式の質問紙を用いて測定するものである。前者は親子関係を扱うことから発達心理学的研究、後者は恋愛関係や友人関係、対人葛藤や対人魅力といったトピックを扱うことから社会・人格心理学的研究と分類されることが多い（アダルト・アタッチメント・インタビューと質問紙による測定については、安藤・遠藤, 2005 の Topic 6-1, 6-2 参照）。

それでは、このような異なる伝統を持つアタッチメント分類は、それぞれどのような安定性を示すのであろうか。面接法であるアダルト・アタッチメント・インタビューを用い

たアタッチメントタイプの安定性を検証した研究では、3 ヶ月から 12 年の間隔で行われたテストー再テストは、77%から 90%同じ分類であった (e.g., Benoit & Parker, 1994). さらに、アダルト・アタッチメント・インタビューによるアタッチメント分類を得点化したアダルト・アタッチメント・インタビュー-Q ソートを用いたテストー再テストは、 $r = .61$ であった (Allen, McElhaney, Kuperminc, & Jodl, 2004). 一方、質問紙を用いたアタッチメントスタイルの安定性を検証した研究では、1 週から 25 年の間隔で行われたテストー再テストの平均相関は、.56 (.47-.70) であった (e.g., Baldwin & Fehr, 1995). これらの結果は、アダルト・アタッチメント・インタビューと質問紙法という異なる伝統を持つ方法のどちらも中程度の安定性を示しており、乳幼児期の安定性や、乳児から成人期への連続性の研究と同様、個人は青年以降もある一定の変化可能性が存在することを示している。

1-3-5 内的作業モデルの変化のモデル

これまで、内的作業モデルが反映していると考えられるアタッチメントタイプやアタッチメントスタイルの変化可能性について述べてきた。これらの研究は、どの年代においても、多くの個人は内的作業モデルを変化させないが、その一方で、変化可能性が存在するというを示している。さらに、このことは、質問紙で測定されるような意識レベルだけではなく、アダルト・アタッチメント・インタビューなどで測定されるような無意識レベルにも及んでいる。そこで、これ以降は、内的作業モデルの変化が生じるプロセスについて、簡単に検討していく。現在では、内的作業モデルの変化に関するモデルがいくつか提唱されている。

第 1 のモデルとして、乳児期から成人期までのアタッチメント分類の連続性に関するレビューから導き出した Fraley (2002) のプロトタイプモデルがある。Fraley (2002) によると、プロトタイプモデルは、乳幼児期に形成された内的作業モデルが、プロトタイプモデルとして働き、その軸に沿って、現在の環境に応じた浮動性を示すというものである。すなわち、尺度の再テスト信頼性を調べているような短期的な変化は生じるが、それは、ある基準となる軸に沿ったもので、長期的には、安定しているというのだ。乳児期に形成された内的作業モデルは、感覚運動的であり、手続き的であり、言語に頼らないものである。そのため、前言語的ワーキングモデル（それはある種類の恐怖に対する無意識的予測や反射のような反応を含む）は、人の予測、恐怖、防衛、行動に無意識的に影響を与えるがゆえに、後の親密な関係で再び活性化される傾向がある。この無意識的影響は、幼少の

プロトタイプと適合する対人経験を探し出したり、再構成したりする人の傾性や、プロトタイプと一致した方法で相互作用を評価、解釈、再生する人の傾性から推測される (Mikulincer & Shaver, 2007 参照)。このような見解は、先述した Bowlby (1969/1982) の同化プロセスと一致するものであると考えられる。

第2のモデルは、ライフストレスモデル (Davila & Cobb, 2004) である。ライフストレスモデルは、先述した Bowlby (1969/1982) の調節プロセスと一致するものである。比較的安定している内的作業モデルは、生活環境の変化 (ライフイベント) に対する適応として変化が生じる。このモデルは、乳児期の研究から支持されている。例えば、Waters et al. (2000) は、親の喪失や離婚、親や自分の人生を脅かすような重篤な病気 (例えば、癌や心臓疾患) などのあまり良くない生活環境であった子どもは、最も良く変化することを示唆している。このような環境では、それまでの養育者との関係に変化が生じ、個人は内的作業モデルを変化させてしまうのではないかと考えられている。

第3のモデルは、個人差モデル (Davila, Burge, & Hammen, 1997) である。ある脆弱性 (e.g., 親や個人の精神障害、人格障害) を持つ人は、明確ではないワーキングモデルを発達させ、内的作業モデルをよく変動させる。個人差モデルによると、2 時点間での変化は、必ずしも内的作業モデルの変化を示しているわけではない。すなわち、明確な内的作業モデルを持たないが故に、アタッチメントの個人差を測定する度に内的作業モデルを変化させるような個人によって、上述の変化可能性が示されたかもしれないのである。この見解に沿うと、脆弱性を持つことなく育った個人は、乳幼児期に内在化したモデルは、かなり強固なものであり、その一方で、脆弱性を持ち、明確な内的作業モデルを内在化させなかった個人の存在が、あたかも内的作業モデルの変化が生じているように示していると考えられる。

上述の3つのモデルは、重なり合う部分も多くあるが、明らかに異なる見解を示している。たとえば、プロトタイプモデルは、一見内的作業モデルは変化しているかのように見えるが、それらは環境の変化によって生じた“状態”の変化であり、根本的な変化ではないということを示唆している。一方、ライフストレスモデルは、環境の変化に応じて、“特性”として内的作業モデルの変化が生じることもあると示唆している。個人差モデルは、内的作業モデルが変化するかどうかということ自体が“特性”であると示唆している。

成人のアタッチメントタイプの安定性 ($r = .54$) が児童期に観察されたもの ($r = .39$) より高く、プロトタイプモデルによって作られた予測とよく適合する (Fraley &

Brumbaugh, 2004) など、プロトタイプモデルを支持する研究は数多く存在する。また、青年期以降のライフストレスモデルを支持した研究は、結婚 (e.g., Davila, Karney, & Bradbury, 1999; Crowell, Treboux, & Waters, 2002), 親になること (e.g., Simpson, Rholes, Campbell, & Willson, 2003) といったポジティブなライフイベントが、個人のアタッチメントスタイルを安定型に変化させる可能性を示した。しかしその一方で、恋愛関係におけるさまざまな対人ストレスと内的作業モデルの変化との関連を支持することに失敗した研究も多い (e.g., Baldwin & Fehr, 1995; Scharfe & Bartholomew, 1994; Davila et al., 1997)。さらに、児童期までの脆弱性が成人のアタッチメントパターンにおけるより劇的な変化と関連すると示唆することで個人差モデルを支持している研究も数多く存在する (Allen et al., 2004; Cozzarelli, Karafa, Collins, & Tagler, 2003; Davila et al., 1997; Davila & Cobb, 2003; Davila et al., 1999)。このように、これらのモデルはどれが最も優れたモデルかということについて、まだ決着がついているわけではない。

1-4 本論文の構成

これまでの節では、1-1 においてアタッチメント理論の概要、1-2 において青年期・成人期以降のアタッチメント研究のレビュー、1-3 において時間的安定に関するレビューを行った。青年期以降のアタッチメント研究は、概ねアタッチメント理論通り、対人関係の取り方、感情制御、認知スタイルなどにおいて、アタッチメントスタイルの違いが示されたが、これらの青年期・成人期のアタッチメント研究は、2 つの内的作業モデルに関する“時間”にまつわる仮定によって行われている。その1つは、乳幼児期に乳児とアタッチメント人物との相互作用によって形成された内的作業モデルは、パーソナリティのように働くということである。Bowlby (1969/1982) は、アタッチメントはパーソナリティ発達に影響を与えると述べており、乳幼児期に形成された内的作業モデルは後の対人関係における関係性の認知や感情のコントロールの鋳型となると述べている (Bowlby, 1973)。このため、青年期以降のアタッチメント研究では、アタッチメントスタイルをパーソナリティ特性のように扱い研究が行われていることが多い。Krahé (1992) によると、パーソナリティを定義するものの1つとして、持続的に安定しているということが挙げられる。すなわち、パーソナリティの持続性や安定性を示すためには、継時的、通状況的に個人内で一貫しているということが必要である (Krahé, 1992)。中尾・加藤 (2005) は、青年期以降のアタッチメント研究が、このような前提に立ち行われており、アタッチメントスタ

イルによるアタッチメント行動の違いが状況一貫性を持つという“暗黙の前提”が存在していると述べている。しかし、同一の対象との比較的長期にわたる対人関係を考えると、内的作業モデルに依拠した対人認知を常に行っているかは疑わしい。なぜなら、パーソナリティのように内的作業モデルに常に依拠した対人認知を行うより実際にその人物がどのような人物かを認知するほうが適応的であると考えられるからである。関係が進展していく中でその人物に対する情報が増えていくと、内的作業モデルに依拠した認知を続け続ける必要がないと考えられる。しかし、まだ対象がどのような人物であるかがわからない、あるいは、相手が全くの他人であるときには、内的作業モデルを用いた対人認知を行うことが適応的になると思われる。そこで、本論文の第 2 章では、2-1 と 2-2 において、全く情報がない見知らぬ他者に対するアタッチメントスタイルによる行動の違いが生じるかを質問紙法と行動観察法によって検証した。先に述べたように対人情報がほとんどない他者である初対面の他者に対して最も内的作業モデルを用いた認知を行っていると考えられる。そこで、初対面の他者に対する認知、および、行動の両側面からとらえることで、上述の仮説に対してより明確な説明を行うことが可能になると考えられる。次に、2-3 では、対人情報の違いに注目し、交際を行っている個人を対象に、内的作業モデルを用いた恋人の認知に関して交際期間による違いが生じるかを検証した。関係を持っている期間の違いによって、そのパートナーに対する情報量が違ってくる。そのような情報量の違いによって、相手に対する認知も異なってくると考えられ、認知が異なるのであれば、常に内的作業モデルに依拠した対人認知を行っているとは限らないと思われる。これらのことを検証することで、今後、内的作業モデルが実際の対人関係においてどのように機能しているかをより詳細に知ることができるだろう。

次に、もう 1 つの内的作業モデルに関する“時間”にまつわる仮定は、時間的安定性に関するものである。Bowlby (1979) は、幼少期の乳児—アタッチメント人物関係において形成された内的作業モデルは、いったん内在化されると児童期くらいまでは可変性はあるものの、その後は可変性が減じていくと述べた。青年期以降のアタッチメント研究は、この内的作業モデルは変化しにくいという仮定に基づいて行われている。そこで、本論文では、先の 1-3 において、この仮定を検証するために、内的作業モデルが反映していると考えられるアタッチメントタイプやアタッチメントスタイルの時間的安定性に関するレビューを行った。そこで示された研究では、どの年代においても多くの個人は内的作業モデルを変化させないが、その一方で変化可能性が存在するというを示している。さらに、

このことは、質問紙で測定されるような意識レベルだけではなく、ストレンジ・シチュエーションで観察されるような行動レベルやアダルト・アタッチメント・インタビューなどで測定されるような無意識レベルにも及んでいる。アタッチメントスタイルが変化する要因に関して、アタッチメント理論の提唱者である Bowlby (1979, 1980) は、内的作業モデルの永続性を仮定する一方で、個人が内在化している内的作業モデルにそぐわない状況が生じたとき、その内的作業モデルを新しいモデルに置き換えて環境に適応することを示唆している。また、Bretherton (1990) は、コミュニケーションが内的作業モデルの改定を促進すると主張している。そこで、本論文の第 3 章では、コミュニケーションの応答性の認知ということに焦点を当てて、アタッチメントスタイルの変化に関する検証を行なった。青年期において、両親に代わる重要な他者として恋人が選択されることが多く (Hazan & Zeifman, 1994)、そこで最初に、3-1 において、恋人との関係におけるアタッチメントスタイルの変化について検証した。次に、恋人のような重要な他者でなくとも、対人環境の変化によって内的作業モデルが変化するかを検証するために、3-2 において、新しくできた友人との関係におけるアタッチメントスタイルの変化について検証した。さらに、自己に関する再構成の時期 (平石, 1990) であると考えられる青年期のみではなく成人期において内的作業モデルの変化可能性を検証するために、3-3 において、恋愛関係よりも強いコミットメントを示すと考えられる夫婦関係の中の出産時に焦点を当て、アタッチメントスタイルの変化について検証を行った。

最後に、本研究の総合考察を 4 章で行った。

第2章 他者に関する情報量と内的作業モデルの機能

第1章において記したように、乳児—アタッチメント人物との関係を調査することから始まったアタッチメント研究は、青年期以降においても行われている。これは、乳幼児期に形成された内的作業モデルが後の対人関係を認知する際に鋳型のような働きをし、パーソナリティのように働くという内的作業モデルに関する仮定を前提としている (Bowlby, 1973, 1980)。実際の対人関係を考えたとき、パーソナリティのように内的作業モデルを用いた対人関係に関する認知は常に生じているのであろうか。我々が他者と接する状況を考えたとき、常に自らの経験によって得ている知識の枠組み（たとえば、ステレオタイプなど）を用いて他者に関する認知を行うことはもちろんあり得るが、それだけでは適応的であるとはいえないと思われる。内的作業モデルも知識の枠組みの一つであると考えられるが、この知識の枠組みにもかかわらず、状況に応じてその他者のことを正確に認知する方が適応的な場合もある。長期にわたる関係を考えてみると、常に内的作業モデルのような知識の枠組みに依拠した対人認知を行うよりも、そうした枠組みにとらわれず、その人物がどのような人物か、その人に関するさまざまな情報からその人物を認知する方が適応的であると考えられる。一方で、他者に対する情報がほとんど無いときには、内的作業モデルのような知識の枠組みを用いることで、情報のない他者に対して対応することが可能になるとと思われる。そこで、第2章では、最初に、最もその人の情報がないと考えられる見知らぬ他者を対象に内的作業モデルの機能について検証することとした。2-1では、質問紙を用いて全く情報がない見知らぬ他者、すなわち、初対面の人に対する行動にアタッチメントスタイルの違いが生じるかを検証した。2-2では、2-1の研究のように質問紙による想像された初対面の他者ばかりでなく、実際の初対面の他者に対する行動においても、アタッチメントスタイルの違いが生じるかを検証した。次に、2-3では、他者の情報の保持量によって内的作業モデルに依拠した対人認知を行うかどうかを検証するために、恋愛関係にある二人の交際期間によって内的作業モデルの機能が異なるかということについて検証した。

2-1 初対面の人に対する内的作業モデルの機能（質問紙研究から）*6

第1章で述べたように、Bowlby (1969/1982) は、乳幼児が不安やストレスが生じたときに、アタッチメント人物に接近を行うことでその不安やストレスを軽減するというアタ

ッチメント理論を提唱した。このアタッチメント理論では、乳幼児期にアタッチメント人物との関係で行われた相互作用がモデル（内的作業モデル）となり、そのモデルは後の対人関係の鋳型となり、個人の行動を方向付けると提唱している（Bowlby, 1973）。このような前提により青年期以降のアタッチメント研究は行われている。しかし、個人は常に内的作業モデルを用いて対人認知を行い、その結果として行動するのであろうか。乳児期のアタッチメント研究では、不安やストレスを生じさせやすい新奇な場面において、乳児がアタッチメント人物である母親にアタッチメント行動を現すかどうかということに焦点が当てられていた（Ainsworth et al., 1978）。同様に、青年期以降のアタッチメント研究においても、個人は、不安や恐怖、ストレスを感じるような場面で、アタッチメント人物に対してアタッチメント行動を現すことが示されている。例えば、Fraley & Shaver (1998) は、空港で恋人のどちらか一方が飛行機に乗り込み、もう一方の人が見送るという状況において、アタッチメントスタイルによって別れ際の行動が異なるかを観察した。回避型傾向が高い人は、接近を維持するような行動（例えば、パートナーと目を合わせる）を行わず、サポートやケアも求めないことを示した。アンビバレント型傾向が高い人に関する特徴的な行動は示されなかった。また、Collins & Feeney (2000) は、恋愛関係にあるカップルを対象に、どちらかが恋人にストレスのある話題を述べている時の行動を観察した。回避型傾向の高い人は、間接的なサポート要求（サポートをほのめかすことや不機嫌になること）を示した。一方、アンビバレント型傾向が高い人は、道具的サポートや応答（傾聴や理解）を表すことが少なく、その話題を却下することやその話題からの逃避というようなネガティブなサポート供給行動を多く表すことを示した。

上述のように、青年期以降のアタッチメント研究では、不安や恐怖、ストレスなどのネガティブな感情が生じたときの行動がアタッチメントスタイルによって異なることを示している。これらの研究は、それまでに関係が進展しているアタッチメント人物との相互作用に焦点が当てられている。Bowlby (1969/1982) は、アタッチメントはパーソナリティ発達に影響を与えると述べており、内的作業モデルが影響を与えるのは必ずしも進展した関係である必要がないと思われる。なぜなら、関係が進展しているアタッチメント人物との相互作用は、個人の内的作業モデルそのものではなく、それまでの二者間の関係性が反映されるのではないかと考えられるからである。Kobak (2004) は、青年・成人のアタッチメント人物に対する行動（アタッチメントスタイル）が、安定したパーソナリティとしての産物というよりむしろ、現在の関係パターンの産物として考えるべきであると述べて

いる。このような点から、個人の内的作業モデルが最も発現されるのは、相手に対する情報がいくらかある時よりも、全くない時ではないかと考えられる。個人は、初対面の他者がどのように振る舞うかについての知識はなく、これまでの自分の経験から形成された対人認識、いわゆる、内的作業モデルに基づいて、その他者の行動を予測し、自らの行動の基盤とするはずである。そこで、本研究では、青年期のアタッチメントスタイルと初対面の人に対する対人行動との関連を検証することを目的とする。

方法

対象者と手続き

本研究では、大学での講義時間においてフェイスシートと2種類の質問紙を冊子にしたものを配布し、その場で回答を行わせた。調査対象者は、大学生204名（男性52名、女性152名）であった。対象者の平均年齢は20.0歳（範囲：19～24歳）であった。

質問紙

アタッチメントスタイル 本研究では、アタッチメントスタイルを測定するために、Hazan & Shaver (1987) が作成した強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度の日本語版（戸田, 1988）を用いた。強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度は、3つのアタッチメントスタイル（安定型、回避型、アンビバレント型）を示したパラグラフから最も自分に合うものを対象者が選択するものである（詳細は付録Ⅰを参照）。選択されたアタッチメントスタイルは対象者のアタッチメントスタイルとなる。

初対面の人に対する行動 本研究では、初対面の人との対人行動を測定するために、対人関係性尺度（高井, 1999）を用いた。対人関係性尺度は、対人関係における現代の青年期心性や受容を測定するものであり、“閉鎖性・防衛性”，“ありのままの自己”，“他者依拠”，“他者受容”，“自己優先”の5つの因子から成っている。元来、対人関係性尺度は、全般的な対人行動を測定するように作成されているが、本研究では、初対面の人との対人行動を測定するために、質問項目の“人”を“初対面の人”と変更して用いた。閉鎖性・防衛性の項目例は、“私は初対面の人に対して心を閉ざしているような気がする”や“私は初対面の人とのつきあいに臆病な方である”であり、7項目から成っている（詳細は付録Ⅱを参照）。ありのままの自己の項目例は、“私は少しぐらい傷つくことがあっても、自分のあ

りのままの姿で初対面の人と接している”や“私は初対面の人とは少しぐらい傷ついても本音で言い合っている”であり、4項目から成っている。他者依拠の項目例は、“私は初対面の人に自分がどう思われるかということがとても気になる”や“私は何かにつけて、すぐに初対面の人と比較してしまう”であり、6項目から成っている。他者受容の項目例は、“私はちょっとしたことでも、初対面の人の世話をしてあげるのが楽しい”や“私は初対面の人の良いところ、すぐれているところを進んでほめる”であり、7項目から成っている。自己優先の項目例は、“私は初対面の人言うことに耳を傾けることより、自己主張を優先してしまう”や“私は初対面の人を理解しようとするよりも、自分のことを分かってほしいという気持ちの方が強い”であり、4項目から成っている。対人関係性尺度の全項目数は28項目であった。回答者は各項目について“全く当てはまらない”(1点)から“よく当てはまる”(5点)の5段階評定を行った。対人関係性尺度の信頼性係数は、閉鎖性・防衛性で $\alpha = .82$, ありのままの自己で $\alpha = .72$, 他者依拠で $\alpha = .74$, 他者受容で $\alpha = .65$, 自己優先で $\alpha = .58$ であった。

結果

アタッチメントスタイルの分類

本研究では、強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度の選択に基づき、回答者は安定型、回避型、アンビバレント型に分類された。安定型に分類された個人は137名(67.2%)、回避型に分類された個人は49名(24.0%)、アンビバレント型に分類された個人は18名(8.8%)であった。

アタッチメントスタイルと初対面の人に対する行動

アタッチメントスタイルと初対面の人に対する行動との関連を検討するために、対人関係性尺度の5因子の尺度得点それぞれを従属変数、アダルト・アタッチメント尺度の3分類を独立変数とした一要因分散分析を行った。その結果、自己優先以外の4因子においてアタッチメントスタイルの主効果が有意であった(Table 1 参照)、閉鎖性・防衛性: $F(2, 202) = 17.34, p < .001$; ありのままの自己: $F(2, 202) = 6.69, p < .01$; 他者依拠: $F(2, 202) = 15.04, p < .001$; 他者受容: $F(2, 202) = 9.92, p < .001$ 。そこで、各従属変数に関して、Tukey の HSD による多重比較を行った。閉鎖性・防衛性において、不安定型の個人(回避型: $M = 25.1, SD = 4.47$; アンビバレント型: $M = 25.7, SD = 4.35$)は、安定型の個人(M

= 21.0, SD = 4.91) より初対面の人に対して閉鎖的・防衛的であった。ありのままの自己において、安定型の個人 (M = 10.6, SD = 2.84) は、回避型の個人 (M = 8.96, SD = 3.02) より、初対面の人に対してありのままの自己を出すことができるようであった。他者依拠について、アンビバレント型の個人 (M = 21.4, SD = 3.78)、回避型の個人 (M = 19.6, SD = 2.38)、安定型の個人 (M = 17.9, SD = 2.88) の順に初対面の人に依拠していた。他者受容について、回避型の個人 (M = 21.2, SD = 3.99) は、安定型の個人 (M = 23.3, SD = 3.13) やアンビバレント型の個人 (M = 24.9, SD = 4.76) より初対面の人を受容しないようであった。自己優先において、アタッチメントスタイルの有意な主効果は認められなかった。

Table 1 アタッチメントスタイル別の対人関係性尺度得点 (SD)

	安定型	回避型	アンビバレント型	F 値
閉鎖性・防衛性	21.0 (4.91) _b	25.1 (4.47) _a	25.7 (4.35) _a	17.34***
ありのままの自己	10.6 (2.84) _a	8.96 (3.02) _b	9.11 (3.27) _{ab}	6.69**
他者依拠	17.9 (2.88) _c	19.6 (2.38) _b	21.4 (3.78) _a	15.04***
他者受容	23.3 (3.13) _a	21.2 (3.99) _b	24.9 (4.76) _a	9.92***
自己優先	10.8 (2.18)	11.0 (1.74)	9.89 (2.42)	1.95

** $p < .01$ *** $p < .001$

注: 各行で異なった下付き文字のついた値は Tukey の有意差比較で 5%水準で有意差があった。

考察

本研究では、青年期のアタッチメントスタイルと初対面の人に対する対人行動との関連を検証した。安定型の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が低く、ありのままの自己を表出し、他者に依拠せず、他者を受容できることが示された。一方、回避型の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が高く、ありのままの自己を表現せず、他者を受け入れないことが示された。また、アンビバレント型の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が高く、他者に依拠し、他者を受容することが示された。このような結果は、乳幼児期のアタッチメント関係における相互作用によって形成された内的作業モデルを反映していると考えられる。すなわち、他者が応答的であった経験を持つ安定型の個人は、自らが愛される価値のある存在であり、他者が愛してくれることに信頼を持っているので、

たとえ初対面の人であっても、そんなに閉鎖的・防衛的になることもなく自己を素直に表現することができ、他者に過剰に頼ることもなく他者を受け入れられるのではないかと考えられる。また、他者から拒絶されることが多い経験を持つ回避型の個人は、自己を素直に表現せず、他者を受け入れられない傾向にあり、その人に関する情報がほとんどない初対面の人であればなおさらであろう。さらに、アンビバレント型の個人は、一貫した応答をアタッチメント人物から受けなかったため、他者を近くに留めておくために、自己を素直に表現できず、閉鎖的・防衛的でありながら過剰に他者に依存するのではないかとと思われる。Bowlby (1980) は、回避型の個人は、対人関係における防衛的な手段として、アタッチメント行動システムを不活性化させ、一方で、アンビバレント型の個人は、対人関係における防衛的な手段としてアタッチメント行動システムを過活性化させると示唆した。上述の結果は、Bowlby (1980) が示唆するように、回避型とアンビバレント型の個人が、青年においても、初対面の人に対する防衛的な手段としてアタッチメント行動システムを不活性化、または、過活性化させていると思われる。中尾・加藤 (2005) は、状況の違いによって内的作業モデルを用いた行動の違いが生じるかを質問紙を用いて調べた結果、初対面の他者に対して、内的作業モデルを用いた行動の違いが生じやすいことを示した。この研究結果と同様に、本研究における結果は、青年期における初対面の人に対する行動が、内的作業モデルに基づいた行動であると考えられる。さらに、先行研究 (e.g., Fraley & Shaver, 1998) では、アンビバレント型の個人において特徴となる行動を示すことが難しい傾向があったが、本研究では、アンビバレント型の個人において特徴となる行動を示すことができた。すなわち、アンビバレント型の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が高く、他者を受容し、他者に依拠することが示された。本研究の結果、内的作業モデルが反映するのは、ある一定継続している関係ばかりでなく、初対面の人のように全く関係を持っていない人に対しても生じるようである。継続している関係では、内的作業モデルを用いた認知に基づく行動よりもパートナーとの関係性が現れやすいが、初対面の人に対しては、関係が形成されていないために、内在化されている内的作業モデルにより依拠した認知に基づく行動が反映されているのではないかとと思われる。

しかし、注意しなくてはいけないこととして、回避型やアンビバレント型の個人が閉鎖性・防衛性得点が高かったといっても、その値は1項目あたり 3.10 (3 の回答は“どちらでもない”である) であった。すなわち、回避型やアンビバレント型の個人は、初対面の人に対してそれほど強い防衛性を示しているわけではないが、安定型と比べると防衛性が

高いということである。乳児期のアタッチメント研究において、安定型と回避型、アンビバレント型の3つのアタッチメント分類はそれぞれの環境に対して適応的なタイプであり、実際に臨床的な視点から問題となるのは混乱型であると考えられている（遠藤, 2007）。本研究においても、回避型やアンビバレント型の個人は、安定型の個人と比較すると初対面の人に閉鎖的・防衛的ではあるが、それが対人面で不適応につながるというほどのものではないと考えられる。同様の傾向は、安定型の個人のありのままの自己（1項目の平均値 = 2.65）や他者依拠（1項目の平均値 = 3.08）、回避型の個人の自己受容（1項目の平均値 = 3.46）においても当てはまる。これらのことから、アタッチメントスタイルによる一定の傾向はあるものの初対面の人に対する個人の態度には大きな違いが生じないと思われる。さらに、初対面の人に対して適応的行動か不適応的行動かを調べるために、乳児期の混乱型にそうとうする未解決型と他の3つのタイプとの行動の違いを検証する必要があると思われる。

また、本研究では、自己優先に関して、アタッチメントスタイルの違いを示さなかった。日本人は、相互協調的自己観を持っている（北山, 1994）。北山（1994）によると、日本を含む東洋の国では、自己と他者は根源的に結びつき、そのため、他者と相互依存的、協調的な関係を持続することにより、自己の社会的存在を確認し、ひいては自己実現が達成される。このような視点が相互協調的自己観である。相互協調的自己観を持つ文化では、人の立場に立つことや他者の気持ちを察することがその文化の特徴として挙げられる（北山・唐澤, 1995）。このように、相互協調的自己観を持つ日本人を対象とした本研究では、特に相手が初対面の場合、自己を優先させる行動が現れにくいと考えられるため、本研究では、自己優先とアタッチメントスタイルとの関連が示されなかったと思われる。さらに、自己優先に関して、本研究での信頼係数が低かった（ $\alpha = .58$ ）。このような信頼係数の低さは、先述の考察を揺るがすかもしれない。このため、初対面の他者に対する行動を測定する場合、自己優先行動を測定する必要があると思われる。

2-2 初対面の人に対する内的作業モデルの機能（行動観察研究から）*7

先の2-1における研究では、内的作業モデルに基づく行動を表出させるために初対面の人との対人行動を用いたが、質問紙による調査研究であった。そのため、実際に初対面の人に対する時の行動もアタッチメントスタイルによって違ってくるのかということには疑問が残ったままである。Simpson, Rholes, & Nelligan (1992) は、実験室に来訪した恋

愛中のカップルの女性のみを待合室から不安を喚起するような実験室に連れて行き、脈派を取ることや「ほとんどの人で生じると考えられる不安や苦悩の状況にさらされる」というような教示を行うことによって不安を与え、その後の二人の相互作用を観察した。安定型傾向の高い女性は多くのサポートを求め、安定型傾向の高い男性は多くのサポートを与えた。一方、回避型傾向の高い女性はあまりサポートを求めず、回避型傾向の高い男性はほとんどサポートを与えなかった。アンビバレント型傾向の高い個人では有意な効果は示されなかった。また、日本でも、若尾 (2004) が、Simpson et al. (1992) が用いた不安喚起場面を用いて、恋人や友人といった親密な他者への行動にアタッチメントスタイルの違いが生じるかを検証した。この研究では、Simpson et al. (1992) の研究と同様の不安喚起場面に加え、パートナーからの分離・再会を用いることで、アタッチメント行動システムの活性化をより促した。この研究の手続きは、実験に参加している二人のうち、ランダムに選ばれた一人が待合室から離れた場所にある実験室において不安を喚起させられ、その分離前と分離後の行動が観察されるというものであった。結果は、不安が喚起されていない分離前の行動は、アタッチメントスタイルの違いを示さなかったが、不安が喚起された分離後の行動では、アタッチメントスタイルの違いを示した。不安が喚起された分離後において、安定型傾向が高い個人は、不安が少なく、挨拶行動が多く、相手に情報を伝えることが多いというように、不安やストレスが生じたときにも情緒的に安定し、また、パートナーとの相互作用を行うことができるという安定的な行動を示した。一方、不安定型（回避型とアンビバレント型）傾向が高かった個人は、不安が高く、分離時の抵抗行動が多く、挨拶行動が少ないというように、不安やストレスが生じたときに情緒的に不安定になり、また、パートナーに対する適切な相互作用を行いにくいという不安定な行動を示した。このように、不安が喚起されるような状況において、個人は、アタッチメントスタイルによって恋人や友人といった親密な他者に対する実際の行動に違いが生じることが示されている。すなわち、乳児ばかりでなく、青年・成人においても、不安やストレスなどのネガティブな感情が生じるときには、アタッチメント行動システムが活性化し、アタッチメント人物に対してアタッチメント行動が行われると考えられる。しかし、先述したように、友人や恋人のような親密な他者では、二者間の行動は内的作業モデルの反映であるだけではなく、二人の関係性を反映しているのではないかと考える。そこで、本研究では、初対面の人に対する実際の行動がアタッチメントスタイルによってどのような違いが生じるかについて検証した。

方法

対象者

本研究の対象者は、大学生 52 名（男性 15 名、女性 37 名）であった。対象者の平均年齢は 19.2 歳（SD = 1.02）だった。

手続き

対象者は面識のない実験協力者が先に座って待っている待合室に案内された。待合室には 1 つの机に対して横並びに 2 つの椅子が置かれており、対象者には分からないようにビデオカメラが設置されていた。入室した対象者は実験協力者の隣に座った。その後、実験者が入室し、対象者と実験協力者に対して教示を行った。教示内容は、「今から実験の説明をおこないます。まず、実験の準備ができれば、1 人ずつ順番にこの部屋から隣の部屋に移動してもらいます。そこで、簡単なアンケートへの記入を行います。その後、この椅子（電気マッサージ機の写真を見せる）に座って、簡単な記憶の実験をします。実験の答えによって、この椅子から電流が流れます。人体に影響があるほど強い電流ではないので心配する必要はありません。実験は以上です。何か質問はありませんか。実験の準備ができればお呼びしますので、しばらくこの部屋でお待ちください。」というものであり、実験者はその椅子の写真を見せながら教示を伝えた。この説明を終えた時点で、対象者は実験に参加する意志がある場合、同意書に署名した。本研究では、すべての対象者が実験参加に同意した。

次に、実験者は、「実験の準備がある」と言って待合室を退出し、3 分間対象者と実験協力者だけが待合室で待たされた。その間、実験協力者は対象者に話しかけず、対象者から実験協力者に話しかけてきた場合のみ、それに応じることとした。3 分後、実験者が再び待合室に戻ってきた。そして、実験者とともに実験協力者が実験を受けるために待合室から退出し、対象者は一人で待合室に待たされた。5 分後、実験者は実験協力者とともに待合室に戻り、次の実験の準備があるため少し（5 分間）待つように伝え、退出した。この間、対象者が話しかけてきた場合、実験協力者はそれに応じて会話をを行った。対象者が 2 分間話しかけてこなかった場合、実験協力者は、「これから実験ですよ」と対象者に話しかけた。それでも尚会話が発生しない場合、「緊張していますか」と話しかけた。さらに会話が続かない場合は、「簡単だったし、たいしたことなかったですよ」と話しかけた。この 3

度のアプローチの間に対象者と実験協力者との会話が成立した場合、実験協力者は自由に会話を続け、実験協力者から対象者に3度話しかけても会話が継続しなかった場合、実験協力者からはもう話しかけることをしなかった。対象者と実験協力者が待たされたこの5分間が経過した後、実験者が待合室に行き、対象者を実験室に誘導した。対象者はそこで質問紙に記入し、口頭にて待合室に1人で待っている間不安を感じたか、実験協力者のことを知っていたか、実験協力者は話しかけやすかったか等に関する簡単な質問を受けた。また、その後、研究の趣旨や教示した記憶の実験が行われないこと、不安を与えるために電流が流れる椅子を使って記憶の実験を行う教示をしたこと、待合室の様子が録画されていたことが伝えられ、再度、この一連の行動の録画を研究データとして使用することに対する同意をとった。この段階においても、研究に同意しないと答えた対象者はいなかった。さらに、本研究が対象者のその後の精神的健康を害することがないように実験に関して疑問や不安がないかを確認し、何かあれば連絡できるように連絡先を渡した。しかし、後日実験に関して連絡してきた対象者はいなかった。

本研究は実験中に対象者に真実ではないことを教示し、また、不安を高めるような実験が行われたが、最後に説明がなされた。この実験計画に対し、関西学院大学の臨床・調査・実験研究倫理委員会の承認を得ていた（受付番号 2011-13）。

測度

アタッチメントスタイル 本研究では、アタッチメントスタイルを分類するために Relationship Questionnaire (Bartholomew & Horowitz, 1991; 関係尺度) の日本語版 (加藤, 1998/1999) を用いた。関係尺度は、対象者が一般的な他者に対する4つのアタッチメントスタイル (安定型, 拒絶型, とらわれ型, 恐れ型) に関する記述文を読み、最も自分に当てはまると思うスタイルを対象者に1つ選択させるものである (詳細は付録Ⅲを参照)。4つのアタッチメントスタイルは、Bowlby の提案に従い自己観と他者観がポジティブかネガティブかによって規定される。安定型は、ポジティブな自己観とポジティブな他者観から成り、拒絶型は、ポジティブな自己観とネガティブな他者観, とらわれ型は、ネガティブな自己観とポジティブな他者観, 恐れ型は、ネガティブな自己観とネガティブな他者観から成っている。本研究では、選択したアタッチメントスタイルを対象者のアタッチメントスタイルとした。

また、それぞれ記述文に関して、どの程度自分に当てはまるかを、“まったくあてはまら

ない”(1点)から“非常にあてはまる”(7点)の7段階評定で対象者に回答させた。関係尺度は、通常、強制選択されたアタッチメントスタイルを対象者のアタッチメントスタイルとするが、Griffin & Bartholomew (1994) は、関係尺度によって、自己観得点・他者観得点を算出する方法を提案している；自己観得点 = (安定型+拒絶型) - (とらわれ型+恐れ型)，他者観得点 = (安定型+とらわれ型) - (拒絶型+恐れ型)。自己観得点が高いほど自己観がポジティブであり，他者観得点が高いほど他者観がポジティブであることを示している*8。

初対面の人に対する行動 本研究では VTR に録画された行動のうち，実験協力者が待合室に再入室し，対象者が待合室を退室するまでの5分間が分析に使用された。コーディングの基準は，2-1での実際の行動を分析するという意図のもと，2-1で使用された対人関係性尺度（高井，1999）を基に作成された（詳細は付録IVを参照）。対人関係性尺度は，5つの因子（閉鎖性・防衛性，ありのままの自己，他者受容，他者依拠，自己優先）から成っている。他者依拠は，本研究の手続きにおける初対面の人に対する行動として現れにくいと考えられるため，本研究のコーディング基準からは外された。各項目は5段階で評定が行われ，それぞれの合計得点を項目数で割った点数を初対面時の行動得点とした。閉鎖性・防衛性の評定基準は，5項目（“相手に心を閉ざすか”，“相手に対して好意的であるか”，“自分の意見を言うか”，“腕を組んでいるか”，“座っているときの身体の向きはどうか”）から成っていた。閉鎖性・防衛性の評定基準の例は，“相手と逆方向に身体を向ける”（5点），“相手と逆方向に身体を向けられているが，話しかけられた時に正面を向く”（4点），“正面を向いている”（3点），“正面を向いていたが，話しかけられた時に相手に（身体全体を）向ける”（2点），“話しかけられる前から相手の方に身体を向ける”（1点）であった。ありのままの自己の評定基準は，3項目（“自分のことについて言うか；「これから実験ですよ」に対する答え”，“自分のことについて言うか；「緊張していますか」に対する答え”，“表情や話し方は開放的か”）から成っている。ありのままの自己の評定基準の例は，“相手の方をよく見て話す。笑顔も多い。話していないときも相手の方を見る”（5点），“話すときだけ相手の方を見る。相手を見ていないときでも笑顔あり”（4点），“話すときだけ相手の方を見る。相手を見ているときは笑顔あり”（3点），“話すときにほとんど相手の方を見ない。笑顔もない”（2点），“ほとんど話さない。相手の方も見ない。笑顔もない”（1点）であった。他者受容の評定基準は，2項目（“相手の言葉に同意するか”，“相

手の質問に答えて、そこから展開させるか”）から成っている。他者受容の評定基準の例は、“言葉と行動（頷きなど）で同意する。同意の理由などに関して言葉を付け加える”（5点），“（毎回）言葉と行動で同意する”（4点），“言葉と行動で同意するときと、言葉のみ、行動のみの時がある”（3点），“言葉のみか、行動のみで同意する”（2点），“同意せず、行動もない。”（1点）であった。自己優先の評定基準は、1項目（“話の量の割合はどうか”）から成っている。自己優先の評定基準は、“自分のことばかり話す。相手の話は聞かない”（5点），“自分のことについて話す方が多い”（4点），“自分のことについて話すことと、相手の話を聞くことが同じ程度である”（3点），“自分のことについてあまり話さない。相手の話をよく聞く”（2点），“自分のことについては全く話さない”（1点）であった。全評定項目は計 11 項目であった（詳細は付録Ⅳを参照）。無作為に抽出された 10% の VTR は、さらにもう 1 名がコーディングを行った。評定の一致率は 79.1% であった。本研究で用いた初対面の人に対する行動の評定の信頼性係数は、閉鎖性・防衛性で $\alpha = .60$ 、ありのままの自己で $\alpha = .70$ 、他者受容で $\alpha = .45$ であった。なお、自己優先は 1 項目であったので信頼性係数は算出されなかった。

さらに、本研究の実験手続きによって喚起した不安に関して、“全く不安を感じなかった”（1点）から“非常に不安を感じた”（5点）の 5 段階評定を対象者は行った。また、実験協力者に対する話しかけやすさに関して、“話しかけにくい”（1点）から“話しかけやすい”（5点）の 5 段階評定を対象者は行った。

結果

アタッチメントスタイルの分類

関係尺度において分類されたアタッチメントスタイルは、安定型が 11 名（21%）、拒絶型が 1 名（2%）、とらわれ型が 27 名（52%）、恐れ型が 13 名（25%）であった。拒絶型は 1 名だったため、以下の分析には含めなかった。

初対面の人に対する行動

本研究の実験手続きによって喚起した不安に関する平均値は 2.5 点（SD = 1.1）であり、本研究で用いた手続きによって、マイルドな不安が喚起されていることが示された。

また、本研究では、6 名の実験協力者が存在したが、対象者は、実験協力者による話しかけやすさの違いを示さなかった。

初対面の人に対する行動とアタッチメントスタイル

初対面の人に対する行動について、アタッチメントスタイルにおける違いが生じるかを検証するために、アタッチメントスタイルを独立変数、初対面の人に対する行動を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、閉鎖性・防衛性とありのままの自己において、アタッチメントスタイルの主効果が有意であった、 $F(2, 48) = 5.33, p < .01$; $F(2, 48) = 5.04, p < .01$ (Table 2 参照)。閉鎖性・防衛性において Tukey の HSD を用いた単純主効果検定を行った結果、とらわれ型の個人 ($M = 13.4, SD = 2.52$) は、安定型の個人 ($M = 10.3, SD = 3.10$) より高い閉鎖性・防衛性得点を示した。また、ありのままの自己において Tukey の HSD を用いた単純主効果検定を行った結果、安定型の個人 ($M = 12.3, SD = 2.05$) は、とらわれ型の個人 ($M = 9.8, SD = 2.17$) より高いありのまま得点を示した。他者受容と自己優先において、アタッチメントスタイルの主効果は認められなかった。

Table 2 アタッチメントスタイル別の初対面の人に対する行動得点 (SD)

	安定型	とらわれ型	恐れ型	F 値
閉鎖性・防衛性	10.3 (3.10) _a	13.4 (2.52) _b	11.6 (3.28) _{ab}	5.33**
ありのままの自己	12.3 (2.05) _b	9.8 (2.17) _a	10.6 (2.26) _{ab}	5.04**
他者受容	7.6 (1.43)	6.6 (1.69)	6.4 (1.80)	n.s.
自己優先	2.00 (1.18)	1.89 (1.42)	1.85 (1.14)	n.s.

** $p < .01$

注: 各行で異なった下付き文字のついた値は Tukey の有意差比較で 5%水準で有意差があった。

考察

本研究は、観察された初対面の人に対する実際の行動とアタッチメントスタイルとの関連について検証を行った。とらわれ型の個人は、安定型の個人よりも、自らに閉じこもった防衛的な態度をとり、ありのままの自己を素直に表すことができないようであった。この結果は、質問紙でとらえた 2 - 1 の研究と部分的に一致するものであり、現在のアタッチメント人物に対する行動を扱った研究結果 (例えば, 若尾, 2004) とも部分的に一致する

ものであった。不安が生じた場面において大学生のアタッチメント行動システムが活性化され、大学生は不安状況（少し怖そうな実験を受ける前に見知らぬ人と二人きりであるという状況）に対処するために、乳幼児期に内在化されていた内的作業モデルを使用していることを示唆するものであった。このような本研究の結果は、先の2-1において用いられたような質問紙におけるイメージした初対面の人に対する行動ばかりでなく、実際の初対面の人に対してもアタッチメントスタイルによって行動が異なることを示したことは意義あることであると考えられる。

しかし、本研究では、先の2-1において行われた質問紙による初対面の人に対する行動に関する研究と同様に、自己優先に関してアタッチメントスタイルの違いが示されなかった。2-1で述べたように、相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) を持つ我が国では、初対面の人に対する行動として自己を優先させることが少ないと考えられる。また、本研究で見られた自己優先行動は、1項目であり、信頼性や妥当性に欠けるかもしれない。他者受容に関しては、先の2-1において行われた質問紙による初対面の人に対する行動に関する研究では、アタッチメントスタイルの違いが示されたが、実際の初対面の人に対する行動としては、アタッチメントスタイルの違いを示すことができなかった。この違いは、本研究のようにただ実験を待っているときの会話や態度は、他者を受容するような状況ではないために、あまり個人差がみられなかったことが考えられる。さらに、本研究における他者受容の信頼性係数は低かった ($\alpha = .45$)。これは、本研究の結果が信頼のおけるものではないことを示している。そこで、今後、より信頼できる自己優先や他者受容を表す行動を評定に用いることで、再度、アタッチメントスタイルによって初対面の人に対して自己優先が異なるかを検証する必要があると考えられる。

上述のように、本研究では、多少違いが示されなかった行動はあるものの、青年が初対面の人に対して内的作業モデルに基づく行動を行うことが示された。これは、乳幼児期のアタッチメント人物との相互作用を通じて内在化された内的作業モデルが、後の対人関係を認知し、その認知に基づいて行動を方向付けるという Bowlby (1973) の主張を支持するものである。

本研究では、拒絶型の人の研究の参加が少なかったため、分析に加えることができなかった。拒絶型の個人は、乳児期のストレンジ・シチュエーション法における回避型に対応する分類であると考えられている (Bartholomew & Horowitz, 1991)。回避型は、他者から距離をおき、不安や恐怖、ストレスのかかる状況を回避することが特徴とされている。

このように考えると、回避型の個人は、本研究のようにわざわざ実験室に来て、記憶に関して行われるような実験には参加しなかったのかもしれない。今後の課題として、拒絶型のアタッチメントスタイルを持つ個人が参加可能な実験場面を想定する必要があるだろう。また、本研究では、実験協力者はすべて女性であった。すなわち、見知らぬ他者が同性か異性かという分析を行うことができなかった。さらに、実験協力者に対する魅力も測定していない。初対面の他者が同性であるか異性であるか、魅力的であるか魅力的ではないかは、その他者に対する行動に影響を及ぼすと考えられる。今後、このような要因を考慮に入れたとしても、まだ内的作業モデルは見知らぬ他者に対する行動として影響を及ぼすかを検証する必要があると思われる。

2-3 交際期間による内的作業モデルの機能^{*9}

2-1と2-2の研究では、初対面の人に対する行動がアタッチメントスタイルによって異なるかを検証した。これらの研究では、初対面の人に対する行動においてアタッチメントスタイルの違いが示されたが、これらの研究における初対面の方は、その後関係を形成していく人ではなく一回限りの関係である。現実場面では、先の研究のようにその場でしか関わらないような初対面の人ばかりではなく、その後も関係を継続していく他者（友人や恋人など）もいる。そうしたその場限りの対人関係ではなく、関係を継続していく対人関係でも、その初期においてはお互いについての情報は限られたものである。関係が継続して行くに従い、お互いについての情報量も増えてくる。2-1、2-2で示されように、相手に対する情報がない時に内的作業モデルが機能する。そう考えると、継続する関係性において、その交際期間によって、内的作業モデルの機能の程度も違ってくるのではないかと推測される。また、内的作業モデルを用いながらどのように他者と関係を築いていくのだろうか。

Zeifman & Hazan (2000) は、恋人がアタッチメント人物になるまでの段階を、乳児期の乳児-アタッチメント人物関係に対応する4つの段階として考えた。第1段階は、“プレ・アタッチメント”の段階と呼ばれている。この段階では、まだ恋人がいない段階であり、無差別な人物へのシグナル（泣く、見つめる、微笑する、声を出すなど）を送ること、

社会的相互作用の準備性などが特徴として挙げられる。第 2 段階は、“アタッチメントの形成”の段階と呼ばれている。この段階は、二人が恋に落ちたときに訪れる段階であり、それまでの段階で無差別な人物に送っていたシグナルを選択的に送るようになる。さらに、この段階では、お互いにさまざまな個人的な情報を自己開示するようになる。第 3 段階は、“明瞭なアタッチメント”の段階と呼ばれている。第 2 段階までに行われていたシグナルを送ることや個人的な情報を開示することなどの行動は、この段階を通じて減少していく。さらに、この段階では、恋人という際に生じる興奮が減少していき、それに変わって安心感や信頼感が増し、恋人との分離によって分離苦悩が現れるようになってくる。第 4 段階は“目的修正的パートナーシップ”と呼ばれている。この段階は、恋人との会話はより表面的なものになり、見つめ合いや身体接触の頻度や長さは極端に減っていく。さらに、互いの関係以外のものに注意を向け、刺激を求め出す。

この Zeifman & Hazan (2000) のモデルに従うと、第 2 段階は交際初期であり、お互いについての明確な情報がないため、それぞれが情報提供、および、情報収集を行っていると思われる。この不完全な恋人に関する情報を個人は何らかの手段で埋めなければいけないので、それ以前に内在化されている内的作業モデルを利用するのではないかと考えられる。さらに、個人は内的作業モデルに最も適した環境を事前を選択する傾向があること (Bowlby, 1980) から、この段階において、内的作業モデルと合致する人物を交際相手として選択するのではないかと推測される。第 3 段階では、より完全な (実際の) 恋人情報を保持するようになるため、前段階までの個人的な情報のやり取りは少なくなるのではないと思われる。すなわち、この段階では、内的作業モデルを用いるよりも現実的な情報処理を行うのではないかと考えられる。第 4 段階では、現在の恋人に関する情報の収集や自分の情報の提供が少なくなるため、個人的な情報は再び不確かなものになり、その不確かさを埋めるために再び内的作業モデルに依拠した対人認知を行うかもしれない。また、Hazan & Zeifman (1994) は、乳幼児期の乳児とアタッチメント人物との相互作用の際に観察可能な 4 つの構成要素によってアタッチメントを定義した; “安全の避難所”, “安全の基地”, “近接維持”, “分離抗議”。この 4 つの構成要素を行う対象となる人物がアタッチメント人物であり、個人は青年期以降では恋人として 2 年間の交際期間を持つことで、母親から恋人へとアタッチメント人物が移行することを示した。このように、第 4 段階では、恋人が新たなアタッチメント人物と同定されるようになってくる。このような新たなアタッチメント関係が成立する過程において、個人はそれ以前の内的作業モデルと適合し

ない場合、恋人との関係を解消するか、もしくは、自らの内的作業モデルを変化させることで環境との適応をはかるだろう (Bowlby, 1980). すなわち、交際期間が 2 年以降では新たなアタッチメント関係に対応するモデルが個人の対人関係の認知に影響を及ぼすのではないかと考えられる.

以上のことから、交際期間が短いときには、個人は自らの内的作業モデルに合った人を恋人として選択しているため、個人のアタッチメントスタイルと恋人に関する認知との間には関連があると考えられる. また、2 年以上交際を継続している個人も同様に、新たなアタッチメント関係に対応するように自らの内的作業モデルに変化させているために、個人のアタッチメントスタイルと恋人に関する認知との間には関連があると考えられる.

そこで、本節では、内的作業モデルが常に対人認知に作用しているかを検証するための一研究として、青年期のアタッチメント人物である恋人に対して、交際期間による対人情報の処理の違いが生じるかを検証する. 本研究での仮説は、第 1 に、交際期間が短いときには、それ以前の内的作業モデルを用いているため、安定型の人、恋人が応答的であると認知し、不安定型である回避型やアンビバレント型は恋人が応答を回避・拒絶していると認知するだろう. 第 2 に、交際期間が 2 年以上続いている場合には、恋人に関する情報に適合するように内的作業モデルを変化させているため、交際期間が短いときと同様の結果が生じると予測される. 第 3 に、交際期間がその中間である場合は、現実の情報に基づく対人認知を行っているため、このような傾向は生じなくなると思われる.

方法

対象者と手続き

本研究では、現在交際中の異性がいる大阪・兵庫の大学生およびそれに相当する年齢の専門学校生 287 名に質問紙と返信用封筒が入った封筒を配布した. この封筒は 2 通が 1 セットになっており、一方の封筒を現在交際している異性に手渡すように回答者に依頼した. これらの質問紙への回答は、それぞれ独自で行い、お互いの回答は見せ合わないようすること、また、それぞれ独自に郵送するように依頼した. この 574 名分の質問紙のうち 158 名 (男性 69 名, 女性 89 名) が回答し、返信してくれた (回収率 27.5%). 本研究では、カップルの両者が返信を行ったかどうかということには関わらず、交際中と明記した個人を分析の対象とした. 回答者の平均年齢は 20.6 歳 (範囲 18 歳-35 歳, $SD = 2.93$) であった. 平均交際期間は 15.0 ヶ月 (範囲 13 日-33 ヶ月, $SD = 17.58$ ヶ月) であった. 質問紙には、

アタッチメントスタイル、恋人の応答の認知、属性と恋愛関係に関する項目が含まれていた。

質問紙

アタッチメントスタイル アタッチメントスタイルを測定するために、本研究では、the Experienced in Close Relationship (ECR: Brennan et al., 1998) を使用した。ECR は、一般的に恋愛パートナーに対してどのように振る舞うかという信念に基づいて、アタッチメントを測定するものであり、2つの下位尺度（親密性の回避尺度 18 項目と、見捨てられ不安尺度 18 項目、合計 36 項目）から構成されている（詳細は付録Vを参照）。親密性の回避尺度は安定型－回避型を弁別する尺度であり、見捨てられ不安尺度は、アンビバレント型－非アンビバレント型を弁別する尺度である。本邦においては、中尾・加藤（2004a）が ECR の信頼性、妥当性を検討している。彼らの研究では、いくつかの項目が削除されているが、本研究で再度、因子分析を行った結果、Brennan et al. (1998) のオリジナルと同様の結果が生じたので、本研究では、オリジナルと同様の 36 項目を採用した。親密性の回避尺度の項目例は“私は恋人に心を開くのに抵抗を感じる”や“私は恋人とあまり親密にならないようにしている”である。見捨てられ不安尺度の項目例は、“私は恋人を失うのではないかと結構心配している”や“私が恋人のことを大切に思うほどには、恋人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配する”である。回答は“全く当てはまらない”（1 点）から“非常に当てはまる”（7 点）の 7 段階評定で行った。本研究での信頼性係数は親密性の回避尺度で $\alpha = .82$ 、見捨てられ不安尺度で $\alpha = .86$ であった。

恋人の応答性の認知 自分が提示したコミュニケーションシグナルに対して恋人がどのように応答したと認知するかを測定するために、岡島（2006）^{*10}が作成した恋人の反応性認知尺度を用いた（詳細は付録VIを参照）。恋人の反応性認知尺度の作成にあたり、予備研究として、心理学を専攻している大学院生 3 名（男性 1 名、女性 2 名）が、「大学生の恋愛関係において行うコミュニケーション」というテーマでブレインストーミングを行った。その結果、本研究に合致する 11 項目を作成した（例、メールを送る、電話をする）。次に、これらの項目を大学生が本当に行うのかを確かめるために、大学生 10 名（男性 6 名、女性 4 名）に対して、交際中にこれらの行動を行ったことがあるかを 2 件法（はい、いいえ）で回答するように求めた。本研究では、すべての人がそのような行動を行った経験がある項

目を採用した。その結果、11 項目中 2 項目が除外された（手紙を出す、PC メールを出す）。この 9 項目に関して、応答的・回避的な応答を示す項目を作成し、2 度の主因子法バリマックス回転による因子分析を行った（交際関係にあるかに関わらず一般的に恋人がどのように反応するかを問うことによって行われた分析と交際中の大学生を対象に、パートナーの反応の認知を問うことによって行われた分析）。両分析とも、固有値 1 以上の 1 因子を抽出した。分析に用いた 9 項目はすべて .400 以上の因子負荷量を持ち、削除される項目はなかった。恋人の反応性認知尺度に関する α 係数を算出したところ、「反応性」は .821、.757 と高い値を示した。岡島（2006）で行われた 9 項目の因子パターン、および、信頼係数は Table 3、Table 4 に示した。この結果から、恋人の反応性認知尺度は日常生活において大学生が恋人と行っているコミュニケーションについて、自分が投げかけたシグナルに対して恋人が応答的・回避的な応答を行ったと認知するかを一次元で測定するものであった。

本研究では、この恋人の反応性認知尺度を用いた。恋人の反応性認知尺度は 9 項目からなり、項目例は“恋人は私が話しているときに（目を見ない目を見る）”や“恋人は私からの電話に（出ない/必ず出る）”である。回答は意味的に対立するような語を 1 点と 7 点に配置した 7 段階評価からなり、得点が高いほどポジティブに応答的であると認知したことを示すものであった。本研究での信頼性係数は $\alpha = .70$ であった。

属性と恋愛関係に関する項目 回答者は、年齢、性別、交際期間を記述した。

Table 3 一般的な恋愛関係のイメージによる恋人の反応認知尺度の因子パターン (n=142)

項目	F1
1. 恋人は私が話しているときに（目を見る / 目を見ない）*	.550
5. 恋人は私に微笑みかけられると（無表情である / 微笑み返す）	.639
7. 恋人は私から会おうと誘われると（会う / 会わない）*	.537
2. 恋人は私からのメールを（返す / 返さない）*	.558
9. 恋人は私との電話を（すぐきる / ずっと話す）	.627
4. 恋人は私の話を（聞いていない / 聞いている）	.533
3. 恋人は私が手をつなごうとすると（つながない / つなぐ）	.563
6. 恋人は私からの電話に（出ない / 必ず出る）	.567
8. 恋人は私の話に（返事をしない / 返事する）	.665
因子寄与	3.07
因子寄与率 (%)	34.1%
信頼係数 (α)	.821

*は逆転項目

Table 4 実際に恋愛パートナーに関する恋人の反応認知尺度の因子パターン (n=130)

項目	F1
① 恋人は私が話しているときに（目を見る / 目を見ない）*	.544
⑤ 恋人は私に微笑みかけられると（無表情である / 微笑み返す）	.550
⑦ 恋人は私から会おうと誘われると（会う / 会わない）*	.428
② 恋人は私からのメールを（返す / 返さない）*	.555
⑨ 恋人は私との電話を（すぐきる / ずっと話す）	.444
④ 恋人は私の話を（聞いていない / 聞いている）	.649
③ 恋人は私が手をつなごうとすると（つながない / つなぐ）	.478
⑥ 恋人は私からの電話に（出ない / 必ず出る）	.655
⑧ 恋人は私の話に（返事をしない / 返事する）	.415
因子寄与	2.54
因子寄与率 (%)	28.2%
信頼係数 (α)	.757

*は逆転項目

結果

アタッチメントスタイルの分類

オリジナルの ECR (Brennan et al., 1998) の分類法に基づき、回答者は、ECR の親密性の回避得点と見捨てられ不安得点を用いた Ward 法によるクラスター分析によって 3 つのアタッチメントスタイル（安定型、回避型、アンビバレント型）に分類された。安定型に分類された回答者は 58 名 (36.7%) (男性 30 名, 女性 28 名), 回避型は 35 名 (22.2%) (男性 13 名, 女性 22 名), アンビバレント型は 65 名 (41.1%) (男性 26 名, 女性 39 名) だった*11。本研究では、アタッチメントスタイル、および、恋人の反応性認知尺度に性差がなかったことから、その後の分析は性差を考慮に入れず行った。

交際期間毎の分類

最初に交際期間が 2 年以上の人を弁別し、その回答者の人数になるべく近づくように、便宜的に残りの交際期間を 3 分割した（現在の交際期間が同じ回答者がいるため、期間毎の回答者の数に少しのばらつきが生じている）。第 1 期間（交際期間が 0 ヶ月から 5 ヶ月）の

回答者は 41 名（安定型 10 名，回避型 14 名，アンビバレント型 17 名），第 2 期間（交際期間が 6 ヶ月から 11 ヶ月）の回答者は 40 名（安定型 14 名，回避型 8 名，アンビバレント型 18 名），第 3 期間（交際期間が 12 ヶ月から 23 ヶ月）の回答者は 40 名（安定型 17 名，回避型 8 名，アンビバレント型 15 名），第 4 期間（交際期間が 24 ヶ月以上）の回答者は 37 名（安定型 17 名，回避型 5 名，アンビバレント型 15 名）であった。

各期間のアタッチメントスタイルにおける恋人の応答性の認知

第 1 期間の恋人の応答性の認知がアタッチメントスタイルによって異なるかを検証するために，アタッチメントスタイルを独立変数，恋人の応答性の認知を従属変数とした一元配置の分散分析を行った．その結果，アタッチメントスタイルの主効果の傾向が認められた， $F(2, 38) = 2.89, p < .10$. Tukey を用いた多重比較の結果，回避型 ($M = 54.0, SD = 4.11$) は安定型 ($M = 58.4, SD = 4.86$) より恋人の応答性を拒絶/回避的に認知する傾向があった (Table 5 参照)．

第 2 期間，第 3 期間，第 4 期間についても，第 1 期間と同様の分析を行った．その結果，第 2 期間，第 3 期間では，アタッチメントスタイルの主効果は認められなかった．しかし，第 4 期間では，アタッチメントスタイルの主効果が認められた， $F(2, 35) = 3.62, p < .05$. Tukey を用いた多重比較の結果，回避型 ($M = 49.4, SD = 7.37$) とアンビバレント型 ($M = 50.0, SD = 6.87$) は安定型 ($M = 56.5, SD = 7.86$) より拒絶/回避的に恋人の応答性を認知した (Table 5 参照)．

Table 5 各交際期間の恋人の応答性の認知得点 (SD)

	安定型	回避型	アンビバレント型	F 値
第 1 期間	58.4 (4.86) _b	54.0 (4.11) _a	57.5 (5.11) _{ab}	2.89 [†]
第 2 期間	56.1 (4.57)	53.1 (6.82)	53.4 (7.75)	0.84
第 3 期間	56.8 (4.28)	52.8 (7.44)	55.4 (4.63)	1.66
第 4 期間	56.5 (7.86) _b	49.4 (7.37) _a	50.0 (6.87) _a	3.48*

[†] $p < .10$ * $p < .05$

注：各行で異なった下付き文字のついた値は Tukey の有意差比較で 5%水準で有意差があった。

考察

2-1と2-2の研究では、初対面の人に対する行動においてアタッチメントスタイルの違いが示されたが、これらの研究における初対面の方は、その後関係を形成していく人ではなく一回限りの関係である。本節では、そうしたその場限りの対人関係ではなく、関係を継続していく対人関係では、どのように他者を認知し、行動を行っているのか、また、内的作業モデルを用いながらどのように他者と関係を築いていくのかを調べるために、青年期のアタッチメント人物である恋人に対して、交際期間による対人情報の処理の違いが生じるかを検証した。予測通り、本研究では、アタッチメントスタイルと恋人の応答性の認知との関連の有無は、交際期間によって異なっていた。交際初期（交際開始から5ヶ月以内）では、アタッチメントスタイルによって恋人の応答性の認知が異なる傾向が示された。安定型の個人は、回避型の個人より恋人の応答性をポジティブに認知する傾向にあった。この時期は、Zeifman & Hazan (2000) のモデルにおいて、第2段階である“アタッチメント形成”の段階と考えられる。この段階では、乳児期の親に対する行動と同様に、個人は恋人に対して選択的に社会的シグナル（例えば、微笑む、見つめる、声を出す、泣くなど）を送るようになり、恋人と個人的な情報の交換を行うようになる。また、このような情報を通じて互いに情緒的なサポート源として機能し始めるようになるという。さらに、この時期は、PEA（フェニールエチルアミン）による結びつきが中心であり、この状態は、覚醒状態が高まり、穏やかな幻想を抱くようになる（Zeifman & Hazan, 2000）。このように、アタッチメント形成段階は、個人的な情報の交換を行う。その際に、恋人がアタッチメント人物となるまでの間、個人は足りない情報を埋めるために内的作業モデルに依拠した認知を行っているのではないかと考えられる。

交際中期（本研究の第2, 第3段階である交際期間 6ヶ月から23ヶ月）では、予測通り、アタッチメントスタイルによって恋人の応答性の認知に関する違いは認められなかった。恋人同士がさまざまな情報交換を行う中で、自分の持っている内的作業モデルと合致しないことが多々起こりうると考えられる。そういった場合、内的作業モデルに依拠した対人認知よりも実際の情報に基づいた対人認知を行う方が適応的であろう。この段階は、Zeifman & Hazan (2000) が“明確なアタッチメント”と定義した段階であると考えられる。この段階の終わりには、恋人がアタッチメント人物になり、PEAの作用による高揚的感情状態から穏やかで安らぎのある感情状態に移行すると考えられている。この段階では、先述したような幻想状態はなくなり、現実 に即した対人認知になると考えられる。さらに、

この段階の始まりでは、まだアタッチメント関係の形成が成立していないため、関係が崩壊したとしても、軽い悲しみや抑うつは経験するが、日常機能の深刻な崩壊を経験するというようなアタッチメント人物の喪失の際に見られる特徴的な現象はあまり生じない。しかし、この段階の終わりには、アタッチメント関係が成立しているため、関係の崩壊は、高い不安やパニック、身体機能の異常など、さまざまなアタッチメント人物の喪失の際に見られる特徴的な現象が生じるという。これは、この段階では、恋人がアタッチメント人物になるまでに、自らの内的作業モデルに合わない恋人との関係を選択的に解消させやすいということを示唆していると思われる。青年・成人期のアタッチメント関係では、自己確証動機 (Swann, 1987) や自己成就的傾向 (Darley & Fazio, 1980) という作用を用いて、自らの内的作業モデルに合う関係を選択する傾向がある (金政, 2003, Tidwell et al., 1996)。このような考えに沿うと、この段階では、個人の内的作業モデルに合わない場合、自己確証動機や自己成就的傾向に合わないために、関係を解消させることは比較的容易であると考えられる。

2 年以上交際を継続しているカップルでは、予測通り、アタッチメントスタイルによって恋人の応答性の認知に違いが認められた。安定型の個人は、不安定型 (回避型とアンビバレント型) の個人より、恋人の応答性をポジティブに認知していた。Hazan & Zeifman (1994) は、それまでの段階では、アタッチメントを定義する際の 4 つのアタッチメント行動の対象が誰なのかを検証することで、2 年以上交際を継続しているカップルではアタッチメント対象が親から恋人へ移行していることを示した。この恋人がアタッチメント人物になった段階は、Zeifman & Hazan (2000) が定義した“目的修正的パートナーシップ”の段階に相当するが、この段階では、見つめ合いや身体的接触の頻度や長さは極端に減り、会話の内容は、自分の話題や相手の話題、関係の話題ではなく、関係以外の話題が中心となるという。そのため、現在の恋人に関する情報は減り、不明瞭になるだろう。この不明瞭な恋人に関する情報を埋めるために、再び内的作業モデルを用いた対人認知を行うようになるのではないかと考えられる。ただし、ここで用いられる内的作業モデルは、以前から内在化していたが眠っていた既存の内的作業モデルか、新たに改訂された内的作業モデルかは分かっていない。Hazan & Zeifman (1994) は、2 年以上交際した恋人は、新たなアタッチメント人物になることを示した。新たなアタッチメント人物との関係が、既存の内的作業モデルと一致しないならば、既存の内的作業モデルを変化させることによって、その関係に適応すると考えられる。このように、2 年以上交際を行っていた個人が行う恋

人の応答性の認知は、少ない情報量を埋めるために内的作業モデルを用いるが、その内的作業モデルは既存のものか新たに改訂されたものかが不明瞭である。今後の研究では、この内的作業モデルを変化させる可能性を確かめる必要があると思われる。

また、青年期以降において、内的作業モデルがパーソナリティとして働くと考えるならば、常に内的作業モデルを用いた対人認知が生じるはずである。しかし、本研究では、交際中期のアタッチメントスタイルと恋人の応答性の認知との関連を示さなかった。先に述べたように、内的作業モデルを用いた対人認知が生じるかは交際期間によって異なる情報量の違いであり、交際中期は恋人の情報量が多い時期であると考えられる。このように、他者の情報量の違いによって、内的作業モデルを用いた対人認知の有無に違いが生じるのであれば、青年期以降の内的作業モデルは、パーソナリティというよりも、危機（情報量が少ないなど）に際して使われると推測される。

第3章 アタッチメントスタイルの変化

Bowlby (1969/1982, 1973, 1980) は、乳幼児期における養育者との相互作用によって、個人が脅威的な状況での対処の仕方、また、その後の対人的な情報を処理する際の鋳型となる内的作業モデルを形成するというアタッチメント理論を提唱した。Bowlby (1973) は、乳幼児期に個人に内在化された内的作業モデルが、その後比較的安定したものになることを、「揺りかごから墓場まで」という言葉を用いて仮定した。さらに、Bowlby (1979) は、内的作業モデルの形成には5歳くらいまでの比較的早期の段階が非常に重要であり、いったん形成された内的作業モデルは、それ以降漸次安定していくことによって、可変性が減じていくと述べている。

このような仮定を受けて、Hazan & Shaver (1987) は、アタッチメント研究を乳幼児期から成人期まで拡張した。彼らは、青年期における恋愛関係中に行われる二者間の相互作用は、乳幼児期の乳児とアタッチメント人物との相互作用と同等のものであり、これはそれ以前に内在化されたアタッチメントを反映するものであるという。

その後、1－2で述べたように、成人のアタッチメント研究はさまざまな視点から行われたが、乳幼児期に内在化された内的作業モデルが比較的永続し安定するものであるという Bowlby (1979) の仮定に基づいている。現在では、この内的作業モデルの安定性に関する仮定を検証するために多くの研究が行われている。例えば、大学生を対象として行われた Shaver & Brennan (1992) の研究では、Hazan & Shaver (1987) の強制選択式尺度を用いて、8ヶ月の測定間隔を通じて71%の安定性を示した。また、Keelan, Dion, & Dion (1994) は、大学生を対象として、Hazan & Shaver (1987) の尺度とともに Simpson (1990) のアタッチメントスタイル尺度を用いて、4ヶ月の測定間隔の反復測定を行った。Hazan & Shaver のアタッチメントスタイル尺度では、80.2% (安定型が85%、回避型が76.7%、アンビバレント型が50%) の一致率を示した。Simpson の尺度では、2度の測定を通じた相関は、安定尺度が.56、回避尺度が.71、アンビバレント尺度が.51であった。さらに、2年以上関係が続いている成人前期のカップルを対象として行われた Scharfe & Bartholomew (1994) の研究では、彼らの開発した強制選択法を用いた尺度である関係尺度 (Bartholomew & Horowitz, 1991) と得点化した尺度である Relationship Scale Questionnaire (RSQ; Bartholomew & Horowitz, 1991)、さらに、面接法である Peer Attachment Interview (PAI; Griffin & Bartholomew, 1994) を用いて、8ヶ月の測定の間

隔で反復測定を行った。その結果、関係尺度において、男性では 56%、女性では 63%の一致率を示した。RSQ において、男性では.49、女性では.53 の測定間の相関を示した。PAI のカテゴリー分類において、男性では 80%、女性では 75%が同じスタイルに割り当てられた。また、幼少期の親子関係に焦点を当てるアダルト・アタッチメント・インタビュー (George et al., 1985) を用いて行われた研究において、3 ヶ月から 12 年の測定間隔の一致率は 77%から 90%であった (e.g., Benoit & Parker, 1994)。

上述のように内的作業モデルが反映されているアタッチメントスタイルは、2 度の反復測定を通じて一定の安定性を示している。しかし、アタッチメントスタイルの安定性に関する研究をレビューした Baldwin & Fehr (1995) は、アタッチメントスタイルの変化に焦点を当てて分析をすると約 30%の人がアタッチメントスタイルを変化させていると述べている。彼らがレビューした 1 週間から 4 年間といった幅広い測定間隔の中では、測定間隔によるアタッチメントスタイルの変化の割合の幅はあまり広くないようである (安定性は 50%–80%)。さらに、Tidwell et al. (1996) は、大学生を対象に、Hazan & Shaver (1987) の強制選択式のアタッチメントスタイル尺度を用いて 1 週間後と 3 週間後の三度に渡る反復測定を行い、すべて同じアタッチメントスタイルを選択した人は 58%に落ち込むことを示している。我が国において行われた研究では、山岸 (2003) は、戸田 (1990) の内的作業モデル尺度を用いて、大学生から成人期への 5 度にわたる反復測定を行った。内的作業モデル得点の平均+1SD を高群、平均-1SD を低群とし、それぞれの変化について検討した。その結果、約半数の人はアタッチメントスタイルが安定していることを示した。このような結果は、それぞれの測定法に関して中程度の信頼性を示す一方、内的作業モデルが安定したものであるという仮説に疑問を投げかけるものである。また、内的作業モデルが変化するという視点で研究を進める研究者もいる (e.g., Davila et al., 1997) が、内的作業モデルの変化に及ぼしている要因はまだ特定されていない。

そこで、本章では、青年期・成人期におけるアタッチメントスタイルの変化に焦点を当てた検証を行うこととした。3-1 では、青年期のアタッチメント人物と考えられる恋人との相互作用によって、アタッチメントスタイルが変化するかを検証した。3-2 では、アタッチメント人物ではないが、現在の環境において重要な他者である人物との相互作用に焦点を当てた。この研究では、大学の新入生が、大学で最も仲良くなった友人との相互作用によって、アタッチメントスタイルが変化するかを検証した。さらに、この研究では、1 ヶ月ごとに 3 度にわたり反復測定を行うことによって、Fraley (2002) のプロトタイプ

モデルが示唆するように、アタッチメントスタイルがある軸に沿って現在の環境に応じた浮動性を示すかを検証した。3-3では、青年期のみではなく、成人期においても重要な他者との相互作用によって、アタッチメントスタイルが変化するかを検証するために、妊娠期と育児期の間での夫婦の相互作用によってアタッチメントスタイルが変化するかを検証した。

3-1 恋人との関係におけるアタッチメントスタイルの変化^{*12}

先述したように、個人のアタッチメントスタイルは、青年期において一定の時間的安定性を示すものの、アタッチメントスタイルが変化するということも同時に示されている。最近ではアタッチメントスタイルが変化しているという立場に立ち、アタッチメントスタイルが変化する要因を探索する研究者もいる。例えば、Cozzarelli et al. (2003) は、中絶を行った女性を対象に調査を行い、配偶者との関係崩壊を経験した安定型の女性は、不安定型に変化することを示した。また、Simpson et al. (2003) は、出産前と出産後の二度に渡り測定を行い、出産前の妻が認識している夫のサポートによって、出産後のアタッチメントスタイルを予測できることを示唆した。我が国で行われたアタッチメントスタイルの変化に焦点を当てた研究は、筆者が知る限り、山岸 (2003, 2005) だけである^{*13}。山岸 (2003) は、大学生から成人期への5度にわたる反復測定を用いて、現在の内的作業モデルと関連があるのは、以前の内的作業モデルと現在の孤独感であることを示した。

Cozzarelli et al. (2003) や Simpson et al. (2003) の研究はネガティブなライフイベントがアタッチメントスタイルの変化を促すというライフストレスモデルを支持するものである (Davila & Cobb, 2004)。ライフストレスモデルを支持することに成功した研究は妊娠中絶や出産などという特別な経験をした人々を対象としていた。一方、ライフストレスモデルを支持することに失敗した研究の多くは、一般の大学生を研究対象としている。すなわち、特別な経験をしていない人を対象に行った研究であり、上述のような妊娠や中絶を経験していない対象者である。特別な経験である妊娠や中絶を経験していない大学生を対象にして行われた研究では、唯一 Kirkpatrick & Hazan (1994) が、関係の崩壊を経験した人は安定型アタッチメントスタイルを不安定型アタッチメントスタイルに変化させる可能性を示したのみである。このように、特別な経験をしていない人を対象としたアタッチメントスタイルの安定性に関する研究の多くは、ライフストレスモデルを支持しないものであった (e.g., Baldwin & Fehr, 1995; Scharfe & Bartholomew, 1994; Davila, et al.,

1997). すなわち、妊娠や出産のような特殊な経験をしていない一般青年を対象に行った研究では、この年代の青年が経験するイベントである恋愛関係の崩壊などが、アタッチメントスタイルを変化させるということを支持することはできなかった。さらに、Baldwin & Fehr (1995) は、2つの測定時における関係の崩壊や新たな恋人と関係を形成するなどといった関係に関する状況の変化が、アタッチメントスタイルの変化と関連するという証拠は存在していないと結論づけている。このため、大学生のような青年期においてどのような要因がアタッチメントスタイルを変化させるかを検証することは重要であると思われる。さらに、我が国において、内的作業モデルの変化を、ライフストレスの基となる対人関係文脈でとらえている研究は、筆者の知る限り存在しない。

アタッチメントスタイルが変化する要因に関して、アタッチメント理論の提唱者である Bowlby (1979, 1980) は、内的作業モデルの永続性を仮定する一方で、個人が内在化している内的作業モデルにそぐわない状況が生じたとき、その内的作業モデルを新しいモデルに置き換えて環境に適応することを示唆している。また、Bretherton (1990) は、コミュニケーションが内的作業モデルの改定を促進すると主張している。

Ainsworth et al. (1978) は、乳児のシグナルに対して養育者がどのように応答したかという乳児－養育者のコミュニケーションがアタッチメントタイプの個人差を生じさせる原因の一つであると示唆した。乳幼児のシグナルに対して、養育者が受容的で応答的である乳幼児は、自己は愛される価値があり、他者はよいものであるという“安定した（安定型）”モデルを内在化し、乳幼児のシグナルに対して、養育者が回避的・拒絶的であったり、その応答の一貫性がないような場合、乳幼児は、自己は愛される価値がなく、他者は信頼できないものであるというような“不安定な（不安定型）”モデルを内在化させる。このように内在化されているモデルの個人差が、その後の対人認知に影響を及ぼす内的作業モデルの個人差となるのである。同様に、Bowlby (1969/1982) は、このような内的作業モデルの成立には、乳幼児期の養育者とのコミュニケーションにおける乳幼児の主観的な知覚が重要であると示唆している。

青年期において、内的作業モデルが新しいモデルに改定されるためには、乳幼児期の乳幼児－養育者関係と同様の関係の中で行われているコミュニケーションに焦点を当てる必要があると思われる。青年期・成人期のアタッチメント研究の先駆者である Hazan & Shaver (1987) は、青年期の恋愛関係が乳幼児期の乳児－養育者関係と類似しており、恋愛関係が既存の内的作業モデルを改定するかもしれないことを示唆している。このよう

な示唆に基づくと、青年期の恋愛関係において、個人がコミュニケーションをとるために投げかけたシグナルに対してなされた恋人の応答が自分のモデルに合わないものであった場合、そのような事態を何度か経験した後でその個人はモデルを改訂させる可能性がある。また、この傾向は、恋人が行った行動より、個人が主観的に知覚した認知により影響されるかもしれない。

以上のように、アタッチメントスタイルの変化に関する研究はほとんどが欧米のものであり、日本においてはほとんど行われていない。そこで、本研究では、恋愛中の青年を対象とした時、欧米のアタッチメントスタイルの変化と同様の割合で、個人のアタッチメントスタイルが実際に変化するかを検証することを第1の目的とした。また、変化するのであれば、青年期における恋愛関係のうち、恋人の応答およびその応答に対する主観的認知を取り上げ、これらがアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすかについて検証することを第2の目的とした。先行研究から、安定型のアタッチメントスタイルを持つ個人は、恋人が拒絶的な応答を示したと認知している場合、アタッチメントスタイルを不安定型に改定し、不安定型のアタッチメントスタイルを持つ個人は、恋人が応答的な応答を示したと認知している場合、アタッチメントスタイルを安定型に改定するという仮説をたてた。

さらに、Hazan & Zeifman (1994) は、恋愛関係においても、乳幼児期の養育者との関係と同様に、4段階のアタッチメント成立過程が存在するとし、これには2年の交際期間が必要であるとしている。そして、2年以内の恋愛関係はまだアタッチメント関係としては成立していないと述べている。しかし、アタッチメント関係が成立する過程においてアタッチメントスタイルが変化するかは解っていない。実際の恋愛関係を考えてみると、一概に恋愛関係といってもその関係の親密さは多種多様であり、すべての恋愛関係がアタッチメントスタイルを変化させるほど影響力を持っていると考えるのは危険であると思われる。そこで、本研究では、第3の目的として、アタッチメントスタイルに変化を与えると考えられる恋愛関係は、どのような関係を指すのかということについて、交際期間、恋愛感情、さらに、アタッチメント対象として、恋人がどれだけ重要な存在なのかということにも焦点を当てて検証する。

方法

手続き

本研究では、現在交際中の大学生や専門学校生を対象に質問紙の入った封筒を配布した (Time 1)。次に、2 度の参加に同意した対象者に、返信時の消印から 1 ヶ月後に再度、質問紙の入った封筒を郵送した (Time 2)。本研究は、2003 年 5~10 月に 1 回目の配布が行われた。以下において、詳しく手続きを述べる。

Time 1 本研究では、現在交際中である大阪・兵庫の大学生およびそれに相当する年齢の専門学校生 287 名に一連の質問紙が入った封筒を配布した。この封筒は 2 通が 1 セットになっており、一方の封筒を現在交際している恋人に手渡すように対象者に依頼した。これらの質問紙への回答は、それぞれ独自で行い、お互いの回答は見せ合わないようすること、また、それぞれ独自に郵送するように依頼した。これらの質問紙の裏にはそれぞれナンバーリングがされており、各カップルが照合出来るようになっていた。質問紙は、アタッチメントスタイル、恋愛感情、恋人の応答の認知、自分の応答、属性と恋愛関係に関する項目が含まれている。

Time 1 において、引き続き次回の調査に参加してくれる人は返信時に住所を記すように依頼した。Time 1 の返信から 1 ヶ月後 (Time 2)、調査に応じるとした参加者に、恋愛感情の質問項目、および、最も重要だと思う人を尋ねる項目を除いた Time 1 と同様の質問紙 (同じ順序で構成されている) を郵送した。その際、Time 1 で行ったように、恋人への手渡しを依頼するのではなく、Time 1 での返信時に対象者が記載した住所に、別々に郵送した。Time 1 と同様に質問紙にはナンバーリングがされており、このナンバーは Time 1 と照合出来るようになっていた。

質問紙

アタッチメントスタイル アタッチメントスタイルを測定するために本研究では、先の 2-3 における研究で用いた the Experienced in Close Relationship (ECR: Brennan et al., 1998) の日本版 (中尾・加藤, 2004a) を使用した (詳細は付録 V を参照)。ECR は、2-3 で説明を行っているため、本節では簡単な説明のみ行うこととする。ECR は、一般的に恋愛パートナーに対してどのように振る舞うかという信念に基づいて、アタッチメントセキュリティを測定するものであり、2 つの下位尺度 (親密性の回避尺度 18 項目と、見捨

てられ不安尺度 18 項目、合計 36 項目）から構成されている。親密性の回避尺度は安定型－回避型を弁別する尺度であり、見捨てられ不安尺度は、アンビバレント型－非アンビバレント型を弁別する尺度である。本研究での信頼性係数は親密性の回避尺度で $\alpha = .82$ 、見捨てられ不安尺度で $\alpha = .86$ であった。

恋愛感情 本研究では、個人の恋人に対する恋愛感情を測定するために、Rubin (1970) の love-liking 尺度の love 尺度のみを使用した（詳細は付録Ⅶを参照）。Rubin は“恋愛”と“好意”が異なるものであるという考えから、その二つを区別する love 尺度と liking 尺度を作成した。彼は、恋人に対しては恋愛と好意の両方が高いが、友人に対しては好意のみが高く、恋愛はさほど高くないことを見いだしている。本邦においては、藤原・黒川・秋月 (1983)によって翻訳され、尺度の信頼性と妥当性は検証されている。Love 尺度は 13 項目からなる。項目例は、“もし××さんが元気がなさそうだったら、私は真っ先に励ましてあげたい”や“××さんと一緒にいられなければ、私はひどく寂しくなる”である。回答は「全くそう思わない」(1 点)から「非常にそう思う」(9 点)の 9 段階評定で行った。本研究での信頼性係数は $\alpha = .87$ であった。

恋人の応答性の認知 自分が提示したコミュニケーションシグナルに対して恋人がどのように応答したと認知するかを測定するために、岡島 (2006) が作成した恋人の反応性認知尺度を用いた（詳細は付録Ⅵを参照）。恋人の反応性認知尺度は、2－3 で説明を行っているため、本節では簡単な説明のみ行うこととする。恋人の反応性認知尺度は恋人と行っているコミュニケーションについて、投げかけられたシグナルに対して恋人が応答的－回避的な応答を行うという次元性で測定するために作成されたものである。恋人の反応性認知尺度は 9 項目からなり、項目例は“恋人は私が話しているときに（目を見ない/目を見る）”や“恋人は私からの電話に（出ない/必ず出る）”である。回答は意味的に対立するような語を 1 点と 7 点に配置した 7 段階評定からなり、得点が高いほど応答的であると認知したことを示すものであった。本研究での信頼性係数は $\alpha = .70$ であった。

本研究では、これらの応答性がどれくらい一貫性を持って行われていると認知しているかを測定し、アタッチメントスタイルとの関連を検討することを意図して、恋人の反応性認知尺度の各項目における一貫性の認知も測定した。回答は、“いつもそうである” (7 点)から“予測がつかない” (1 点)までの 7 段階評定で行い、得点が高くなるほど一貫性がある

ると認知していることを示した。本研究での信頼性係数は $\alpha = .75$ であった。

自分が行った応答 本研究では、恋人に対する回答者本人の応答性を測定するために、上述の恋人の反応性認知尺度の質問項目の“私”と“恋人”を入れ替えて使用することによって、恋人が示したコミュニケーションシグナルに対して回答者本人がどのように応答したかを測定した（詳細は付録Ⅷを参照）。恋人の反応性認知尺度と同様に、9項目で、回答は7段階評定からなり（1～7点）、得点が高いほど応答的であることを示すものであった。本研究での信頼性係数は $\alpha = .72$ であった。

また、上述の恋人の反応性認知尺度と同様に、各項目で、回答者本人がどれくらい一貫性をもって応答しているかを測定した。回答は、“予測がつかない”（1点）から“いつもそうである”（7点）までの7段階評定で行い、得点が高くなるほど一貫性があることを示した。本研究での信頼性係数は $\alpha = .72$ であった。

自分が行った応答は、恋人のアタッチメントスタイルの変化と対応させることによって、個人の認知とは別に実際にその個人が受けたとされる応答性を算出するために測定された。

属性と恋愛関係に関する項目 本研究において、対象者は、年齢、性別、現在交際が継続しているか、交際期間を記述した。また、父親、母親、同性の友人、異性の友人、恋人のうち、最も重要だと思う人に丸を付けさせた。

対象者

配布された287組（574名）のうち、回答された質問紙は160名（男性71名、女性89名）から返信された（回収率27.9%）。回答者の平均年齢は20.6歳（SD = 2.93）であった。この回答者のうちカップルの両者が返信したのは65組であった。Time 1の時点の平均交際期間は15.0ヶ月（範囲13日-33ヶ月、SD = 17.58ヶ月）であった。

Time 1において、Time 2の研究に参加する意志として、住所と氏名を記載したカップルは48組であった。そのうち、Time 2の回答をカップルの両者が返信したのは28組であった。2度の研究に応じた対象者（N = 56）とTime 1のみ応じた対象者（N = 104）とのアタッチメントスタイル（親密性の回避尺度得点：M = 44.7（SD = 13.5）vs. M = 46.5（SD = 14.9）；見捨てられ不安尺度得点：M = 69.6（SD = 18.4）vs. M = 67.6（SD = 19.5））、恋愛感情得点（M = 89.1（SD = 14.8）vs. M = 88.0（SD = 16.9））、恋人の応答性の認知得点（M

= 54.7 (SD = 6.15) vs. M = 54.9 (SD = 6.41)), 本人の応答性得点 (M = 55.7 (SD = 5.32) vs. M = 54.8 (SD = 7.11)) において、有意な違いは認められなかった。

結果

アタッチメントスタイルの分類

最初に、オリジナルの ECR (Brennan et al., 1998) の分類法に基づき、対象者は、2 度の測定の ECR の親密性の回避得点と見捨てられ不安得点を用いた Ward 法による 3 クラスター指定のクラスター分析によって 3 つのアタッチメントスタイル (安定型, 回避型, アンビバレント型) に分類された*¹⁴。アタッチメントスタイルの変化を見るために、2 度の測定時期で得られたデータは 1 度のクラスター分析によって分析された*¹⁵。本研究では、仮説に基づいて、回避型, アンビバレント型を込みにし、安定型—不安定型間での比較を行った (Table 6 参照)。Time 1 で安定型に分類された対象者は 16 名 (28.6%), 不安定型は 40 名 (71.4%) [回避型は 10 名 (17.9%), アンビバレント型は 30 名 (53.6%)] であった。Time 2 で安定型に分類された対象者は 18 名 (32.1%), 不安定型は 38 名 (67.9%) [回避型は 9 名 (16.1%), アンビバレント型は 29 名 (51.9%)] であった (Table 6 参照)。3 分類のアタッチメント分類において、Time 1 から Time 2 で 75% の対象者が同じアタッチメントスタイルに分類された, $\kappa = .59, p < .001$ 。

Table 6 Time 1 と Time 2 おけるアタッチメントスタイルを選択した人数

		Time 2			合計
		安定型	回避型	アンビバレント型	
Time 1	安定型	11	1	4	16
	回避型	2	7	1	10
	アンビバレント型	5	1	24	30
	合計	18	9	29	56

Time 1 から Time 2 にかけて、安定型が継続した人 (NCS; Non Changed Secure) は 11 名, 不安定型が継続した人 (NCI; Non Changed Insecure) は 33 名, Time 1 から Time 2 にかけて不安定型から安定型に変化した人 (CS; Changed Secure) は 7 名, 安定型から不

安定型に変化した人 (CI; Changed Insecure) は 5 名であった。本研究では、アタッチメントスタイル、および、恋人の反応性認知尺度に性差がなかったことから、その後の分析は性差を考慮に入れず分析を行った。

恋人の応答性の認知

恋人の応答性の認知の変化と、個人のアタッチメントスタイルの変化との関連性を検証するために、恋人の応答性の認知を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った。恋人の応答性の認知に関して、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の交互作用の傾向が認められた、 $F(3, 52) = 2.38, p < .10$ (Figure 1 参照)。調査時期における単純主効果検定をおこなった結果、アタッチメントスタイルが不安定型から安定型に変化した人 (CS) は、Time 1 ($M = 50.7, SD = 6.82$) から Time 2 ($M = 55.1, SD = 6.52$) にかけて応答性得点が有意に増大した、 $F(1, 52) = 4.98, p < .05$ 。アタッチメントスタイルが安定型から不安定型に変化した人 (CI) は、Time 1 ($M = 54.4, SD = 6.21$) から Time 2 ($M = 51.4, SD = 4.72$) にかけて有意な変化は認められなかった。また、変化しなかった人 (NCS と NCI) は Time 1 (それぞれ $M = 56.4, SD = 6.23$; $M = 55.1, SD = 5.07$) と Time 2 (それぞれ $M = 56.8, SD = 7.71$; $M = 55.2, SD = 7.72$) との間で、応答性得点に違いを示さなかった。変化群の単純主効果検定をおこなった結果、Time 1 および Time 2 において、有意な単純主効果は認められなかった。

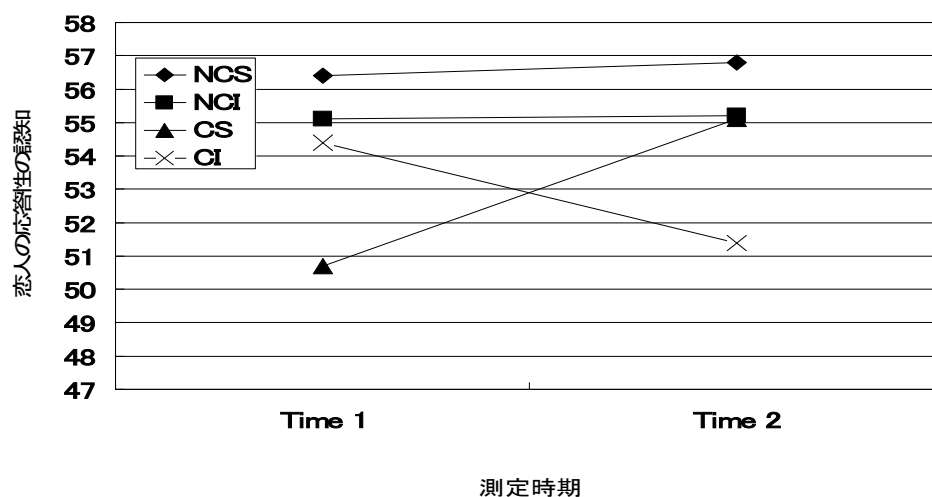


Figure 1 アタッチメントスタイルの変化、および、測定時期による恋人の応答性に関する認知

恋人の応答の一貫性における認知の変化と、個人のアタッチメントスタイルの変化との関連性を検証するために、恋人の応答の一貫性を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのあ対象者内の分散分析を行った。恋人の応答性の一貫性の認知に関して、アタッチメントスタイルの変化と測定時期に関して、有意な交互作用が認められた、 $F(3, 52) = 3.14, p < .05$ (Figure 2 参照)。測定時期における単純主効果検定をおこなった結果、アタッチメントスタイルが安定型から不安定型に変化した人 (CI) は、Time 1 ($M = 46.6, SD = 4.26$) から Time 2 ($M = 42.9, SD = 5.54$) にかけて有意に一貫性得点が減少した、 $F(1, 52) = 4.53, p < .05$ 。また、アタッチメントスタイルが不安定型から安定型に変化した人 (CS) は、Time 1 ($M = 42.0, SD = 7.56$) から Time 2 ($M = 45.9, SD = 8.95$) にかけて一貫性得点が有意に増大した ($F(1, 52) = 4.80, p < .05$)。アタッチメントスタイルが変化しなかった人 (NCS と NCI) は Time 1 (それぞれ $M = 46.7, SD = 6.32$; $M = 45.5, SD = 6.42$) と Time 2 (それぞれ $M = 47.2, SD = 9.14$; $M = 46.5, SD = 6.42$) との間で、一貫性得点に違いを示さなかった。変化群の単純主効果検定をおこなった結果、Time 1 および Time 2 において、有意な単純主効果は認められなかった。

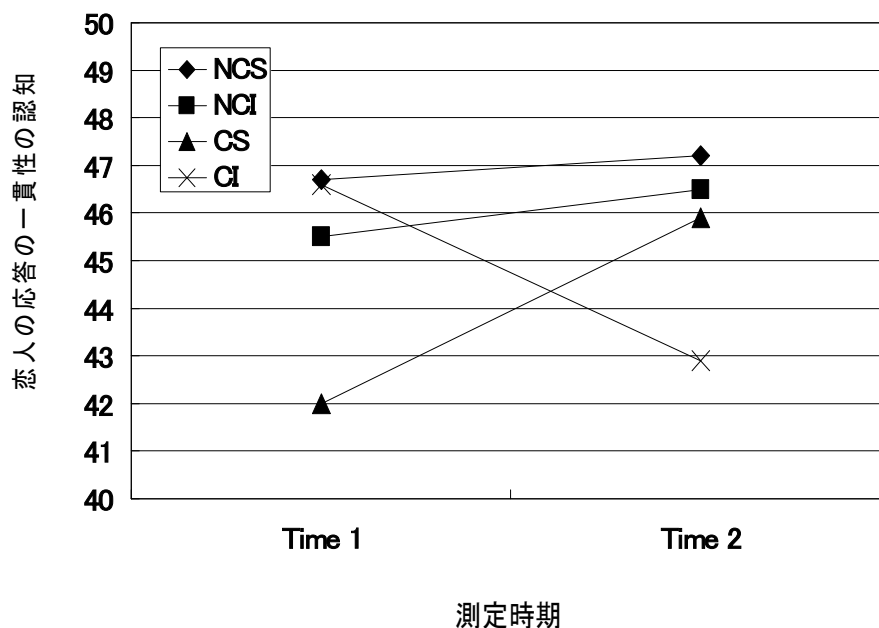


Figure 2 アタッチメントスタイルの変化、および、測定時期による恋人の応答の一貫性に関する認知

自分が行った応答性

回答者本人が行った応答性の変化と、恋人のアタッチメントスタイルの変化との関連性を検証するために、回答者本人が行った応答性を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけての恋人のアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った。回答者本人が行った応答に関して、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の有意な交互作用、および、有意なアタッチメントスタイルの変化の主効果、時期の主効果は認められなかった。

回答者本人が行った応答の一貫性が、恋人のアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすかということを検証するために、回答者本人が行った応答の一貫性を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った。その結果、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の有意な交互作用、および、アタッチメントスタイルの変化の主効果、時期の主効果は認められなかった。

その他の要因

恋愛感情、交際期間がアタッチメントスタイルの変化と関連するかについて、それぞれの変数を従属変数、アタッチメントスタイルの変化の有無を独立変数とした一元配置の分散分析を用いて検討をおこなった。しかし、これらの要因とアタッチメントスタイルの変化との間に有意な関連は見られなかった。さらに、恋愛期間に関して、Hazan & Zeifman (1994) が示唆している 2 年という交際期間がアタッチメントスタイルの変化に影響を与えるかに関して、 χ^2 検定を用いることによって検証した。交際期間が 2 年未満か 2 年以上かということと、アタッチメントスタイルの変化の有無との間には有意な関連は検出できなかった。

また、恋人を最も重要な人であると選択するかどうか、アタッチメントスタイルの変化に影響を与えるかを検証した。 χ^2 検定の結果、恋人を最も重要な人であると選択するかということとアタッチメントスタイルの変化との間に有意な関連が検出された、 $\chi^2(1, N = 56) = 6.10, p < .05$ 。Table 7 に示したように、Time 1 において恋人が最も重要な人物ではないと述べた人 (恋人以外選択群) は、アタッチメントスタイルを変化させることが少なかった。最も重要な人を恋人と選択した人 (恋人選択群) の中で、Time 2 で不安定型に変化した対象者は 4 名であった。一方、Time 2 で安定型に変化した対象者は 7 名であ

った。また、最も重要な人を恋人と選択しなかった人（恋人以外選択群）の中で、Time 2 に安定型に変化した対象者は1名であった。一方、Time 2 で不安定型に変化した対象者は2名であった。

Table 7 恋人を最も重要な他者と選択したかどうかの有無とアタッチメントスタイルの変化の有無

	恋人選択群	恋人以外選択群	合計
変化群	11 (19.6%)	3 (5.4%)	14 (25.0%)
安定群	17 (30.4%)	25 (44.6%)	42 (75.5%)
合計	28 (50.0%)	28 (50.0%)	56 (100.0%)

考察

アタッチメントスタイルの変化

本研究では、はじめに、アタッチメントスタイルの変化の可能性が、日本においても同様に生じているかを検証した。欧米における先行研究 (cf., Baldwin & Fehr, 1995) と同様に、我が国においても、同じ尺度で測定したアタッチメントスタイルは一ヶ月間の間に25%の個人が変化していることを示した。このことは、アタッチメントスタイルの変化は文化を通じて、あまり違いを示さないということを示唆するものである。

アタッチメントスタイルの変化と応答性の認知

本研究は、青年期の恋愛関係において、アタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼす要因として、コミュニケーションの応答性ということに焦点を当てて検証した。予測通り、本研究では、恋人の応答性の認知とその応答についての一貫性の認知が、アタッチメントスタイルの変化と関連性を持つことが示された。個人が恋人の応答を応答的であると認知するようになることと、その応答に一貫性があると認知するようになること、個人のアタッチメントスタイルにおける不安定型から安定型への変化との関連を示した。また、個人が恋人の応答を拒絶的であると認知するようになることと、その応答に一貫性がないと認知するようになることは、安定型から不安定型へのアタッチメントスタイルの変化と関連を示した。このような結果は、Bowlby (1979,1980) が、今までに作られ、内在化された

内的作業モデルと実際の認知が合致しないときに、個人は自らの内的作業モデルを改定することによって、環境に適応しようとしているという示唆と合致すると思われる。すなわち、関係の崩壊を選択しない場合、この現象は、自らの内的作業モデルを環境である恋人の応答性に対応するように変化させることによって、個人の認知と恋人の応答性との間にある矛盾を埋めるというプロセスであると考えられる。

さらに、回答者本人が行った応答と、恋人のアタッチメントスタイルの変化との間の関連が検出されなかったことから、上述の傾向は個人の認知の中でのみ生じる現象であり、実際に恋人がおこなっている応答では生じるものではないことが示された。このことは、Kirkpatrick & Davis (1994) が示唆するように、恋人との間での認知は必ずしも一致するものではないということを示唆するのであろう。また、Bowlby (1969/1982) が示唆したように、個人の内的作業モデルの変化において、客観的にどのような行動が行われているかということが問題ではなく、主観的に個人がどのように恋人の行動をとらえるかが重要であるということを示唆している。

アタッチメントスタイルの変化と恋愛関係

本研究では、アタッチメントスタイルの変化に関して、すべての恋愛関係が等価なのかを検証するために、交際期間、恋愛感情、すべての関係の中で恋人が最も重要であると認識することに焦点を当てた。恋人との関係の変化によるアタッチメントスタイルの変化は、恋人が最も重要だと認識している場合により生じやすい。恋人を最も重要であると認識していることは、その恋人を現在のアタッチメント人物であると認識しているのかもしれない。Hazan & Zeifman (1994) は、発達に伴いアタッチメント人物の移行の可能性を示している。アタッチメント人物が他の人物（例えば、恋人や友人）に移行することによって、既存のモデルがその人物との関係に適応しない場合、幼少時にアタッチメント人物との相互作用によって形成されたアタッチメントスタイルは、新たなアタッチメント人物との相互作用によって改訂されるという可能性を本研究は示した。この結果は、Hazan & Shaver (1987) が示唆した、恋愛関係が内的作業モデルの改定の機会になるという見解と一致する。さらに、アタッチメントスタイルを変化させた人の大部分が恋人を最も重要であると認識していたことから、先述したような応答性の認知の変化と、恋人を最も重要であると認識することとは、アタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすために重要な役割を果たすと思われる。すなわち、恋人を最も重要な他者であると認識している場合であり、かつ、

恋人の応答が変化したと認知し、既存の内的作業モデルに適合しないときに、内的作業モデルを改定させると考えられる。

一方、恋人が最も重要な他者ではない個人の中にも、少しではあるがアタッチメントスタイルを変化させた者もいる。Hazan & Shaver (1987) は、アタッチメントスタイルの変化に導く関係を恋愛関係だけではなく、親友関係などの重要な関係においても生じるのではないかと提案している。さらに、Hazan & Zeifman (1994) は、アタッチメント機能を満たすアタッチメント人物が必ずしも恋人ではないことを見いだしている。本研究においても、恋人以外の人が、個人にとって重要な他者となっているかもしれず、そのパートナーの応答性の認知の変化がアタッチメントスタイルの変化として現れたのかもしれない。

また、Hazan & Zeifman (1994) が、2年以上交際を継続することで、恋人はアタッチメント人物になることを示したため、本研究では、アタッチメント人物になった恋人との関係によってアタッチメントスタイルが変化するという仮説を立てた。しかし、本研究では、交際期間とアタッチメントスタイルの変化との関連は示さなかった。さらに、重要な他者を示す要因の1つとして恋愛感情に焦点を当て、恋人に対する恋愛感情とアタッチメントスタイルの変化を調べたが、本研究では、これらの関連は示さなかった。これらのことから、内的作業モデルを変化させる重要な他者の存在は、関係の長さや恋愛感情のような感情の側面ではなく、さまざまな関係の中でその関係が最も重要であると認識する認知的な側面であると考えられる。

3-2 新入生における友人関係とアタッチメントスタイルの変化

先の3-1で述べたように、アタッチメントスタイルが変化する要因に関して、アタッチメント理論の提唱者である Bowlby (1979, 1980) は、内的作業モデルの永続性を仮定する一方で、個人が内在化している内的作業モデルにそぐわない状況が生じたとき、その内的作業モデルを新しいモデルに置き換えて環境に適応することを示唆している。乳幼児期の内的作業モデルの形成は、乳児のシグナルに対して養育者がどのように応答したかという乳児-養育者の相互作用が重要であると考えられている (Ainsworth et al., 1978)。乳幼児のシグナルに対して、養育者が受容的で応答的である乳幼児は、自己は愛される価値があり、他者はよいものであるという“安定した (安定型)”モデルを内在化し、乳幼児のシグナルに対して、養育者が回避的・拒絶的であったり、その応答の一貫性がないような場合、乳幼児は、自己は愛される価値がなく、他者は信頼できないものであるというよう

な“不安定な（不安定型）”モデルを内在化させる．このように内在化されているモデルの個人差が，その後の対人認知に影響を及ぼす内的作業モデルの個人差となるのである．さらに，Bowlby (1969/1982) は，このような内的作業モデルの成立には，乳幼児期の養育者とのコミュニケーションにおいて，乳幼児がそのコミュニケーションをどのように感じるかという主観的な認知が重要であると示唆している．これらの視点から考慮すると，内的作業モデルの変化は，乳幼児期に養育者との関係の中で内在化した主観的なコミュニケーションのモデルが，その後適用されないような状況に直面したときに生じる現象ではないかと考えられる．

青年期において，内的作業モデルが新しいモデルに改定されるためには，乳幼児期の乳幼児－養育者関係と同様の関係の中で行われているコミュニケーションに焦点を当てる必要があると思われる．先の3－1の研究では，青年期のアタッチメント人物として考えられる恋人の応答性の変化によって，アタッチメントスタイルが変化することを示した．恋人の応答性をポジティブなものとして認知するようになる青年はアタッチメントスタイルを安定型に変化させ，ネガティブなものとして認知するようになる青年はアタッチメントスタイルを不安定型に変化させた．これは，青年が新たに形成したアタッチメント関係によって，既存の内的作業モデルは更新されるということを示唆している．Kobak (1994) は，個人が新たなアタッチメント関係を形成した時，そのアタッチメント関係における認知や行動に内的作業モデルが影響を与えるばかりではなく，その関係によって内的作業モデルが影響を受ける可能性を示唆した．このような視点から，内的作業モデルの変化を検証した研究では，恋人 (e.g., Baldwin & Fehr, 1995; Kirkpatrick & Hazan, 1994; Scharfe & Bartholomew, 1994) や新婚夫婦 (e.g., Davila et al., 1999; Crowell et al., 2002) などを対象に行っている．Hazan & Shaver (1987) は，恋人だけではなく重要な友人との関係においてもアタッチメントスタイルを改訂させることを示唆しており，また，青年期において，アタッチメント関係は，恋人との関係ばかりでなく友人との間でも存在することが示されている (Fraley & Davis, 1997; Hazan & Zeifman, 1994; 片岡・園田, 2010; Trinkle & Bartholomew, 1997; 若尾, 2001)．しかし，アタッチメント人物は恋人以外にも友人が考えられるにも関わらず，筆者の知る限りでは，友人関係と内的作業モデルの変化を検証している研究は存在していない．友人関係と内的作業モデルの変化を検証した研究が発表されていないこととして，2つの理由が考えられる．第1の理由として，友人関係は，内的作業モデルを変化させるほど重要な関係ではないのかもしれない．第2の

理由は、友人との関係では、恋愛関係と比べ、関係の質があまり変化しないからではないかと考えられる。谷口（2004）は、大学の新入生を対象に、高校からの友人と大学に入学したときに知り合った友人と会う回数の変化を大学入学時の4月と3ヶ月後の7月の2度にわたる調査を行った結果、3ヶ月間で高校からの友人との会う回数に変化は起こっていないが、大学に入学して知り合った友人との会う回数は増加した。このように、友人関係では、関係を形成する時期においては、その関係の質（例えば、合う頻度やコミュニケーション量など）は、変化を示すものの、いったん形成された関係ではあまり変化しないようである。そのため、関係性が変化しない長期間関係を続けている友人との関係では、内的作業モデルの変化を導くことができないのではないかとと思われる。このような視点から考えると、関係が形成されてしまっている友人関係よりも、今後重要な他者となりうる新たな友人関係に焦点を当てるのが、内的作業モデルの変化を検証する上で重要ではないかと考える。そこで、本研究では、大学の新入生を対象に、入学時に知り合った最も仲の良い友人の応答性の変化によって、アタッチメントスタイルの変化が生じるかを検証した。

また、Fraley（2002）は、アタッチメントスタイルの変化はプロトタイプのようなものであり、一時的な浮動性を示すものの、一定の軸に沿った浮動性であると示唆した。すなわち、一見変化しているように見えるアタッチメントスタイルは、環境の変化によって小さな変化はあるものの、それはアタッチメントスタイルが変化したと言えるほどの大きな変化ではないと示唆している。そこで、本研究では、Fraley（2002）のプロトタイプ仮説を検証するために、3度にわたる反復測定を行い、一度変化したアタッチメントスタイルがその後元に戻るかを調べた。

方法

手続き

本研究では、関西の3つの大学の新入生を対象に、4月から3ヶ月間（4月 = Time 1, 5月 = Time 2, 6月 = Time 3）に渡り、1ヶ月間隔で計3回の複数回縦断研究を行った。Time 1は、4月の第1回目の授業において行った。以下に記している質問紙の冊子を心理学の講義時に配布し（授業担当者の許可を取り、当日著者が冊子を配布、もしくは、授業担当者が自ら配布した）、本人の学籍番号をIDとして記述させた。Time 2, Time 3では、Time 1と同一のクラスにおいて、Time 1で配布された質問紙の冊子と同様の冊子を配布した。また、Time 1で選定すべき友人は、大学に入学してから知り合った最も親しい同性

の友人とし、Time 2, Time 3においても、この友人を想定するように対象者に依頼した
*16.

対象者

Time 1 の対象者は、大学の新入生 210 名（男性 114 名，女性 96 名）であった。Time 2 では、180 名（男性 91 名，女性 89 名），Time 3 では、169 名（男性 90 名，女性 79 名）であった。このうち、3 回すべて研究に参加した対象は、132 名（男性 58 名，女性 52 名）であった。Time 1 での平均年齢は、18.4 歳（SD = 1.05）であった。

測度

アタッチメントスタイル アタッチメントスタイルを測定するために本研究では、先の 2 - 3, 3 - 1 の研究で用いた the Experienced in Close Relationship (ECR: Brennan et al., 1998) の日本版（中尾・加藤, 2004a）を使用した（詳細は付録VIを参照）。ECR は、2 - 3 で説明を行っているため、本節では簡単な説明のみ行うこととする。ECR は、一般的に恋愛パートナーに対してどのように振る舞うかという信念に基づいて、アタッチメントセキュリティを測定するものである。ECR は、2 つの下位尺度（親密性の回避尺度 18 項目と、見捨てられ不安尺度 18 項目、合計 36 項目）から構成されている。親密性の回避尺度は安定型－回避型を弁別する尺度であり、見捨てられ不安尺度は、アンビバレント型－非アンビバレント型を弁別する尺度である。本研究での親密性の回避尺度における信頼係数は、Time 1 で $\alpha = .90$ ，Time 2 で $\alpha = .91$ ，Time 3 で $\alpha = .90$ であった。見捨てられ不安尺度における信頼係数は、Time 1 で $\alpha = .88$ ，Time 2 で $\alpha = .89$ ，Time 3 で $\alpha = .85$ だった。

友人の応答性 本研究では、大学院生 3 名（男性 2 名と女性 1 名）に、大学の友人との関係の中で行っているコミュニケーションの種類をそれぞれ記述させた。その結果、11 個のコミュニケーションの場面が選ばれた。その 11 個のコミュニケーションの場面について、大学 4 回生の 10 名（男性 5 名，女性 5 名）に、“多くの大学生がこの種のコミュニケーションを行うか”を尋ね、すべての学生が行っていると回答した 9 場面（例えば、“冗談を言う”や“お昼に誘う”）が本研究のコミュニケーションの場面として採用された。この 9 場面において、対象者は大学に入ってきた最も仲の良い友人がどれくらい応答する

かを「全く当てはまらない」(1点)から「非常に当てはまる」(7点)の7段階評定で回答した。本研究での対象者の回答を基に主因子法バリマックス回転の因子分析を行った結果、抽出された因子は1個であった。分析に用いた9項目はすべて.50以上の因子負荷量を持ち、削除される項目はなかった。そこで、本研究では、抽出された因子を「大学生の応答性の認知」と名付けた。本研究では、対象者に大学に入学してから知り合った最も親しい同性の友人〇〇を想定させ、その〇〇がコミュニケーションの中で、どのように応答すると認知しているかを回答させた。項目例は、“私が冗談を言うと、〇〇はその冗談に反応した”や“私がお昼ご飯と一緒に食べようと誘うと、〇〇は一緒に食べた”、“私がメールを打つと、〇〇は返した”である。大学生の応答性の認知尺度は、得点が高い方がポジティブに相手の応答性を認知していることを示す。大学生の応答性の認知尺度の信頼係数は、Time 1で $\alpha = .90$ 、Time 2で $\alpha = .96$ 、Time 3で $\alpha = .96$ であった。

属性に関する項目 本研究では、対象者は、年齢、性別を記入した。また、父親、母親、友人の応答性の認知で想定した大学に入学して最も仲がよい友人、それ以外の友人、恋人のうち、最も重要だと思う人に丸を付けた。また、Time 2とTime 3において、Time 1で想定した友人との関係は良好かどうかを尋ねた。

結果

アタッチメントスタイルの分類

本研究では、対象者は、3度の測定のECRの親密性の回避得点と見捨てられ不安得点を用いたWard法による3クラスター指定のクラスター分析によって3つのアタッチメントスタイル(安定型、回避型、アンビバレント型)に分類された*17。Time 1において、安定型は70名(33.3%)、回避型は73名(34.8%)、アンビバレント型は67名(31.9%)だった。Time 2において、安定型は51名(28.3%)、回避型は72名(40.0%)、アンビバレント型は57名(31.7%)だった。Time 3において、安定型は43名(25.4%)、回避型は72名(42.6%)、アンビバレント型は54名(32.0%)だった(Table 8参照)。

Table 8 月別アタッチメントスタイルの人数

	安定型	回避型	アンビバレント型
Time 1 (n = 210)	70	73	67
Time 2 (n = 180)	51	72	57
Time 3 (n = 169)	43	72	54

アタッチメントスタイルの変化

本研究において、Time 1 から Time 2 にかけて、同じアタッチメントスタイルに分類された対象者は、全対象者 157 名中 111 名 (70.7%) だった、 $\kappa = .53, p < .001$. Time 2 から Time 3 にかけて、同じアタッチメントスタイルに分類された対象者は、全 140 名中 103 名 (73.6%) だった、 $\kappa = .57, p < .001$. Time 1 から Time 3 にかけてアタッチメントスタイルが 1 度も変化しなかった対象者は、全 132 名中 75 名 (56.8%) だった、安定型; $\kappa = .47, p < .001$, 回避型; $\kappa = .38, p < .001$, アンビバレント型; $\kappa = .49, p < .001$ (Table 9 参照).

Table 9 アタッチメントスタイルの変化の有無

	変化なし	変化あり
Time 1→Time 2	111 (70.7%)	46 (29.3%)
Time 2→Time 3	103 (73.6%)	37 (27.6%)
Time 1→Time 2→Time 3	75 (56.8%)	57 (43.2%)

アタッチメントスタイルの変化が継続しているかを検討するために、Time 1 での対象者のアタッチメントスタイルが、Time 2, Time 3 へと時間が経過するにつれて、どのような変化、および、継続を示すかを Table 10 に示した. Time 1 で安定型に分類された個人 (44 名) のうち、Time 2 で安定型に分類された個人は 27 名、回避型に分類された個人は 11 名、アンビバレント型に分類された個人は 6 名だった. Time 2 で回避型に変化した 11 名のうち、Time 3 で回避型が継続した個人は 9 名、元の安定型に戻った個人は 2 名だった. Time 2 でアンビバレント型に変化した 6 名のうち、Time 3 でアンビバレント型が継続した個人は 3 名、元の安定型に戻った個人は 3 名だった. Time 1 で回避型に分類された個人 (51 名) のうち、Time 2 で安定型に分類された個人は 4 名、回避型に分類された個人は 42 名、アンビバレント型に分類された個人は 5 名であった. Time 2 で安定型に変化した 4 名のうち、Time 3 で安定型が継続した個人は 2 名、元の回避型に戻った個人は 1 名だった. Time 2 でアンビバレント型に変化した 5 名のうち、Time 3 でアンビバレント型

が継続した個人は 4 名，回避型に戻った個人は 1 名だった．Time 1 でアンビバレント型に分類された個人（37 名）のうち，Time 2 で安定型に分類された個人は 6 名，回避型に分類された個人は 5 名，アンビバレント型に分類された個人は 26 名だった．Time 2 で安定型に変化した 6 名のうち，Time 3 で安定型が継続した個人は 3 名，元のアンビバレント型に戻った個人は 2 名だった．Time 2 で回避型に変化した 5 名のうち，Time 3 で回避型が継続した個人は 4 名，アンビバレント型に戻った個人は 1 名だった．

Table 10 Time 1, Time 2, Time 3 におけるアタッチメントスタイル

T2		B 型				A 型				C 型			
T1 \ T3		B 型	A 型	C 型	計	B 型	A 型	C 型	計	B 型	A 型	C 型	計
B 型		21	3	3	27	2	9	0	11	3	0	3	6
A 型		2	1	1	4	2	34	6	42	0	1	4	5
C 型		3	1	2	6	0	4	1	5	3	3	20	26

安定型を B 型，回避型を A 型，アンビバレント型を C 型と表記

Time 1 は T1, Time2 は T2, Time3 は T3 と表記

全体として，Time 2 でアタッチメントスタイルが変化した個人のうち，Time 3 においても変化が継続した個人（25 名）は，Time 1 のアタッチメントスタイルに戻った個人（10 名）より多かった， $\chi^2 = 22.1, p < .001$ (Table 11 参照)．

Table 11 Time 2 における変化群の Time 3 のアタッチメントスタイル

	変化継続	前スタイル選択	別のスタイル選択	χ^2
Time 3	25	10	2	22.1***
$p < .001$				

アタッチメントスタイルの変化と友人の応答性

T1 から T2 へのアタッチメントスタイルの変化を検討するために、対象者を安定型が継続した人 (NCS; Non Changed Secure) , 不安定型が継続した人 (NCI; Non Changed Insecure) , Time 1 から Time 2 にかけて不安定型から安定型に変化した人 (CS; Changed Secure), 安定型から不安定型に変化した人 (CI; Changed Insecure) に分類した. NCS は 36 名, NCI は 83 名, CS は 14 名, CI は 23 名であった. アタッチメントスタイルの変化と友人の応答性の認知との関連性を検討するために、友人の応答性の認知を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った. 友人の応答性の認知に関して、測定時期の主効果が示された、 $F(1, 153) = 5.55, p < .05$. 対象者は Time 1 ($M = 55.9, SD = 7.64$) のほうが Time 2 ($M = 53.5, SD = 11.43$) よりポジティブに友人の応答性を認知していた. アタッチメントスタイルの変化の主効果、および、アタッチメントスタイルと測定時期の交互作用は見られなかった.

次に、Time 2 から Time 3 へのアタッチメントスタイルの変化を検討するために、対象者を NCS, NCI, CS, CI に分類した. NCS は 33 名, NCI は 70 名, CS は 14 名, CI は 23 名であった. アタッチメントスタイルの変化と友人の応答性の認知との関連性を検討するために、友人の応答性の認知を従属変数、Time 2 から Time 3 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った. しかし、有意なアタッチメントスタイルの変化の主効果、測定時期の主効果、および、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の交互作用は見られなかった.

さらに、Time 1 から Time 3 へのアタッチメントスタイルの変化を検討するために、対象者を NCS, NCI, CS, CI に分類した. NCS は 13 名, NCI は 66 名, CS 17 名, CI は 18 名であった. アタッチメントスタイルの変化と友人の応答性の認知との関連性を検討するために、友人の応答性の認知を従属変数、Time 1 から Time 3 にかけてのアタッチメント

スタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った結果、測定時期に関して、有意な主効果を示した、 $F(1, 110) = 7.25, p < .01$. 対象者は、Time 1 ($M = 55.5, SD = 7.64$) より Time 3 ($M = 51.9, SD = 11.90$) で、友人の応答性の認知得点が減少した。有意なアタッチメントスタイルの変化の主効果、および、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の交互作用は見られなかった。

その他の要因

本研究の対象者となった新入生は、Time 1 では、10 名 (5.0%) が父親、49 名 (25.1%) が母親、16 名 (8.0%) が友人の応答性の認知で想定した友人、54 名 (27.7%) がそれ以外の友人、27 名 (13.8%) が恋人、39 名 (20.0%) が複数の対象 (18 名、9.2%が友人の応答性の認知で想定した友人を含み、21 名、10.8%が友人の応答性の認知で想定した友人を含まなかった) を重要な他者として選択した (15 名が未記入)。Time 2 では、14 名 (8.0%) が父親、55 名 (31.3%) が母親、20 名 (11.4%) が友人の応答性の認知で想定した友人、51 名 (29.0%) がそれ以外の友人、20 名 (11.4%) が恋人、16 名 (9.1%) が複数の対象 (5 名、2.8%が友人の応答性の認知で想定した友人を含み、11 名、6.3%が友人の応答性の認知で想定した友人を含まなかった) を重要な他者として選択した (4 名が未記入)。Time 3 では、10 名 (6.1%) が父親、51 名 (31.1%) が母親、21 名 (12.8%) が友人の応答性の認知で想定した友人、50 名 (30.5%) がそれ以外の友人、22 名 (13.4%) が恋人、10 名 (6.1%) が複数の対象 (6 名、3.7%が友人の応答性の認知で想定した友人を含み、4 名、2.4%が友人の応答性の認知で想定した友人を含まなかった) を重要な他者として選択した (5 名が未記入)。

友人の応答性の認知で想定した友人を最も重要な人*¹⁸ であると選択するかどうか、Time 1–Time 2 間、Time 2–Time 3 間、Time 1–Time 3 間のアタッチメントスタイルの変化に影響を与えるかを検討するために χ^2 検定を行った。Time 2 において友人の応答性で想定した友人を最も重要な他者であると選択した個人と Time 2–Time 3 間でのアタッチメントスタイルの変化の有無との間に有意な関連を示した、 $\chi^2(1) = 7.82, p < .01$ (Table 12 参照)。Time 2 において友人の応答性の認知で想定した友人が最も重要な人物であると述べる人 (友人選択群) は、アタッチメントスタイルを変化させることが多かった。最も重要な人を想定した友人と選択した人 (友人選択群) の中で、Time 3 で安定型に変化した対象者は 1 名で、不安定型に変化した対象者は 8 名であった。一方、想定した友人を

最も重要な人と選択しなかった人（友人以外選択群）の中で、Time 3 に安定型に変化した対象者は 10 名であった。また、Time 3 で不安定型に変化した対象者は 15 名であった。

Time 3 において友人の応答性で想定した友人を最も重要な他者であると選択したかどうかと Time 2–Time 3 間でアタッチメントスタイルの変化の有無との間に有意な関連は示さなかった。また、Time 1 と Time 2 において友人の応答性で想定した友人を最も重要な他者であると選択したかどうかと Time 1–Time 2 間、および、Time 1 と Time 3 において友人の応答性で想定した友人を最も重要な他者であると選択したかどうかと Time 1–Time 3 間のアタッチメントスタイルの変化の有無との間に有意な関連を示さなかった。

Table 12 友人の応答性の認知で想定した友人を最も重要な他者と選択したかどうかの有無と Time 2–Time 3 間のアタッチメントスタイルの変化の有無

	友人選択群	友人以外選択群	合計
変化群	9	25	34
安定群	8	92	100
合計	17	117	134

考察

アタッチメントスタイルの変化と応答性の認知

本研究では、友人との相互作用によって内的作業モデルが変化するかを調べるために、大学の新入生を対象に入学時に知り合った最も仲の良い友人の応答性の変化によって、アタッチメントスタイルの変化が生じるかを検討した。先の 3–1 の研究では、恋人を最も重要な他者であると認識した青年がアタッチメントスタイルを変化させる可能性が高いことを示し、恋人の応答性に関する認知の変化が青年のアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすことを示した。本研究では、大学に入学してから知り合った最も親しい同性の友人を 1 ヶ月後の 5 月に最も重要な他者であると選定した青年が、アタッチメントスタイルを変化させる者が多いことを示した。この結果は、Hazan & Shaver (1987) が述べたように、内的作業モデルを変化させるような重要な他者は、恋人ばかりでなく友人においても成りうることを示唆している。関係性の初期分化現象を検証した山中 (1994) によると、

大学で知り合った友人との関係は、知り合って1週間では関係が未分化、すなわち、後の関係を予測することはできないが、2週間では関係が分化、すなわち、後の関係を予測することが可能である。1週間では関係を分化させなかった理由として、山中(1994)は、対象人物との関係を親密なものとするか否かに関する意志決定が、1週間では不十分であり、2週間経つと十分になるためであると示唆している。本研究においても、4月の時点では、まだ関係の分化が起こっていないために、大学に入学してから知り合った最も親しい同性の友人との関係が内的作業モデルを変化させることはなかったが、5月の時点では、もう関係の分化が起こったために、内的作業モデルを変化させることになったと考えられる。

しかし、本研究では、大学生が入学してできた最も仲の良い友人の応答性に関する認知の変化とアタッチメントスタイルの変化との関連を示さなかった。本研究で、大学で知り合った友人を最も重要な他者として選択した個人は、4月で8.0%、5月で11.4%、6月で12.8%と、増加傾向にあるもののあまり多くはなかった。大学で知り合った友人以外の重要な他者がいる多数の青年において、大学で知り合った友人は、たとえ大学では最も仲が良い人物だとしても、個人の内的作業モデルを変化させるほど重要な他者ではないと思われる。このため、大学で知り合った友人を最も重要な他者と思わない多くの個人にとって、重要な他者ではない友人とのコミュニケーションが内的作業モデルを変化させないため、本研究における大学生が入学してできた最も仲の良い友人の応答性に関する認知の変化とアタッチメントスタイルの変化との関連を示さなかったと考えられる。これらの点から、本研究では、対象者の人数の問題から行えなかった大学で知り合った友人を最も重要な他者であると選択する個人のみを対象に、友人の応答性の認知の変化と内的作業モデルの変化との関連を検証する必要があると思われる。また、そのような人物が、その後、その友人とどのような関係を形成するか、すなわち、その友人が個人にとって親友となりうるかを調べることで、親友になりうる他者との関係形成時に、内的作業モデルの変化が導かれやすいかを検証することができるのではないかと考える。

本研究において、予測していないこととして、大学に入学してから知り合った最も親しい同性の友人を最も重要な他者であると選定した大多数の個人は、不安定型に変化した。青年にとって、新しく知り合った同性の友人を親や恋人よりも重要な他者と認識することは、パーソナリティ発達を考えたときには良いものといえないのかもしれない。今後、本研究と同様の研究を繰り返し行うこと、また、長期的な研究を行うことで、新しく知り合った友人を最も重要な他者と認識することが、パーソナリティの発達上、ネガティブな影

響を持つかを明確にすると思われる。

アタッチメントスタイルの変化

本研究では、変化したアタッチメントスタイルが一時的なものなのかを検証するために、複数回にわたりアタッチメントスタイルの測定を行った。本研究において、70.7%の個人は、2回の測定を通じてアタッチメントスタイルが一定であった。この結果は、多くの先行研究とかなり一致するものである。また、3回の測定を通じて、56.8%の個人が同じアタッチメントスタイルであった。この結果も、Tidwell et al. (1996) *¹⁹の結果（58%が3度の測定で同じアタッチメントスタイルを選択した）と類似している。これらの結果は、アタッチメントスタイルの安定性は、通文化的なものであることを示唆している。すなわち、アタッチメントスタイルは、通文化的に、30～50%の変化可能性が生じていると考えられる。

また、本研究において、アタッチメントスタイルの変化が一時的であった個人は、アタッチメントスタイルの変化が継続した個人より少なかった。乳幼児期から青年期までの縦断研究をメタ分析した Fraley (2002) は、アタッチメントセキュリティの変化はある軸に沿って生じるものであるというプロトタイプ仮説を示唆したが、本研究の結果はこのモデルに疑問を投げかけるものである。但し、Fraley (2002) の研究では、乳児期から青年期までの縦断研究を用いたメタ分析であることに対して、本研究では、1度目の測定と3度目の測定の間は3ヶ月間という大変短い期間であり、1度変化した内的作業モデルがその後も個人の内的作業モデルであり続けるかは明確になっていないために正確には比較できない。しかし、乳児期から青年期までは内的作業モデルの変化可能性が残されていると考えられており (Bowlby, 1979)、本研究で示したように、内的作業モデルの可変性が減じている青年期以降の複数回行われた研究において、一度変化したアタッチメントスタイルがその後も継続するという結果は、実際に環境に応じて変化した内的作業モデルの変化が生じていることを示す。すなわち、アタッチメントスタイルが変化した個人は、その後もそのアタッチメントスタイルを新たなスタイルとして持ち続ける者が多いのではないかと考えられる。Bowlby (1969/1982) は、Piaget の認知発達理論を応用して、多くの心理的メカニズムは、内的作業モデルを確認するように働くという同化のプロセスと、現在の社会的環境に応じて、内的作業モデルを改訂、更新するという調節のプロセスを仮定しており、本研究の結果はこの仮定を支持するものであった。ただし、注意すべきこととして、

本研究では、1 度目の測定と 3 度目の測定の間は 3 ヶ月間という大変短い期間であった。このため、青年期以降において、1 度変化した内的作業モデルがその後も個人の内的作業モデルであり続けるかは明確になっていない。そこで、今後の研究として、長期の複数回行われる縦断研究を用いて、内的作業モデルが 1 度変化するとその後も比較的安定してその内的作業モデルを持ち続けることを検証する必要があると思われる。

3-3 出産を通じたアタッチメントスタイルの変化

これまで、3-1、および、3-2において、青年期の内的作業モデルの変化に関する要因について、恋愛関係と友人関係という 2 つの対人関係に焦点を当てて検証を行った。青年期は、多様な対人関係を持ち、自己に関する再構成の時期であると考えられている（平石, 1990）。それ故に、青年期は内的作業モデルの変化が生じやすい時期なのかもしれない。成人期にはいると自我や自己は比較的安定したものになる（岡本, 1986, 1992）。そこで、本研究では、青年期ばかりでなく成人期においても内的作業モデルの変化が生じるかを検証した。

成人期において、内的作業モデルを変化させる重要な関係は、夫婦関係が考えられる。しかし、現在、内的作業モデルの変化と夫婦関係に焦点を当てた研究はあまり多くは存在しない。Simpson et al. (2003) は、出産予定日の 6 週前と出産後 6 週の 2 度に渡って、個人のもつアタッチメント次元（回避性得点とアンビバレント性得点）、結婚満足度、知覚されたソーシャルサポートの要求と提供、拒絶を測定している。その結果、出生前に夫はあまりサポートを与えず、怒りをよく表すと知覚している妻は、出生後によりアンビバレント傾向が高くなった。一方、出生前に回避型傾向が高い夫を持ち、夫にサポートをよく求めた妻は、回避型傾向が高くなった。しかし、結婚満足度とアタッチメント次元の変化との関連は示されなかった。このように、出産という経験を通じた夫婦関係は、内的作業モデルの変化の要因になると考えられる。また、その出産は、夫婦関係に変化を及ぼす（我が国の出産後の夫婦関係の変化に関する詳細は桂田, 2009 参照）。例えば、小野寺 (2005) は、妻の 73.5%が出産を通じて夫婦関係が変化したと示している。総合して考えると、出産によって、夫婦関係が変化し、その夫婦関係の変化によって内的作業モデルの変化が生じるのではないかと思われる。そこで、本研究では、妊娠前と妊娠後の夫婦関係の変化と

アタッチメントスタイルの変化との関連を検証する。

先の 3-1, および, 3-2 では, 恋愛関係, および, 友人関係とのコミュニケーションに焦点を当てて, 内的作業モデルの変化に関する検証を行った。本研究においても, 夫婦間のコミュニケーションに焦点を当てる。しかし, 妊娠期と生後 3-4 ヶ月の 2 度に渡り調査を行った佐々木 (2006) の研究では, その 2 時点における夫婦間のコミュニケーション得点に差が示されなかった。桂田 (2009) は, この佐々木 (2006) の研究を基に, 親密性の低下は, 出産直後に起こるものではないと考察している。すなわち, 夫婦間のコミュニケーションの変化は, 出産というイベントで生じるのではなく, 子育てが始まり, その子育てに対する夫のサポートによって徐々に変化していくと考えられている。そこで, 本研究では, 3-1 や 3-2 のように 1 ヶ月という短期間の変化ではなく, 1 年間という比較的長期間の変化を調べることにした。

上述したことを考慮して, 本研究では, 夫婦間においても恋人間と同様の結果が予測されることから, 青年期の恋愛関係に焦点を当てた 3-1 の研究を繰り返すことにした。まず第 1 に, Baldwin & Fehr (1995) がレビューしたように, 2 度の反復測定により, 青年期ばかりでなく成人期においても, 約 30% の個人が実際にアタッチメントスタイルを変化させるのかを検証することとした。また, 変化するのであれば, 成人期における夫婦関係のうち, 夫婦の応答およびその応答に対する主観的認知を取り上げ, これらがアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすかについて検証することを第 2 の目的とした。3-1 の研究結果から, 安定型のアタッチメントスタイルを持つ個人は, 配偶者が拒絶的な応答を示したと認知している場合, 個人はアタッチメントスタイルを不安定型に改定し, 不安定型のアタッチメントスタイルを持つ個人は, 配偶者が応答的な応答を示したと認知している場合, アタッチメントスタイルを安定型に改定するという仮説をたてた。さらに, 重要な他者とアタッチメントスタイルの変化との関連を検証するために, 3-1 の恋愛関係では関連が示されなかったが, 再度, 配偶者の愛情の変化とアタッチメントスタイルの変化との関連を調べることを第 3 の目的とした。

方法

手続きと対象者

本研究では, 妊娠期の夫婦を対象に質問紙の入った封筒を配布した (Time 1)。次に, 2 度目の調査への参加に同意した対象者に, 返信時の消印から 1 年後に再度, 質問紙の入っ

た封筒を郵送した (Time 2)。以下において、Time 1、Time 2 に分けて、詳しく手続きを述べる。本研究は、2007 年から 2012 年にかけて 1 度目の質問紙の配布が行われた。

Time 1 本研究は、大阪府下にある市の保健センター主催のママ・パパ教室に参加した夫婦を対象とした。ママ・パパ教室は、妊娠後期の夫婦が、妊娠に関わる知識の学習と模擬体験が行える場所である。ママ・パパ教室の会場において、研究の趣旨、お互いに記入したものを見せ合わずに記入が終わり次第すぐに封筒に入れ、投函すること、再度調査を行うために住所、氏名を記入すること、記入された質問紙を著者以外は見ないこと（保健センターの職員を含む）、研究が終わり次第記入されたすべての質問紙等をシュレッダーにかけて廃棄すること、何か疑問があればいつでも連絡を取れること、研究に参加した人には謝礼が支払われることを伝え、研究に参加する意志がある人は自ら封筒を取りに来るように伝えた。本研究の参加の謝礼として、500 円の図書カードを封筒の中に入れた。質問紙の裏にはそれぞれナンバーリングが行なわれていた。

説明を受けて自らの意志で封筒を取りに来た夫婦は 212 組 (424 名) であった。配布された 212 組のうち、回答された質問紙は 95 組 (190 名) から返信された (回収率 44.8%)。回答者の平均年齢は 32.7 歳 ($SD = 5.56$)、年齢範囲は 22-50 歳であった。Time 1 の時点の平均妊娠期間は 7.83 ヶ月 (範囲 2-10 ヶ月, $SD = 1.55$) であった。

Time 2 Time 1 において参加を表明し、住所、氏名を記入した夫婦を対象に、Time 1 の消印から 1 年後に、再度、質問紙の入った封筒を郵送した。その際、研究の趣旨、お互いに記入したものを見せ合わずに記入が終わり次第すぐに封筒に入れ、投函すること、何か疑問があればいつでも連絡を取れること、研究に参加した人には謝礼が支払われることが書面にて伝えられた。また、Time 2 の参加の謝礼として、再度、500 円の図書カードを封筒の中に入れた。質問紙の裏にはそれぞれナンバーリングが行なわれており、Time 1 と Time 2 の回答が照合出来るようになっていた。

Time 1 において、Time 2 の研究に参加する意志として、住所と氏名を記載したカップルは 63 組 (126 名) であった。そのうち、Time 2 の回答をカップルの両者が返信したのは 42 組であった。回答者の平均年齢は 32.8 歳 ($SD = 5.26$)、年齢範囲は 24-44 歳であった。子どもの平均月齢は 11.0 ヶ月 (範囲 8-12 ヶ月, $SD = 1.18$) であった。

2 度の研究に応じた対象者 ($N=84$) と Time 1 のみ応じた対象者 ($N=106$) とのアタッチメントスタイル得点 (親密性の回避得点: 62.3 ($SD = 16.76$) vs. 63.9 ($SD = 17.45$); 見捨てられ不安得点 56.3 ($SD = 17.56$) vs. 56.4 ($SD = 17.45$)), 恋愛感情得点 (69.8 ($SD =$

10.97) vs. 69.0 (SD = 13.85)), 配偶者の応答性の認知得点 (48.7 (SD = 5.07) vs. 48.5 (SD = 6.31)), 本人の応答性得点 (39.9 (SD = 3.51) vs. 40.7 (SD = 3.79)) において、有意な違いは認められなかった。

質問紙

本研究の質問紙は、年齢、性別、妊娠期間 (Time 1)、子どもの月齢 (Time 2) を含むフェイスシートと以下の4つの尺度から構成されていた。

アタッチメントスタイル 本研究では、アタッチメントスタイルを測定するために中尾・加藤 (2004b) が作成した the Experienced in Close Relationship (ECR: Brennan et al., 1998) の一般版 (ECR-GO) を使用した (詳細は付録IXを参照)。先の2-3, 3-1, 3-2の研究で用いた ECR は、一般的に恋愛パートナーに対してどのように振る舞うかという信念に基づいて、アタッチメントを測定するものであり、2つの下位尺度 (親密性の回避尺度 18項目と、見捨てられ不安尺度 18項目、合計 36項目) から構成されている。ECR-GO は、質問項目の“恋人”を“人”に変更することで、恋愛パートナーのみならず、一般的な他者に対してどのように振る舞うかをとらえた。本研究では、夫婦を対象にして行われており、恋愛パートナーに関する信念を問う ECR では、倫理上不適當であると考えたため、ECR-GO を用いることとした。ECR と同様に、ECR-GO は、親密性の回避尺度と見捨てられ不安尺度の2つの下位尺度から構成されている。親密性の回避尺度は安定型-回避型を弁別する尺度であり、見捨てられ不安尺度は、アンビバレント型-非アンビバレント型を弁別する尺度である。ECR-GO は、中尾・加藤 (2004b) によって信頼性、妥当性が検討されており、その中でいくつかの項目が削除されている。本研究で再度、因子分析を行った結果、1つの項目で2つの因子にまたがり高い因子負荷量を示したが (“私は人があまりに自分と親密になってくると、とてもイライラしてしまう”), 残り全ての項目で Brennan et al. (1998) のオリジナル ECR の項目で想定された因子に.30以上の因子負荷量を示したので、本研究では、オリジナル ECR と同様の 36項目を採用した。親密性の回避尺度の項目例は“私は人に心を開くのに抵抗を感じる”や“私は人とあまり親密にならないようにしている”である。見捨てられ不安尺度の項目例は、“私は人を失うのではないかと結構心配している”や“私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配する”である。回答は“全く当てはまらない”(1点) か

ら“非常に当てはまる”(7点)の7段階評定で行った。本研究での信頼性係数は親密性の回避尺度で $\alpha = .89$, 見捨てられ不安尺度で $\alpha = .91$ であった。

配偶者の応答性の認知 自分が提示したコミュニケーションシグナルに対して配偶者がどのように応答したと認知するかを測定するために、岡島(2006)が作成した恋人の反応性認知尺度を用いた(詳細は付録Xを参照)。恋人の反応性認知尺度は恋人と行っているコミュニケーションについて、投げかけられたシグナルに対して恋人が応答的・回避的な応答を行うという次元性で測定するために作成されたものである。本研究では、“恋人”を“配偶者”に変えて使用した。また、“恋人は私から会おうと誘われると(会う／会わない)”は、夫婦関係において適切ではないと考えられるので削除した。8項目を基に主因子法バリマックス回転の因子分析を行ったところ、固有値1以上では2因子が確認されたが、本研究では、スクリープロットを基に1因子であると判断した。再度、1因子で主因子法バリマックス回転の因子分析を行ったところ、すべての項目で.30以上の因子負荷量を持っていた。このため、本尺度は8項目すべてを採択した。本尺度は、“配偶者の応答性認知尺度”と名付けた。項目例は“配偶者は私が話しているときに(目を見ない/目を見る)”や“配偶者は私からの電話に(出ない/必ず出る)”である。回答は意味的に対立するような語を1点と7点に配置した7段階評定からなり、得点が高いほど応答的であると認知したことを示すものであった。本研究での信頼性係数は $\alpha = .74$ であった。さらに、本研究では、これらの応答性が全体としてどれくらい一貫性を持って行われていると認知しているかを、“いつもそうである”(7点)“から“予測がつかない”(1点)までの7段階評定で行った。得点が高くなるほど一貫性があると認知していることを示した。

配偶者に対する自身の応答性 本研究では、上述の配偶者の応答性認知尺度の質問項目の“私”と“配偶者”を入れ替えて使用することによって、配偶者が示したコミュニケーションシグナルに対して自分がどのように応答したかを測定した(詳細は付録XIを参照)。配偶者の応答性認知尺度と同様に、8項目で、回答は7段階評定からなり、得点が高いほど応答的であることを示すものであった。本研究での信頼性係数は $\alpha = .70$ であった。さらに、本研究では、これらの応答性が全体としてどれくらい一貫性を持って行われていたかを、“いつもそうである”(7点)“から“予測がつかない”(1点)までの7段階評定で行った。得点が高くなるほど一貫性をもって応答したことを示した。

夫婦の愛情 夫婦の愛情を測定するために、Marital Love 尺度（菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002）を使用した。Marital Love 尺度は、社会心理学の恋愛尺度を参考に、夫婦間の愛情を測定するために作成されたものである（詳細は付録 XII を参照）。Marital Love 尺度は、10 項目から成り、一次元構造が確認されている。項目例は、“妻（夫）とは今でも恋人のような気がする”や“妻（夫）のためなら何でもしてあげるつもりだ”である。回答は「全くそう思わない」（1 点）から「非常にそう思う」（9 点）の 9 段階評定で行った。Marital Love 尺度は、得点が高いほど配偶者に愛情を持っていることを示す。本研究での信頼性係数は $\alpha = .87$ であった。

属性に関する項目 本研究において、対象者は、年齢、性別、妊娠期間（Time 1）、子どもの月齢（Time 2）を記述した。

結果

アタッチメントスタイルの分類

最初に、3-1 の恋人間の研究と同様に、対象者は、ECR-GO の親密性の回避得点と見捨てられ不安得点を用いた Ward 法によるクラスター分析によって 3 つのアタッチメントスタイル（安定型、回避型、アンビバレント型）に分類された*20。本研究では、回避型、アンビバレント型を込みにし、安定型-不安定型間での比較を行った。Time 1 で安定型に分類された対象者は 47 名（56.0%）、不安定型は 37 名（44.0%）（回避型は 24 名，28.6%，アンビバレント型は 13 名，19.0%）であった。Time 2 で安定型に分類された対象者は 40 名（47.6%）、不安定型は 44 名（52.4%）（回避型は 32 名，38.1%，アンビバレント型は 13 名，15.5%）であった（Table 13 参照）。3 分類のアタッチメント分類において、Time 1 から Time 2 で 66.7% の対象者が同じアタッチメントスタイルに分類された， $\kappa = .47$, $p < .001$.

Table 13 Time 1 と Time 2 おけるアタッチメントスタイルの割合

		Time 2			合計
		安定型	回避型	アンビバレント型	
Time 1	安定型	32	12	3	47
	回避型	5	17	2	24
	アンビバレント型	3	2	8	13
	合計	40	31	13	84

Time 1 から Time 2 にかけて、安定型が継続した人 (NCS; Non Changed Secure) は 32 名 (38.1%), 不安定型が継続した人 (NCI; Non Changed Insecure) は 25 名 (29.8%), Time 1 から Time 2 にかけて不安定型から安定型に変化した人 (CS; Changed Secure) は 8 名 (9.5%), 安定型から不安定型に変化した人 (CI; Changed Insecure) は 19 名 (22.6%) であった。本研究では、アタッチメントスタイル、および、配偶者の応答性認知尺度に性差がなかったことから、その後の分析は性差を考慮に入れず分析を行った。

配偶者の応答性の認知の変化とアタッチメントスタイルの変化

配偶者の応答性の認知の変化と、個人のアタッチメントスタイルの変化との関連性を検証するために、配偶者の応答性の認知得点を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った。配偶者の応答性の認知得点に関して、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の有意な交互作用が認められた、 $F(3, 80) = 3.92, p < .05$ (Figure 3 参照)。調査時期における単純主効果検定をおこなった結果、アタッチメントスタイルが安定型から不安定型に変化した人 (CI) は、Time 1 ($M = 49.1, SD = 4.23$) から Time 2 ($M = 43.5, SD = 8.47$) にかけて配偶者の応答性認知得点が有意に減少した、 $F(1, 80) = 15.94, p < .001$ 。アタッチメントスタイルが不安定型から安定型に変化した人 (CS) は、Time 1 ($M = 48.0, SD = 5.24$) から Time 2 ($M = 50.9, SD = 4.49$) にかけて有意な変化は認められなかった。また、アタッチメントスタイルが不安定型で継続した人 (NCI) は Time 1 ($M =$

47.5, SD = 5.28) から Time 2 (M = 45.0, SD = 8.13) にかけて配偶者の応答性認知得点
有意に減少した, $F(1, 80) = 4.42, p < .05$. アタッチメントスタイルが安定型で継続した人
(NCS) は Time 1 (M = 49.5, SD = 5.34) と Time 2 (M = 47.9, SD = 5.08) との間で, 配偶
者の応答性認知得点に違いを示さなかった. 変化群の単純主効果検定をおこなった結果,
Time 2 において, 変化群による配偶者の応答性認知得点の違いが示された, $F(1, 80) = 3.08,$
 $p < .05$. アタッチメントスタイルが不安定型から安定型に変化した人 (CS; M = 50.9, SD
= 4.49) は, アタッチメントスタイルが不安定型に変化した人 (CI; M = 43.5, SD = 8.47)
やアタッチメントスタイルが不安定型で継続した人 (NCI; M = 45.0, SD = 8.13) より高
い配偶者の応答性認知得点を示した ($p < .05$). アタッチメントスタイルが安定型で継続し
た人 (NCS; M = 47.9, SD = 5.08) は, アタッチメントスタイルが不安定型で継続した人
(NCI; M = 45.0, SD = 8.13) より高い配偶者の応答性認知得点を示した ($p < .05$). Time 1
において, 有意な単純主効果は認められなかった.

配偶者の応答の一貫性における認知の変化と, 個人のアタッチメントスタイルの変化と
の関連性を検証するために, 配偶者の応答の一貫性得点を従属変数, Time 1 から Time 2
にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り
返しのある対象者内の分散分析を行った. 配偶者の応答の一貫性に関して, アタッチメン
トスタイルの変化と測定時期の有意な交互作用, および, 有意なアタッチメントスタイル
の変化の主効果, 時期の主効果は認められなかった.

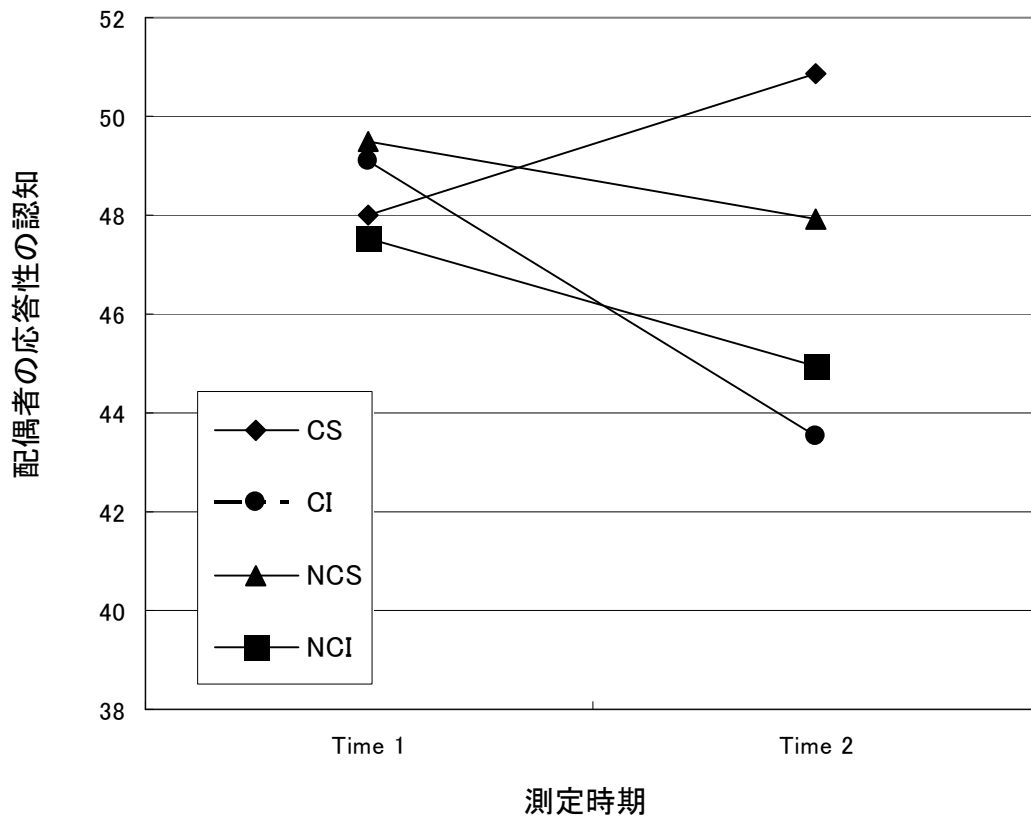


Figure 3 アタッチメントスタイルの変化, および, 測定時期による配偶者の応答性に関する認知

配偶者に対する自身の行った応答の変化と配偶者のアタッチメントスタイルの変化

回答者本人が配偶者に対して行った応答の変化と, 配偶者のアタッチメントスタイルの変化との関連性を検証するために, 回答者本人が行った応答性得点を従属変数, Time 1 から Time 2 にかけての配偶者のアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った. 配偶者に対して自身が行った応答性得点に関して, 配偶者のアタッチメントスタイルの変化と測定時期の交互作用の傾向が認められた, $F(3, 80) = 2.30, p < .10$ (Figure 4 参照). アタッチメントスタイルが不安定型で継続した配偶者 (NCI) は, Time 1 ($M = 40.2, SD = 3.51$) から Time 2 ($M = 37.2, SD = 8.61$) にかけて回答者本人が行った応答性得点が有意に減少した. アタッチメントスタイルが変化した配偶者 (CS と CI) とアタッチメントスタイルが安定型で継続した配偶者 (NCS) は, Time 1 (それぞれ $M = 40.6, SD = 2.26$; $M = 39.7, SD = 4.22$; $M = 39.5; SD$

= 3.40) から Time 2 ($M = 42.0$, $SD = 4.14$; $M = 40.0$, $SD = 3.11$; $M = 40.0$, $SD = 3.64$) にかけて有意な変化は認められなかった。回答者本人が行った応答性得点に関して、配偶者のアタッチメントスタイルの変化の主効果、および、時期の有意な主効果は認められなかった。

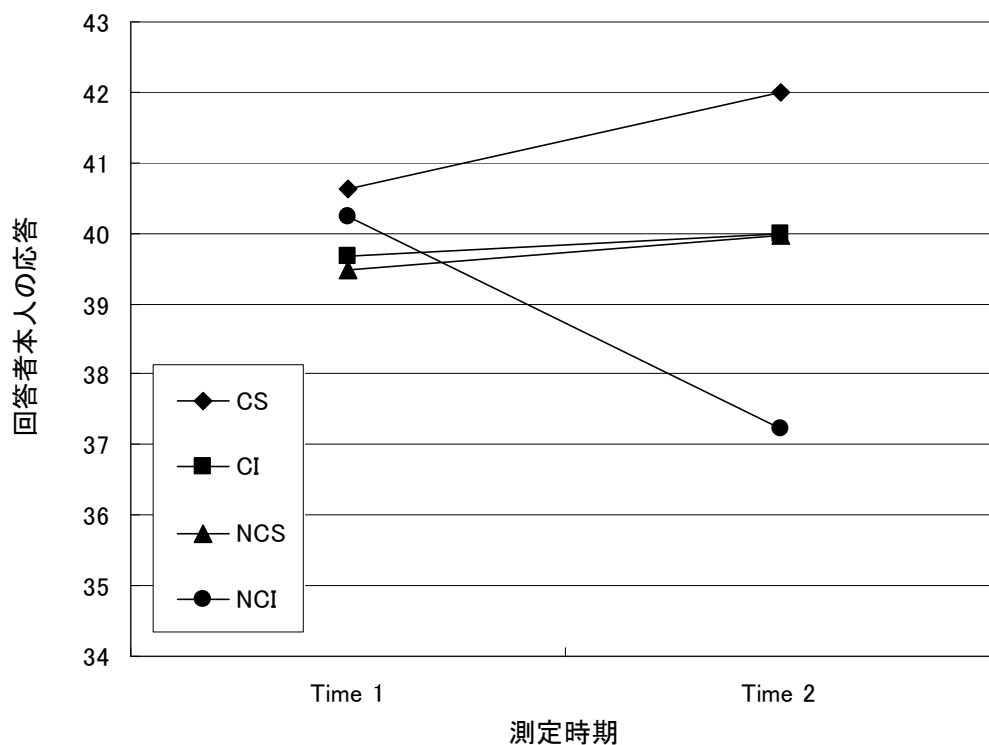


Figure 4 配偶者のアタッチメントスタイルの変化, および, 測定時期による回答者本人の応答

回答者本人が行った応答の一貫性得点の変化が、配偶者のアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすかということを検証するために、回答者本人が行った応答の一貫性得点を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけての配偶者のアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った。回答者本人が行った応答の一貫性得点に関して、配偶者のアタッチメントスタイルの変化と測定時期の有意な交互作用、および、配偶者のアタッチメントスタイルの変化の主効果、時期の主効果は認められなかった。

配偶者に対する愛情の変化とアタッチメントスタイルの変化

配偶者に対する愛情の変化が、個人のアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼすかということを検証するために、配偶者に対する愛情得点を従属変数、Time 1 から Time 2 にかけてのアタッチメントスタイルの変化 (NCS, NCI, CS, CI) を独立変数とした繰り返しのある対象者内の分散分析を行った。配偶者に対する愛情得点に関して、アタッチメントスタイルの変化と測定時期の有意な交互作用、および、アタッチメントスタイルの変化の主効果、時期の主効果は認められなかった。

考察

アタッチメントスタイルの変化

本研究では、はじめに、成人期における出産・子育てを通して夫婦関係に変化が生じていることを想定して、それが、アタッチメントスタイルの変化に反映されるのかを検証した。妊娠―出産期間の1年間という比較的長い期間を通じて、同じ尺度で測定したアタッチメントスタイルは、33.3%の個人が変化していることを示した。これは、欧米におけるアタッチメントスタイルの安定性に関する先行研究 (cf., Baldwin & Fehr, 1995) や 3 – 1 の恋愛関係を対象とした研究で発見されたものと同程度の割合で、どの時期、期間においても一定の割合で個人の内的作業モデルが変化していることを示している。このことは、アタッチメントスタイルの変化は文化を通じて、さらに、対象との関係の違いを通じて、あまり違いを示さないということを示唆するものである。すなわち、約 30% くらいの個人は、一定の期間を通じてアタッチメントスタイルを変化させるようである。

アタッチメントスタイルの変化と応答性の認知

本研究は、成人期の夫婦関係において、アタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼす要因として、コミュニケーションの応答性ということに焦点を当てて検証した。予測通り、本研究では、配偶者の応答性の認知がアタッチメントスタイルの変化と関連性を持つことが示された。妊娠期から出産後にかけて個人が配偶者の応答を回避・拒絶的であると認知するようになった場合、アタッチメントスタイルが不安定型に変化することと関連した。一方で、妊娠期から出産後にかけて個人が配偶者の応答を応答的であると認知することと、アタッチメントスタイルが安定型に変化することとの有意な関連は示されな

かった。しかし、統計的には有意ではないが、安定型に変化した個人はすべて、妊娠期から出産後にかけて配偶者の応答を応答的であると認知するようになっていた。このような結果は、3-1の恋愛関係の結果と同様に、Bowlby (1979,1980) が、今までに作られ、内在化された内的作業モデルと実際の認知が合致しないときに、個人は自らの内的作業モデルを改定することによって、環境に適応しようとしているという示唆と合致すると思われる。また、この結果は、成人期において、配偶者が個人の内的作業モデルを変化させるほど重要な他者であることを示唆するものである。

予測しなかったことに、本研究では、不安定型が継続した人は、妊娠期から出産後にかけて配偶者の応答を回避・拒絶的に認知するようになった。さらに、不安定型が継続した人は、本人が認知しているだけでなく、配偶者が実際に回避・拒絶的に応答していた。桂田 (2009) は、我が国の夫婦関係に特有なこととして、子どもを持つということが夫婦関係の親密度の低下につながると示唆した。本研究において、妊娠期から出産後にかけて不安定型を継続させた個人や不安定型に変化させた個人が、配偶者の応答を回避・拒絶的に認知するようになったこと、および、配偶者の応答が実際に回避・拒絶的になったことは、子どもを持つことによって生じる親密性の低下につながるコミュニケーションであると考えられる。すなわち、本研究では、出産や約1年間の子育てを通して不安定型に変化した、および、不安定型が継続した夫婦が多かったが、この結果も桂田 (2009) の示唆を支持している。伊藤・相良・池田 (2007) は、育児期において、自らが行う配偶者の自己開示が自らの結婚満足度を規定し、さらに、妻の自己開示が夫の夫婦満足度を規定することを示した。コミュニケーションは、元来、当事者間にある知識の落差を埋める作業であり、対人関係の緊張を解消し、安定した関係を築き、維持するために用いられるが (大坊, 2004)、ネガティブなコミュニケーション、および、その認知は、関係ばかりでなく個人の内的作業モデルにおいても悪い影響 (不安定型を持続したり不安定型に変化させる) を与えると考えられる。さらに、佐々木 (2006) は、夫婦間のコミュニケーションと家事・育児との関連を示している。Simpson et al. (2003) も、妊娠期のソーシャルサポートが、個人のアタッチメントスタイル次元の変化との関連を示した。すなわち、桂田 (2009) が示唆するように、妊娠・出産・育児期の夫婦関係の親密さを保つために、夫のソーシャルサポートが必要である。このような視点に立つて考えると、妊娠・出産・育児期において、夫がサポートを行うことで、夫婦関係が良好 (特に、妻の結婚満足度が良好) になり、その結果として夫婦のコミュニケーションが応答的になるのではないかと考えられる。そこで、今

後の研究として、妊娠期、および、育児期のソーシャルサポートが夫婦間のコミュニケーションの変化を導き、そのコミュニケーションの変化がアタッチメントスタイルの変化を導くかを継時的に検証することが必要であると思われる。

また、3-1と同様に、本研究では、再度、愛情が内的作業モデルの変化に関わる重要な他者を識別するかを調べた。しかし、本研究では、夫婦の愛情の変化とアタッチメントスタイルとの関連は示さなかった。恋愛結婚が主流となった現在の婚姻関係において、愛情は夫婦関係を維持する上で重要な要素であると考えられるが、時間を通じて変化（多くは減少）する愛情（菅原・詫摩, 1997）は重要な他者を示す指標には成りえないと考えられる。内的作業モデルを変化させるためには、恋愛感情のような感情の側面ではなく、パートナーの応答性に関する認知のような認知的な側面であると考えられる。

第4章 総合考察

本章では、乳幼児期に形成された内的作業モデルがパーソナリティのように働くこと (Bowlby, 1973, 1980) と、その内的作業モデルは青年期以降では時間的安定性を示すこと (Bowlby, 1973, 1979) というアタッチメント研究における2つの仮定に関する一連の研究 (2章、3章に示された研究) の結果を概観し、そこから示唆されたことについて述べる。さらに、本研究における限界と今後の課題について述べる。

4-1 本研究で得られた知見

4-1-1 他者に対する情報量と内的作業モデルの機能

乳児期のアタッチメント研究は、不安や恐怖、ストレスというネガティブな感情が生じた際に、乳児がどのような行動を取るかに焦点が当てられて行われていた (Ainsworth et al., 1978)。青年期以降のアタッチメント研究では、不安や恐怖、ストレスなどのネガティブな感情が生じたときの行動がアタッチメントスタイルによって異なることを示している (e.g. Fraley & Shaver, 1998)。これらの研究は、それまでに関係が進展しているアタッチメント人物との相互作用に焦点が当てられている。Bowlby (1969/1982) は、アタッチメントはパーソナリティ発達に影響を与えると述べており、乳幼児期に形成された内的作業モデルは後の対人関係における関係性の認知や感情のコントロールの鋳型となると述べている (Bowlby, 1973)。このような点から、個人の内的作業モデルが最も発現されるのは、相手に対する情報がいくらかある時よりも、全くない時ではないかと考えられる。個人は、初対面の他者がどのように振る舞うかについての知識はなく、これまでの自分の経験から形成された対人認識、いわゆる、内的作業モデルに基づいて、その他者の行動を予測し、自らの行動の基盤とするはずである。そこで、まず、他者に対する情報量によって内的作業モデルを用いた対人認知が異なるかを検証した。

(1) 初対面の人に対する内的作業モデルの機能 (質問紙研究から)

第2章の2-1では、青年期のアタッチメントスタイルと初対面の人に対する対人行動との関連を検証した。その結果、初対面の人に対する行動には、アタッチメントスタイルの違いが示された。安定型の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が低く、ありのままの自己を表出し、他者に依拠せず、他者を受容できることが示された。一方、回避型

の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が高く、ありのままの自己を表現せず、他者を受け入れないことが示された。また、アンビバレント型の個人は、初対面の人に対して閉鎖性・防衛性が高く、他者に依拠するが他者を受容することができないことが示された。

（２）初対面の人に対する内的作業モデルの機能（行動観察研究から）

２－１で行われた実際の初対面の人に対する行動とアタッチメントスタイルとの関連に関する研究は、質問紙を用いた想像上の初対面の人に対する行動であった。そこで、２－２では、マイルドな不安を喚起した状態で初対面の人に対する実際の行動とアタッチメントスタイルとの関連について検証を行った。その結果、実際の初対面の人に対する行動においても、想像された初対面の人に対する行動と同様に、アタッチメントスタイルの違いが示された。アンビバレント型（とらわれ型）の個人は、安定型の個人よりも、自らに閉じこもった防衛的な態度をとり、ありのままの自己を素直に表すことができないことが示された。回避型の一つと考えられる（恐れ型）の個人は、アンビバレント型（とらわれ型）と安定型の間値を示していた。

（３）交際期間による内的作業モデルの機能

２－１、２－２では、初対面の人に対する行動がアタッチメントスタイルによって異なるかを検証した。その結果、相手に対する情報がない時に内的作業モデルが機能することが明らかとなった。これらの結果から、継続する関係性において、その交際期間によって、パートナーに対する情報量に違いがあるために、内的作業モデルを用いた対人認知を行うかどうかということも違ってくるのではないかと推測される。そこで、２－３では、現在、関係を持っている（重要な）他者に対して常に内的作業モデルに依拠した対人認知を行っているかを調べるために、青年期のアタッチメント人物である恋人に対して、交際期間による対人認知とアタッチメントスタイルとの関連の違いが生じるかを検証した。その結果は、アタッチメントスタイルと恋人の応答性の認知との関連の有無は、交際期間によって異なっていた。交際初期（交際開始から５ヶ月以内）では、アタッチメントスタイルによって恋人の応答性の認知が異なる傾向が示された。安定型の個人は、回避型の個人より恋人の応答性をポジティブに認知する傾向があった。交際中期（交際期間６ヶ月から２３ヶ月）では、アタッチメントスタイルによって恋人の応答性の認知に関する違いは認められ

なかった。2 年以上交際を継続しているカップルでは、アタッチメントスタイルによって恋人の応答性の認知に違いが認められた。安定型の個人は、不安定型（回避型とアンビバレント型）の個人より、恋人の応答性をポジティブに認知していた。

4-1-2 アタッチメントスタイルの変化

Bowlby (1969, 1973, 1980) は、乳幼児期における養育者との相互作用によって、個人が脅威的な状況での対処の仕方、また、その後の対人的な情報を処理する際の鋳型となる内的作業モデルを形成すると述べた。その内的作業モデルは、その後比較的安定したものになる (Bowlby, 1973, 1979)。しかし、この内的作業モデルの時間的安定性は、どの年代においても中程度の安定性を示すのみであった。すなわち、内的作業モデルが変化する可能性があった。しかし、これらの内的作業モデルの変化に関する研究は全て欧米のものであり、我が国においては、内的作業モデルの変化を取り扱った研究は非常に少なく（筆者が知る限り、青年期・成人期の内的作業モデルの変化を扱った研究は、山岸, 2003, 2005 だけである）、内的作業モデルの変化を対人関係文脈でとらえている研究は、筆者の知る限り存在しない。そこで、本研究では、我が国においても欧米諸国と同様に、内的作業モデルが比較的安定するとされる青年期以降において、その変化が生じるのか、生じるとしたらどの程度生じるかを検証した。さらに、内的作業モデルが変化するという立場に立った場合、その変化を及ぼす要因として、他者とのコミュニケーションに焦点を当てて検証を行った。

（1）恋人との関係におけるアタッチメントスタイルの変化

第3章のはじめ（3-1）では、二度の反復測定により、個人のアタッチメントスタイルが実際に変化するのかを検証した。結果は、同じ尺度で測定したアタッチメントスタイルは一ヶ月間の間に 25%の個人が変化していることを示した。

次に、内的作業モデルが変化する理由を調べるために、青年期の恋愛関係において、アタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼす要因として、恋人の応答性の認知、および、自分が行った応答性に焦点を当てて検証した。恋人の応答性の認知とその応答についての一貫性の認知が、アタッチメントスタイルの変化と関連性を持つことが示された。個人が恋人の応答性を応答的であると認知するようになることと、その応答に一貫性があると認知するようになることが、個人のアタッチメントスタイルが不安定型から安定型に変化する

ることと関連を示した。また、個人が恋人の応答性を拒絶的であると認知するようになることと、その応答に一貫性がないと認知するようになることが、安定型から不安定型にアタッチメントスタイルが変化することと関連を示した。一方、恋人が行ったと述べた応答性と、アタッチメントスタイルの変化との間の関連は検出されなかった。

さらに、アタッチメントスタイルの変化に関して、すべての恋愛関係が等価なのかを検証するために、交際期間、恋愛感情、すべての関係の中で恋人が最も重要であると認識することとアタッチメントスタイルの変化との関連を検証した。アタッチメントスタイルの変化は、恋人を最も重要な他者として認識していることと関連することが示された。一方、交際期間と恋愛感情はアタッチメントスタイルの変化との関連を示さなかった。

（２）新入生における友人関係とアタッチメントスタイルの変化

友人との相互作用によって内的作業モデルが変化するかを調べるために、大学の新入生を対象に入学時に知り合った最も仲の良い友人の応答性の変化によって、アタッチメントスタイルの変化が生じるかを検討した。その結果、大学に入学してから知り合った最も親しい同性の友人を１ヶ月後の５月のみに最も重要な他者であると選定した青年が、アタッチメントスタイルを変化させることを示した。しかし、その最も仲の良い友人の応答性に関する認知の変化とアタッチメントスタイルの変化との関連を示さなかった。さらに、変化したアタッチメントスタイルが一時的なものなのかを検証するために、１ヶ月間隔で３回にわたりアタッチメントスタイルの反復測定を行った。70.7%の個人は、４月と５月の２回の測定を通じてアタッチメントスタイルが一定であった。また、３回の測定を通じて、56.8%の個人が同じアタッチメントスタイルであった。

（３）出産を経験したアタッチメントスタイルの変化

成人期における出産・子育てを経験した夫婦の間では、アタッチメントスタイルの変化の可能性が高いのではないかと想定し、検証した。妊娠―出産期間の１年間という比較的長い期間を通じて、同じ尺度で測定したアタッチメントスタイルは、33.3%の個人が変化していることを示した。さらに、成人期の夫婦関係において、アタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼす要因として、コミュニケーションの応答性ということに焦点を当てて検証した。配偶者の応答性の認知がアタッチメントスタイルの変化と関連性を持つことが示された。妊娠期から出産後にかけて個人が配偶者の応答を回避・拒絶的であると認知す

るようになった場合、アタッチメントスタイルが不安定型に変化することと関連した。一方で、妊娠期から出産後にかけて個人が配偶者の応答を応答的であると認知することと、アタッチメントスタイルが安定型に変化することとの有意な関連は示さなかった。しかし、有意な関連は示されなかったけれど、安定型に変化した個人はすべて、妊娠期から出産後にかけて配偶者の応答をより応答的であると認知するようになっていた。

4-2 考察

Bowlby (1969/1982, 1973, 1980) は、いくつかの理論的な仮定に基づいてアタッチメント理論を構築していった。その仮定の中に、“時間”にまつわる仮定があった。第1の仮定として、乳幼児期に乳児とアタッチメント人物との相互作用によって形成された内的作業モデルは、パーソナリティのように働くということである。Bowlby (1969/1982) は、アタッチメントはパーソナリティ発達に影響を与えると述べており、乳幼児期に形成された内的作業モデルは後の対人関係における関係性の認知や感情のコントロールの鋳型となると述べた (Bowlby, 1973)。このため、青年期以降のアタッチメント研究では、アタッチメントスタイルをパーソナリティ特性のように扱い研究が行われていることが多い。しかし、乳児期のストレンジ・シチュエーション法を用いた研究では、不安や恐怖・ストレスが生じたときに、乳児がアタッチメント人物に対してどのような行動を示すかに焦点を当てている (Ainsworth et al., 1978)。すなわち、乳児期では、不安や恐怖・ストレスが生じたときに活性化されたアタッチメント行動システムを基盤に行われる乳児のアタッチメント行動の違いに焦点を当てているのである。このような行動は、パーソナリティの基本的な定義である継時的、通状況的に個人内で一貫している (Krahe, 1992) という条件を満たしていない。まだ内的作業モデルが内在化されていない乳児期では、アタッチメント研究をパーソナリティ研究としてとらえる必要はないが、内的作業モデルが内在化した後の青年期以降では、アタッチメント研究をパーソナリティ研究としてとらえるべきなのか、状況に応じて働くシステムとしてとらえるべきなのかが明確にされていない。現在、青年期以降の研究において、多くのアタッチメント研究は、継時的・通状況的なパーソナリティ研究としてとらえられている。しかし、パーソナリティとして継時的・通状況的に一貫しているものとしてとらえず、状況に応じて活性化されるシステムとして内的作業モデルをとらえている研究者もいる (e.g., Mikulincer et al., 1993; Simpson et al., 1992; 若尾,

2004). そこで、本研究の第 2 章においては、状況に応じて活性化されるシステムとして内的作業モデルを捉える研究者の立場にたち、青年期以降の個人は、どのような状況においてアタッチメント行動システムが活性化されるのかを調べた。その結果、初対面の他者に対して内的作業モデルを用いた行動が行われていることを示した。状況によるアタッチメント行動の違いを検証した中尾・加藤 (2005) は、本研究と同様に、初対面の他者に対してアタッチメント行動を行うことを示している。見知らぬ他者は、乳児期においてアタッチメント行動システムを活性化させる要因であると考えられており (久保田, 2008)、上述の結果は、青年期においても、見知らぬ他者である初対面の他者と接するという事で喚起される不安や恐怖、ストレスによってアタッチメント行動システムが活性化したと考えられる。このように、不安や恐怖、ストレスによってアタッチメント行動システムが活性化したとき、初対面の他者に対しては、どのように振る舞うべきなのかという先行的な知識 (例えば、その人物のパーソナリティや自分とその人物との関係性に関する知識) が不在のため、既存の知識を用いて対応しなければならない。そのため、見知らぬ初対面の他者に対する行動には個人差が生じると考えられる。初対面の他者に対する行動に関する個人差は、対人不安 (福田, 2013) などの性格的な要因やソーシャルスキル (谷村・渡辺, 2008) などから述べられてきたが、本研究の結果から、乳幼児期のアタッチメント人物との相互作用から形成された内的作業モデルが重要な役割を果たすと思われる。すなわち、初対面の他者のように情報が少ない見知らぬ他者は、情報が無い故に、以前にアタッチメント人物との相互作用によって内在化した内的作業モデルを用いる必要があると考えられる。

さらに、本研究では、継続する関係の中で、その他者に対する情報量の違いが内的作業モデルを用いた対人認知の違いに影響を及ぼすかを調べるために、恋愛関係にあるカップルを対象に研究を行った。交際初期において、個人は、内的作業モデルを用いて恋人のコミュニケーションを認知していた。一方で、交際中期には、内的作業モデルを用いた認知を行っていなかった。交際初期は、恋人の情報量が少ないと考えられ、上述の初対面の他者に対する行動と同様に、内的作業モデルは情報量が少ないこの時期に有効に用いられると考えられる。しかし、カップルの間で自己開示などを行うことで (Zeifman & Hazan, 2000)、関係中期にはお互いの情報量がある程度蓄積されていると考えられる。そのため、関係中期では、内的作業モデルを用いた認知は行わなかったと推測される。交際 2 年以上になり、再び内的作業モデルが用いられるようになったのは、交際中期に使用されず眠っ

ていた内的作業モデルを用いた対人認知を再び行ったか、または、それまでの段階で修正された内的作業モデルを用いていることが考えられた。2 年以上交際を行うことで内的作業モデルを再び用いるようになることは、恋人に対する情報の不足を埋めるために用いられるというものである。この時期では、恋人との見つめ合いや身体的接触の頻度や長さは極端に減り、会話の内容は、自分の話題や相手の話題、関係の話題ではなく、関係以外の話題が中心となるため (Zeifman & Hazan, 2000)、現在の恋人に関する情報は減り、不明瞭になると思われる。このように、2 年以上の長期間交際することによって、恋人の情報を収集することが減り、それを埋めるために内的作業モデルを用いていると考えられる。ただし、ここで用いられる内的作業モデルは、以前から内在化していたが眠っていた内的作業モデルか、新たに改訂された内的作業モデルかは分かっていない。Hazan & Zeifman (1994) は、2 年以上交際した恋人は、新たなアタッチメント人物になることを示した。新たなアタッチメント人物との関係が、既存の内的作業モデルと一致しないならば、既存の内的作業モデルを変化させることによって、その関係に適応すると考えられる。このように、既存の内的作業モデルか改訂された内的作業モデルかは分からないけれども、個人は、2 年以上交際を継続させることによって、恋人の情報量が減り、再び、内的作業モデルを用いた対人認知を行うと考えられる。

これらを総合して考えると、青年期・成人期の内的作業モデルは、パーソナリティのように継時的、通状況的に個人内で一貫しているというよりは、少ない対人情報を埋めるために、対人関係に関するメンタルモデルのように働くということを示唆するものである。これは、初対面の他者を含む関係の初期や 2 年以上継続しているような長期間の交際において起きる。さらに、そのような関係の浅い他者と接し、そこで不安が喚起されたときに、アタッチメント行動システムが活性化する。初対面の他者では、その他者の情報が少ないことからより以前にアタッチメント人物との相互作用によって内在化した内的作業モデルを用い、それが関係の浅い他者に対する認知面ばかりでなく、行動に反映されると考えられる。

本研究で問題にした第 2 の仮定は、内的作業モデルの時間的安定性に関するものである。Bowlby (1979) は、幼少期の乳児—アタッチメント人物関係において形成された内的作業モデルは、いったん内在化されると児童期くらいまでは可変性はあるものの、その後は可変性が減じていくと述べた。この仮定が真実であるならば、青年期以降は内的作業モデルが変化しにくいと考えられる。しかし、Bowlby (1979, 1980) はまた、内的作業モデルの

永續性を仮定する一方で、個人が内在化している内的作業モデルにそぐわない状況が生じたとき、その内的作業モデルを新しいモデルに置き換えて環境に適応することも示唆している。最近では、青年期以降も内的作業モデルは変化すると主張する研究者もいる (e.g., Baldwin & Fehr, 1995)。Baldwin & Fehr (1995) は、アタッチメントスタイルの変化に焦点を当てて分析をすると、約 30% の人がアタッチメントスタイルを変化させていると述べている。我が国では、青年期以降の内的作業モデルの変化に焦点を当てた研究は少なく、実際に欧米の研究と同じように、内的作業モデルの変化が生じるかは疑問が残っていた。そこで、本研究では、青年期、成人期においていくつかの縦断研究を実施した。その結果、青年期の恋愛関係に焦点を当てた 3-1、大学の新入生に焦点を当てた 3-2、妊娠期の夫婦に焦点を当てた 3-3 のいずれの研究においても、欧米と同じ程度の個人がアタッチメントスタイルを変化させた (測定間隔 1 ヶ月から 1 年で 25%–33%)。この結果は、青年期以降においても内的作業モデルは変化する可能性が高く、その割合は文化を通して一定であることを示している。

さらに、内的作業モデルが変化するという立場に立っても、まだその変化を導く要因は明らかにされていない。Bretherton (1990) は、コミュニケーションが内的作業モデルの改定を促進すると主張している。そこで、本研究では、コミュニケーションに焦点を当て、内的作業モデルの変化を検証した。3-1 では、恋愛関係において、恋人の応答性の認知の変化によってアタッチメントスタイルが変化することを示した。恋人の応答を応答的であると認知するようになると、個人はアタッチメントスタイルを安定型に変化させた。一方、恋人の応答を拒絶的であると認知するようになると、個人はアタッチメントスタイルを不安定型に変化させた。この結果と同様の結果は、3-3 の夫婦関係においても示された。しかし、3-2 では、大学に入学して最も仲良くなった友人に関するコミュニケーションの応答の認知の変化とアタッチメントスタイルの変化との関連を示さなかった。その一方で、大学に入学して最も仲良くなった友人を今の対人関係の中で最も重要であると報告した個人は、アタッチメントスタイルを変化させていた。同様に、3-1 でも、恋人を最も重要であると認識することとアタッチメントスタイルの変化との関連を示している。このことから、個人の内的作業モデルを変化させよう人は、誰でも良いのではなく、最も重要な他者に限られることを示唆している。しかし、恋愛関係においても、夫婦関係においても愛情とアタッチメントスタイルの変化は関連を示さなかった。愛情は、関係を維持する上で重要な要素であると考えられるが、時間を通じて変化 (多くは減少) する愛情 (菅

原・詫摩, 1997) は重要な他者を示す指標には成りえないと考えられる。

これらを総合して考えると、新しくできた対人関係を今まで築いた対人関係の中で最も重要であると認識し、その他者に対するコミュニケーションの認知が既存の内的作業モデルの認知と合致しなくなった場合に、内的作業モデルを変化させることで、個人内に生じている認知と現実の情報との乖離をなくすことで、その他者との関係を維持し、安定させると考えられる。これは、Bowlby (1979, 1980) が示唆した個人が内在化している内的作業モデルにそぐわない状況が生じたとき、その内的作業モデルを新しいモデルに置き換えて環境に適応するという意見と一致する。さらに、内的作業モデルを変化させることとパートナー自身が行ったと述べた応答との関連が示されないことは、乳幼児期の養育者とのコミュニケーションにおける乳幼児の主観的な認知が重要であるのと同様、内的作業モデルを変化させる際も、パートナーの応答に対する主観的な認知が重要であることを示している。

4-3 本研究の限界と今後の課題

本研究では、いくつかの限界が存在する。第1に、本研究では、アタッチメントスタイルを測定する際に、いくつかの異なる測度を用いた。そのため、アタッチメントスタイルの分布割合が、研究によって異なっていた。Hazan & Shaver (1987) が作成した強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度の日本語版 (戸田, 1988) を用いた2-1の研究では、安定型に分類された個人は 67.2%、回避型に分類された個人は 24.0%、アンビバレント型に分類された個人は 8.8%であった。Relationship Questionnaire (Bartholomew & Horowitz, 1991) の日本語版 (関係尺度; 加藤, 1998/1999) を用いた2-2の研究では、安定型に分類された個人は 21%、回避型に分類された個人は 27% (拒絶型に分類された個人が 2%と恐れ型に分類された個人が 25%)、とらわれ型に分類された個人は 52%であった。ECR (Brennan et al., 1998) を用いて分類された2-3, 3-1, 3-2の研究では、安定型に分類された個人は、各測定時においてそれぞれ最大 36.7%、最小 25.4% (平均 30.8%)、回避型に分類された個人は、最大 42.6%、最小 16.1% (平均 28.9%)、アンビバレント型に分類された個人は、最大 53.6%、最小 15.5% (平均 46.1%) だった。ECR-GO を用いた3-3の研究では、安定型に分類された個人は 56.0%、47.6%、回避型に分類された個人は 28.6%、38.1%、アンビバレント型に分類された個人は 19.0%、15.5%だった。

これらの結果は、尺度によって異なっている。特に、Hazan & Shaver の強制選択式尺度と関係尺度、および、ECR のアタッチメントスタイルの割合は大きく異なっているように見える。尺度間の関係に関して検証を行った研究はあまり存在しておらず（詳細は中尾・加藤, 2003 参照）、それぞれの尺度が内的作業モデルのどの部分を反映してどの部分を反映していないかはまだ明確になっていない。現存する研究として、Brennan, Shaver, & Tobey (1991) は、Hazan & Shaver の強制選択式尺度と関係尺度との間に有意な関連を示している。ただし、この両者は完全に一致するものではなかった。関係尺度で安定型（ポジティブな自己観とポジティブな他者観を有する）と分類された個人の 82% は、Hazan & Shaver の強制選択式尺度で安定型と分類された。関係尺度でとらわれ型（ネガティブな自己観とポジティブな他者観を有する）と分類された個人の 57% は、Hazan & Shaver の強制選択式尺度で同じ概念であるアンビバレント型に分類された。関係尺度で恐れ型（ネガティブな自己観とネガティブな他者観を有する）と分類された個人の 61% は、Hazan & Shaver の強制選択式尺度で同じ概念である回避型に分類された。関係尺度で拒絶型（ポジティブな自己観とネガティブな他者観を有する）と分類された個人の 43% は Hazan & Shaver の強制選択式尺度で回避型を示したが、45% は安定型を示した。このように、Hazan & Shaver の強制選択式尺度で安定型と分類された個人は、関係尺度では、とらわれ型と分類されることが多いことを示している。また、Hazan & Shaver の強制選択式尺度と ECR（本研究では、2 つの回避型である拒絶型と恐れ型を 1 つのタイプとして 3 カテゴリーで分析したが、この研究では 4 カテゴリーモデルを採用している）との関連を検証した Shi, Wampler, & Wampler (2013) では、Hazan & Shaver の強制選択式尺度で安定型と分類された個人の 33% は、ECR でとらわれ型と分類された。これは、先の関係尺度と Hazan & Shaver の強制選択式尺度との関連を検証した Brennan et al. (1991) と同様に、Hazan & Shaver の強制選択式尺度で測定された安定型は、とらわれ型に分類されることが多いことを示している。Shi et al. (2013) は、Hazan & Shaver の強制選択式尺度の安定型は、関係性に関する社会的望ましさが強く関連することを示唆しているとしている。

しかし、Hazan & Shaver の強制選択式尺度において測定されたアタッチメントスタイルと、関係尺度、および、ECR において測定されたアタッチメントスタイルは、完全に異なるものではない。Hazan & Shaver の強制選択式尺度を基に作成された内的作業モデル尺度（戸田, 1988）と関係尺度との関連を検証した中尾・加藤（2003）は、内的作業モデル尺度の安定型得点において、関係尺度の安定型は他の群より高得点を示し、アンビバレン

ト型得点において、関係尺度のとらわれ型は他の群より高得点を、さらに、回避型得点において、関係尺度の拒絶型と恐れ型は安定型とアンビバレント型よりも高得点を示した。また、Shi et al. (2013) は、Hazan & Shaver の強制選択式尺度と ECR の親密性の回避尺度、および、見捨てられ不安尺度との関連を分析した。その結果、親密性の回避尺度得点において、回避型が最も高く、次いでアンビバレント型、最後に安定型であった。同様に、見捨てられ不安尺度得点において、アンビバレント型が最も高く、次いで回避型、最も低かったのが安定型であった。このように、Hazan & Shaver の強制選択式尺度と関係尺度、および、ECR は、同じアタッチメントスタイルを測定していると思われる。Hazan & Shaver の強制選択式尺度から始まったアタッチメントスタイルの測定は、尺度が洗練される過程において、Hazan & Shaver (1987) が示した 3 つのアタッチメントスタイルは、2 次元に集約されることが発見されており（詳細は、Mikulincer & Shaver, 2007 を参照）、これは関係尺度や ECR と同等のものである。また、全てのアタッチメントスタイルを測定する尺度は、Bowlby と Ainsworth の概念から構成されており、基礎となる概念が異なるわけではない。さらに、これまでの先行研究において、同じ概念に対して異なるアタッチメントスタイルを測定する尺度を用いても、概ね同様の結果が生じていること（詳細は、Mikulincer & Shaver, 2007 を参照）から、それぞれの尺度における中心となる部分は同じであると思われる。このような視点に立つと、本研究でも、2-1 と 2-2 の研究のように、異なるアタッチメントスタイル尺度を用いた際に異なる割合のアタッチメントスタイルが示されたが、その結果は、異なるアタッチメントスタイル尺度を用いても同様のものであった。すなわち、本研究で示したことは、あるアタッチメントスタイルを測定する尺度のみで現れる領域ではなく、青年期・成人期のアタッチメント研究において本質的に関わる重要な領域であるということを意味するものであると考えられる。

Collins & Read (1994) は、個人は階層的な内的作業モデルを発達させると主張した。この階層モデルでは、内的作業モデルの最も上層部に一般的な作業モデルがあり、その下には、関係特有の作業モデル（例えば、家族成員や仲間関係、恋愛関係）、さらにその下には特定の関係に関する作業モデルが存在するという。本研究の分布割合の違いも、測定している中心となる部分は共通しているが、階層や関係領域の違いを反映していると考えられる。今後の研究では、どのような研究を行う際にどのような測度を用いるかを考慮に入れながらも、異なるアタッチメントスタイル尺度を用いても類似した結果が出るかを調べることで、関係領域に特有なものではなくアタッチメントの中心的な部分に関連するもので

あるかを検証する必要があると思われる。

第2に、現在、青年期・成人期のアタッチメント研究では、3分類ではなく4分類が主流となっているが、本研究では3分類のアタッチメント分類を用いた。4分類モデルはBartholomew & Horowitz (1991) が Bowlby の主張をもとに“自己のモデル”と“他者のモデル”の2次元をポジティブ-ネガティブで評価する関係尺度から始まっている。関係尺度では、安定型、とらわれ型（アンビバレント型に対応しているもの）に加えて2つの回避型（拒絶型と恐れ型）を産出した。回避型の1つである拒絶型は、AAIの愛着軽視型に対応し、もう1つの回避型である恐れ型は、強制選択式アダルト・アタッチメント尺度の回避型に対応するとされている（Bartholomew & Horowitz, 1991）。本研究では、4分類ではなく、3分類でアタッチメントスタイルを測定した。3分類を用いた理由としては、「マターナルセンシティブィティ」概念（Ainsworth et al., 1978）に沿うものであるが、それ以上に「恐れ型」の出現過程が明確になっていないことが大きい。乳幼児期を通じて内在化された内的作業モデルを反映すると考えられるアタッチメントスタイルの変化に焦点を当てたとき、2つの回避型を産出したことによる利点は筆者も十分に認めながらも、その出現過程の不明確である恐れ型を分類の1つに入れることは、既存の内的作業モデルと対人環境との不一致によって、その内的作業モデルが変化するという3章で行われた研究において不都合が生じる。すなわち、3章で行われた研究において、恐れ型の発生機序である乳児とアタッチメント人物との関係が分からないために、どのような関係の歴史を想定して既存の内的作業モデルを変化させるかという仮説を立てることができなかった。そこで、今後の研究として、いつどのような要因で恐れ型が出現するかを明確にすることで、本研究をさらに拡張できると考える。

第3に、3章（3-1と3-2）では、多様な関係の中から誰が最も重要であるかを選択させただけであり、その人物がアタッチメント人物なのかは調べていない。Hazan & Zeifman (1994) は、4つのアタッチメント機能として、安全の基地、安全の避難所、近接要求、分離抗議を挙げ、この機能を満たす者がアタッチメント人物として成り立つのではないかと示唆している。本研究で選定された重要な他者がアタッチメント人物として機能している他者であるのかまでは検討されていない。今後は、アタッチメント人物を確認したうえで、その人物の応答性認知とアタッチメントスタイルの変化との関連について、詳細な研究が必要であると思われる。

第4に、3章における研究法に関する限界が挙げられる。本研究では、理論、およびそ

これから生成された仮説に基づいて、パートナーの応答性の認知の変化がアタッチメントスタイルの変化に影響を与える可能性について検証してきた。しかし、本研究ではアタッチメントスタイルの変化と恋人や配偶者の応答性の認知の変化との関連が示されたが、どちらが先行するのかを明らかにするまでは至っていない。このため、アタッチメントスタイルが変化したことによって、恋人の認知が変化した可能性も考えられる。この問題をクリアするためには、観察法や日誌法などを用いて、日々のコミュニケーションの変化に焦点を当てた研究が必要であると思われる。

第5に、3章（3-1と3-3）において、対象者数が多く確保出来なかった（それぞれ、恋愛関係や夫婦関係を扱っており、カップルでの参加が必要であったため）。そのため、本研究では、対象者数の関係から、安定型-不安定型の分類という2分類を行っている。実際、応答は拒絶的であるというモデルを内在化しているのは回避型であり、また、一貫性がないというモデルを内在化しているのはアンビバレント型である（Ainsworth, et al., 1978）が、本研究の安定型-不安定型の分類では、不安定型間の詳細な分析を行うに至らなかった。今後は大規模な研究を行うことによって、不安定型間の詳細な分析を行うことが必要だと考えられる。

要約すると、本研究では3つの新たな知見が得られた。第1の知見として、青年期以降の内的作業モデルを用いた対人認知や行動は、パーソナリティのようなものではなく、その対象との間の情報量の少なさを埋めるために用いられた。第2の知見として、内的作業モデルの変化の割合は、欧米と同じように、2度の測定を通じて約30%であった。第3の知見として、内的作業モデルの変化には、個人が最も重要な他者との間のコミュニケーションをどのように認知（認知の変化）しているかということを本研究で示した。これら3つの知見は青年期以降のアタッチメント研究において重要性を持つと考えられる。内的作業モデルの使い方や変化の仕方に関する本研究で得られた知見は、生涯発達の視点でアタッチメント研究を考える際（例えば、各発達段階において重要な他者と関係を持つことの意味）にも、また、臨床心理学的な視点でアタッチメント研究を考える際にも（例えば、セラピスト-患者間のラポートを取ることの重要性）、大変役に立つものであると思われる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Allen, J. P., McElhaney, K. B., Kuperminc, G. P., & Jodl, K. M. (2004). Stability and change in attachment security across adolescence. *Child Development*, **75**, 1792-1805.
- Anders, S. L. & Tucker, J. S. (2000). Adult attachment style, interpersonal communication competence, and social support. *Personal Relationships*, **7**, 379-389.
- 安藤智子・遠藤利彦 (2005). 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント：生涯にわたる絆 (pp.127-173) ミネルヴァ書房.
- Baldwin, M. W., & Fehr, B. (1995). On the instability of attachment style ratings. *Personal Relationships*, **2**, 247-261.
- Bartholomew & Horowitz. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Benoit, D. & Parker, K. C. H. (1994). Stability and transmission of attachment across three generations. *Child Development*, **65**, 1444-1456.
- Bowlby, J. (1940). The influence of early environment in the development of the neurosis and neurotic character. *International Journal of Psychoanalysis*, **21**, 154-178.
- Bowlby, J. (1944). Forty-four juvenile thieves: their characters and home life. *International Journal of Psychoanalysis*, **25**, 19-52.
- Bowlby, J. (1951). Maternal care and maternal health. World health organization: Monograph series NO. 2. Geneva: World Health Organization. [黒田実郎 (訳) (1967) 乳幼児の精神衛生 岩崎出版] .
- Bowlby, J. (1969/1982). Attachment and loss: Vol. 1. Attachment (2nd ed.). New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and loss: Vol. 2. Separation. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1979). The making and breaking of affectional bonds. London, England: Tavistock.

- Bowlby, J. (1980). Attachment and loss: Vol. 3. Loss, sadness and depression. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.). *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- Brennan, K. A., Shaver, P. R., & Tobey, A. E. (1991). Attachment styles, gender and parental problem drinking. *Journal of Social & Personal Relationships*, **8**, 451-466.
- Bretherton, I. (1985). Attachment theory: Retrospect and protect. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.). Growing points of attachment theory research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 3-35.
- Bretherton, I. (1990). Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, **11**, 237-252.
- Collins, N. L. (1996). Working models of attachment: Implications for explanation, emotion, and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71** (4), 810-832.
- Collins, N., & Feeney, B. C. (2000). A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1053-1073.
- Collins, N. L. & Read, S. J. (1990). Adult attachment working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644-663.
- Collins, N. L. & Read, S. J. (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships: Vol. 5. Attachment processes in adulthood* (pp. 53-90). London: Jessica Kingsley.
- Cozzarelli, C., Karafa, J. A., Collins, N. L., & Tarfer, M. J. (2003). Stability and change in adult attachment styles: Associations with personal vulnerabilities, life events, and global construals of self and others. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **22**, 315-346.
- Crowell, J. A., Treboux, D., & Waters, E. (2002). Stability of attachment representations: The transition to marriage. *Developmental Psychology*, **38**, 467-479.

- 大坊郁夫 (2004). 家族のコミュニケーション研究～親密さの表現. *家族心理学年報*, **22**, 2-22.
- Darley, J. M., & Fazio, R. H. (1980). Expectancy confirmation processes arising in the social interaction sequence. *American Psychologist*, **35**, 867-881.
- Davila, J., Burge, D., & Hammen, C. (1997). Why does attachment style change? *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 826-838.
- Davila, J. & Cobb, R. J. (2003). Predicting change in self-reported and interviewer-assessed adult attachment: Tests of the individual difference and life stress models of attachment change. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 859-870.
- Davila, J. & Cobb, R. J. (2004). Predictors of Change in Attachment Security during Adulthood. In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds). *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications* (pp. 86-132). New York: Guilford Press.
- Davila, J., Karney, B. R., & Bradbury, T. N. (1999). Attachment change processes in the early years of marriage. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 783-802.
- Diehl, M., Elnick, A. B., Bourbeau, L. S., & Labouvie-Vief, G. (1998). Adult attachment styles: Their relations to family context and personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74** (6), 1656-1669.
- Egeland, B., & Farber, E. A. (1984). Infant-mother attachment: Factors related to its development and change over time. *Child Development*, **55**, 753-771.
- Egeland, B., & Sroufe, L. A. (1981). Attachment and early maltreatment. *Child Development*, **52**, 44-52.
- 遠藤利彦 (2001). 関係性とパーソナリティの発達の理論 中島義明(編) 現代心理学「理論」事典 (pp.488-524). 朝倉書店.
- 遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する. 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメントと臨床領域 (pp. 1-58). ミネルヴァ書房.
- Feeney, J. A. & Noller, P. (1990). Attachment style as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58** (2), 281-291.
- Florian, V., Mikulincer, M., & Bucholtz, I. (1995). Effects of adult attachment style on the perception and search for social support. *The Journal of Psychology*, **129** (6),

665-676.

- Fraley, R. C. (2002). Attachment stability from infancy to adulthood: Meta-analysis and dynamic modeling of developmental mechanisms. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 123-151.
- Fraley, R. C. & Brumbaugh, C. C. (2004). A dynamical systems approach to conceptualizing and studying stability and change in attachment security. In. W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical Implications* (pp. 86-132). New York: Guilford Press.
- Fraley, R. C. & Shaver, P. A. (1997). Adult attachment and the suppression of unwanted thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73** (5), 1080-1091.
- Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (1998). Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1198-1212.
- Fraley, R. C. Waller, N. G., & Brennan, K. A. (2000). An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78** (2), 350-365.
- Fuller, T. L. & Fincham, F. D. (1995). Attachment style in married couples: Relation to current marital functioning, stability over time, and method of assessment. *Personal Relationships*, **2** (2), 17-43.
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 (1983). 日本版 Love-Liking 尺度の検討. 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, **7**, 265-273.
- 福田安奈 (2013). 初対面場面における女性の対人不安高群の非対人不安高群に対する印象とコミュニケーションの変遷. 人間科学研究, **26** (1), 102-102.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1985. *Adult Attachment Interview protocol (2nd ed.)*. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- Goldberg, S., Grusec, J., & Jenkins, J. (1999). Confidence in protection: arguments for a narrow definition of attachment. *Journal of Family Psychology*, **13**, 475-483.
- Griffin, D. W. & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 430-445.

- Guerreo, L. K. & Burgon, J. K. (1996). Attachment style and reactions to nonverbal involvement change in romantic dyads –patterns of reciprocity and compensation. *Human Communication Research*, **22** (3), 335-370.
- Hamilton, C. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, **71**, 690-694.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hazan, C. & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.). *Advances in personal relationships*: vol. 5. attachment processes in adulthood (pp. 151-177). London: Kingsley.
- 平石賢二 (1990). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (1) –自己肯定性次元と自己安定性次元の検討–. *名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科*, **37**, 217-234.
- Homes, J. (1993). John Bowlby & attachment theory. London: Routledge.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2007). 夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響—自己開示を中心に—. *文京学院大学人間学部研究紀要*, **9** (1), 1-15.
- Iwaniec, D. & Sneddon, H. (2001). Attachment style in adults who failed to thrive as children: Outcomes of a 20-year follow-up study of factors influencing maintenance or change in attachment style. *British Journal of Social Work*, **31**, 179-195.
- Jang, S. A., Smith, S. W., & Levine, T. R. (2002). To stay or to leave? The role of attachment styles in communication patterns and potential termination of romantic relationships following discovery of deception. *Communication Monographs*, **69** (3), 236-252.
- 金政祐司 (2003). 成人のアタッチメント研究の概観と今後の展望—現在, 成人の愛着研究が内包する問題とは—. *対人社会心理学研究*, **3**, 73-82.
- 金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響—成人の愛着的視点から—. *心理学研究*, **76** (4), 359-367.
- 片岡祥・園田直子 (2010). 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ. *久留米大学心理学研究*, **9**, 1-8.
- 桂田恵美子 (2009). 育児期の母親. 平木典子・稲垣佳世子・斉藤こずゑ・高橋恵子・氏家達夫・湯川良三 (編) *児童心理学の進歩* (pp. 28-44). 金子書房.

- 加藤和生 (1998/1999). Bartholomew らの 4 分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成. *認知・体験過程研究*, **7**, 41-50.
- 数井みゆき (2007). 子ども虐待とアタッチメント. 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) *アタッチメントと臨床領域* (pp. 79-101). ミネルヴァ書房.
- Keelan, J. P. R., Dion, K. L., & Dion, K. K. (1994). Attachment style and heterosexual relationships among young adults: A short-term panel study. *Journal of Social and Personal Relationship*, **11**, 201-214.
- Kirkpatrick, L. A., & Davis, K. E., (1994). Attachment style, gender, and relationship stability: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 502-512.
- Kirkpatrick, L. A., & Hazan, C. (1994). Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, **1**, 123-142.
- 北山忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス. *社会心理学研究*, **10** (3), 153-167.
- 北山忍・唐澤真弓 (1995). 自己:文化心理学的視座. *実験社会心理学研究*, **35** (2), 133-163.
- Klohnen, E. C. & Stephan, S. (1998). Behavioral and experiential patterns of avoidantly and securely attached women across adulthood: A 31-year longitudinal perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74** (1), 211-223.
- Kobak, R. (1994). Adult attachment: A personality or relationship construct? *Psychological Inquiry*, **5**, 42-44.
- Krahé B. (1992). *Personality and Social Psychology*. [堀毛一也 (訳) (1996) *社会的状況とパーソナリティ* 北大路書房].
- 久保田まり (1995). *アタッチメントの研究—内的ワーキング・モデルの形成と発達—*. 川島書店.
- 久保田まり (2008). *アタッチメントの形成と発達. ボウルビィのアタッチメント理論を中心に*. 庄司順一・奥山真紀子・久保田まり (編著). *アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって* (pp. 42-64). 明石書店.
- 黒田実郎 (1992). *アタッチメント理論の生成と発展*. *聖和大学論集*, **20**, 1-12.
- Levy, M. B. & Davis, K. E. (1988). Lovestyles and attachment styles compared: Their relations to each other and to various relationship characteristics. *Journal of Community Psychology*, **11**, 3-21.

- Lewis, M., Feiring, C., & Rosenthal, S. (2000). Attachment over time. *Child Development*, **71**, 707-720.
- Lyons-Ruth, K. & Jacobvitz, D. (2008). Attachment disorganization: Genetic factors, parenting contexts, and developmental transformation from infancy to adulthood. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.). *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp. 666-697). New York: Guilford.
- Main, M. (1999). Attachment theory: Eighteen points with suggestions for future studies. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.). *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp.845-889). New York: Guilford.
- Main, M. & Cassidy, J. (1988). Categories of response to reunion with the parent at age 6: Predictable from infant attachment classifications and stable over 1-month period. *Developmental Psychology*, **24**, 1-12.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and Adulthood: A move to the level representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, *50 (1-2, Serial No. 209)*, 66-104.
- Main, M. & Solomon, J. (1990). Procedure for identifying infants as disorganized/disoriented during the Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cumming (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp. 161-182). Chicago: University of Chicago Press.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Mickelson, K. D., Kessler, R. C., & Shaver, P. R. (1997). Adult Attachment in a Nationally Representative Sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73** (5), 1092-1106.
- Mikulincer, M. (1998). Adult attachment style and affect regulation: Strategic variations in self-appraisals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75** (2), 420-435.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. (1993). Attachment style, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the gulf war in Israel.

- Journal of personality and social psychology*, **64** (5), 817-826.
- Mikulincer, M. & Orbach, I. (1995). Attachment styles and repressive defensiveness: The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68** (5), 917-925.
- Mikulincer, M. & Shaver, P. R. (2007). Attachment in adulthood: Structure, dynamics, and change. New York: Guilford Press.
- Miyake, K., Chen, S. J., & Campos, J. J. (1985). Infant temperament, mother's mode of interaction and attachment in Japan; An interim report. In : Bretherton, I. and Warters, E. (Eds.), Growing points in attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 276-297.
- 中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか? —4 カテゴリー (強制選択式, 多項目式) と 3 カテゴリー (多項目式) との対応性—. *九州大学心理学研究*, **4**, 55-65.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004a). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. *心理学研究*, **75**, 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004b). “一般他者” を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. *九州大学心理学研究*, **5**, 19-27.
- 中尾達馬・加藤和生 (2005). 成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性. *九州大学心理学研究*, **6**, 9-20.
- Niedenthal, P. A., Brauer, M., Robin, L., & Innes-Ker, A. H. (2002). Adult attachment and the perception of facial expression of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 419-433.
- Ognibene, T. C. & Collins, N. L. (1998). Adult attachment style, perceived social support and coping strategies. *Journal of Social and Personal Relationships*, **15** (3), 323-345.
- 岡島泰三 (2006). 恋人の反応性認知尺度の作成. *臨床教育心理学研究*, **32**, 9-15.
- 岡本祐子 (1986). 成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析. *教育心理学研究*, **34**, 352-358.
- 岡本祐子 (1992). 成人発達研究の動向と展望. *広島大学教育学部紀要*, **41**, 207-216.
- 小野寺敦子 (2005). 親になることにともなう夫婦関係の変化. *発達心理学研究*, **16**, 15-25.

- Pietromonaco, P. R. & Barrett, L. F. (2000). The internal working models concept: What do we really know about the self in relation to others? *Review of General Psychology*, **4** (2), 155-175.
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- 佐々木くみ子 (2006). 親の人格発達に影響を及ぼす諸要因－妊娠期から乳児期にかけて. *母性衛生*, **46**, 580-587.
- Scharfe, E. (2003). Stability and change of attachment representations from cradle to grave. In S. M. Johnson & V. E. Whiffen (Eds.), *Attachment processes in couple and family therapy* (pp. 64-84). New York: Guilford Press.
- Scharfe, E. & Bartholomew, K. (1994). Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, **1**, 23-43.
- Senchak, M. & Leonard, K. E. (1992). Attachment styles and marital adjustment among newlywed couples. *Journal of Social and Personal Relationships*, **9**, 51-64.
- Shaver, P. R., & Brennan, K. A. (1992). Attachment styles and the 'Big Five' personality traits: Their connections with each other and with romantic relationship outcomes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 536-545.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2004). What do self-report attachment measures assess? In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications* (pp. 17-54). New York: The Guilford Press.
- Shi, L., Wampler, R., & Wampler, K. (2013). A comparison of self-report adult attachment measures: How do they converge and diverge? *Universal Journal of Psychology*, **1**(1), 10-19.
- 島義弘・福井義一・金政祐司・野村理朗・武儀山珠実・鈴木直人 (2012). 内的作業モデルが表情刺激の情動認知に与える影響. *心理学研究*, **83** (2), 75-81.
- Simpson, J. A. (1990). The influence of attachment styles on romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 971-980.
- Simpson, J. A., Ickes, W., & Grich, J. (1999). When accuracy hurts: Reactions of anxious-ambivalent dating partners to a relationship-threatening Situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76** (5), 754-769.

- Simpson, J. A., Rholes, W. S., Campbell, L., & Wilson, C. L. (2003). Changes in attachment orientations across the transition to parenthood. *Journal of Experimental Social Psychology*, **39**, 317-331.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. (1992). Support-seeking and support-giving within couple members in an anxiety-provoking situation: The role of attachment style. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 434-446.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価: 自記入式夫婦関係尺度について. *精神科診断学*, **8**, 155-166.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として—. *教育心理学研究*, **50**, 129-140.
- Steven, W. R. &
- Swan, W. B. (1987). Identity negotiation: Where two roads meet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1038-1051.
- 高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究, *教育心理学研究*, **47**, 317-327.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度——成人版愛着スタイル尺度作成の試み—— *東京都立大学人文学報*, **196**, 1-16.
- 谷口淳一 (2004). 大学新入生の友人関係と孤独感の変化との関連 (1), *日本教育心理学会総会発表論文集* (46), 173.
- 谷村圭介・渡辺弥生 (2008). 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係. *教育心理学研究*, **56**, 364-375.
- Tidwell, M. O., Reis, H. T., & Shaver, P. R. (1996). Attachment, attractiveness, and social interaction: A diary study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 729-745.
- 戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル——作業仮説 (working models) からの検討——, *日本心理学会第 52 回大会発表論文集*, 27.
- 戸田弘二 (1990). 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連. *北海道教育大学紀要*, **41** (1), 91-99.
- Trinkle, S. J. & Bartholomew, K. (1997). Hierarchies of attachment relationships in

- young adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, **14**, 603-625.
- Tucker, J. S. & Anders, S. L. (1998). Attachment style, interpersonal perception accuracy, and relationship satisfaction in dating couples. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 403-412.
- 山岸明子 (2003). 女子看護短大生における内的作業モデルの連続性とその変動に関連する要因－横断的データに基づいて－. *順天医療短期大学紀要*, **14**, 121-130.
- 山岸明子 (2005). 青年後期と成人期初期に記述された生育史と対人的枠組みの変化との関連－7年間の縦断研究－. *青年心理学研究*, **17**, 15-26.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討. *実験社会心理学研究*, **34** (2), 105-115.
- 若尾良徳 (2004). 青年期のアタッチメントスタイルと不安喚起場面における行動との関連. *パーソナリティ研究*, **12**, 47-58.
- Waters, E., Merrick, S. K., Treboux, D., Crowell, J. A., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, **71**, 684-689.
- Waters, E., Weinfield, N. S., & Hamilton, C. E. (2000). The Stability of Attachment Security from Infancy to Adolescence and Early Adulthood: General Discussion. *Child Development*, **71** (3), 703-706.
- Weinfeld, N. S., Sroufe, L. A., & Egeland, B. (2000). Attachment from infancy to early adulthood in a high-risk sample: Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*, **71**, 695-702.
- Zeifman, D., & Hazan, C. (2000). A process model of adult attachment formation. In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The social psychology of personal relationships* (pp.37-54). England: John Wiley & Sons.
- Zhang, F. & Labouvie-Vief, G. (2004). Stability and fluctuation in adult attachment style over a 6-year period. *Attachment and Human Development*, **6**, 419-437.

注釈

1 章

*¹ Bowlby (1969/1982) 自身が、初版では“アタッチメント”と“アタッチメント行動”の違いを明確にしていないこと述べている (p.371).

*² Bowlby (1969/1982, 1973, 1980) の著書の中で、“アタッチメント行動”と比較して、“アタッチメントを持つ (have an attachment to)”や“アタッチメントを示す (attached to)”という用語をよく用いている。さらに、Bowlby (1969/1982) は、第2版の中で、“アタッチメント行動”を現れたり消失したりするものであり、“アタッチメント”は特定の他者に対して比較的持続して示されるものであると述べている。これらのことから、“アタッチメント”という概念を行動レベルのみで考える狭義な定義とは考えにくい。

*³ 1－3で書かれている内的作業モデルの安定性に関するレビューは、“岡島泰三 (2008). 内的作業モデルの変化に関する研究の展望と今後の課題. 臨床教育心理学研究, 34, 33-40.”を修正したものである。

*⁴ “安定性 (Stability)”という用語は、同じ測度を反復して測定された場合に用いられることが多い。また、“連続性 (Continuity)”という用語は、個人を縦断的に追う際に、異なる年齢群に適用される2つの測度の一致率を指す場合に用いられることが多い。

*⁵ Hamilton (2000) は、ネガティブなライフイベントとアタッチメントタイプの変化との関連は示さなかったが、ネガティブなライフイベントと不安定型が継続することとの関連は示している。

2 章

*⁶ 2－1の研究は、2010年度卒業の藤原弘之氏との共同研究であり、本博士論文に先立ち卒業論文として藤原氏が提出している。

*⁷ 2－2の研究は、2011年度卒業の阪本夏菜氏との共同研究であり、本博士論文に先立ち卒業論文として阪本氏が提出している。

*⁸ 本研究では、関係尺度のアタッチメント分類の信頼性を検証するために、自己観得点と他者観得点がそれぞれのアタッチメントスタイルによって異なるかを調べた。自己観得点に関して、自己観がポジティブなアタッチメントスタイル (安定型と拒絶型) とネガティブなアタッチメントスタイル (とらわれ型と恐れ型) との間に違いが生じるかを対応のない t 検定を用いて調べた。その結果、自己観がポジティブなアタッチメントスタイル (安

定型と拒絶型)はネガティブなアタッチメントスタイル(とらわれ型と恐れ型)より有意に自己観得点が高かった, $t(50) = 4.73, p < .01$. 他者観得点に関して, 他者観がポジティブなアタッチメントスタイル(安定型ととらわれ型)とネガティブなアタッチメントスタイル(拒絶型と恐れ型)との間に違いが生じるかを対応のない t 検定を用いて調べた. その結果, 他者観がポジティブなアタッチメントスタイル(安定型ととらわれ型)はネガティブなアタッチメントスタイル(拒絶型と恐れ型)より有意に他者観得点が高かった, $t(50) = 6.32, p < .01$. これらの結果から, 関係尺度で強制的に分類されたアタッチメントスタイルは, 信頼性があることが示された.

*⁹ 2-3 で書かれている交際期間による内的作業モデルの機能は, “岡島泰三・桂田恵美子 (2012). 青年期におけるアタッチメントスタイルと対人認知: 交際期間の違う恋人の応答性の認知. 人文論究, **62** (3), 55-67.” を修正したものである.

*¹⁰ 恋人の反応性尺度の作成に関しては, “岡島泰三 (2006). 恋人の反応性認知尺度の作成. 臨床教育心理学研究, **32**, 9-15.” を修正したものである.

*¹¹ 各アタッチメントスタイルの信頼性を検証するために, アタッチメントスタイルを独立変数, 親密性回避尺度得点, おやび, 見捨てられ不安尺度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行った. その結果, 親密性回避尺度得点において, アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された, $F(2, 155) = 200.43, p < .001$. Tukey の HSD を用いた多重比較の結果, 回避型 ($M = 68.6, SD = 6.93$) は, 安定型 ($M = 38.5, SD = 8.84$) とアンビバレント型 ($M = 39.8, SD = 6.89$) より有意に親密性回避尺度得点が高かった. また, 見捨てられ不安尺度得点においても, アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された, $F(2, 155) = 95.59, p < .001$. Tukey の HSD を用いた多重比較の結果, アンビバレント型 ($M = 83.4, SD = 12.44$), 回避型 ($M = 68.7, SD = 16.70$), 安定型 ($M = 51.4, SD = 10.25$) の順に有意に見捨てられ不安尺度得点が高かった.

3 章

*¹² 3-1 で書かれている恋人との関係におけるアタッチメントスタイルの変化は, “岡島泰三 (2010). 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性. 青年心理学研究, **22**, 33-44. (査読あり)” を修正したものである.

*¹³ 山岸 (2005) は, 大学時代にアタッチメントスタイルと生育史を測定し, その 7 年後に再度アタッチメントスタイルを測定した. しかし, アタッチメントスタイルの変化と生育

史との関連は示さなかった。

*14 各アタッチメントスタイルの信頼性を検証するために、アタッチメントスタイルを独立変数、親密性回避尺度得点、おやび、見捨てられ不安尺度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、親密性回避尺度得点において、アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された、 $F(2, 109) = 72.23, p < .001$ 。Tukey の HSD を用いた多重比較の結果、回避型 ($M = 67.0, SD = 8.88$) は、安定型 ($M = 39.1, SD = 9.96$) とアンビバレント型 ($M = 40.0, SD = 8.52$) より有意に親密性回避尺度得点が高かった。また、見捨てられ不安尺度得点においても、アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された、 $F(2, 109) = 64.53, p < .001$ 。Tukey の HSD を用いた多重比較の結果、アンビバレント型 ($M = 80.3, SD = 11.33$)、回避型 ($M = 67.1, SD = 14.53$)、安定型 ($M = 51.1, SD = 11.52$) の順に有意に見捨てられ不安尺度得点が高かった。

*15 クラスター分析は得点化された距離の近いもの（似たような得点分布を示すもの）同士を同じ分類にする方法である。このため、2 度の測定で得られたデータを 1 度のクラスター分析を用いて行った際、違うアタッチメントスタイルに分類された人は、小さな変化ではなく大きな変化であると考えられる。すなわち、状況に応じた一時的な小さな“変化”であるならば、その 2 つのデータの距離は近い（得点分布は似通ったもの）と考えられるため、2 つの時点で測定された分類は同じものになるだろう。しかし、“改訂”と言えるほど大きな変化であるならば、その 2 つのデータの距離は遠い（得点分布は似通っていない）と考えられるため、2 度の測定で得られたデータは違う分類として現れるのではないかと思われる。

*16 想定した友人との関係の良好さにおいて、5 月に 1 名、6 月に 1 名が友人との関係が良好ではないと回答した。この 2 名はいずれにおいても、重要な他者を想定された友人としておらず、また、アタッチメントスタイルを変化させていなかった。この 2 名に関して、友人の応答性の認知とアタッチメントとスタイルの変化に関する分析は除外した。

*17 各アタッチメントスタイルの信頼性を検証するために、アタッチメントスタイルを独立変数、親密性回避尺度得点、おやび、見捨てられ不安尺度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、親密性回避尺度得点において、アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された、 $F(2, 556) = 391.92, p < .001$ 。Tukey の HSD を用いた多重比較の結果、回避型 ($M = 79.4, SD = 10.60$) は、安定型 ($M = 49.4, SD = 12.79$) とアンビバレント型 ($M = 51.8, SD = 13.26$) より有意に親密性回避尺度得点が高かった。また、見捨て

てられ不安尺度得点においても、アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された、 $F(2, 556) = 307.96, p < .001$. Tukey の HSD を用いた多重比較の結果、アンビバレント型 ($M = 88.7, SD = 11.32$)、回避型 ($M = 68.4, SD = 13.93$)、安定型 ($M = 54.6, SD = 11.00$) の順に有意に見捨てられ不安尺度得点が高かった。

*¹⁸ 友人選択群は、想定した友人を含み複数の重要な他者を選んだ対象者も含んでいる。想定した友人を含み複数の重要な他者を選んだ対象者を友人以外選択群として分析したところ、Time 2-Time 3 間のアタッチメントスタイルの変化と想定した友人を重要な他者と選択したかどうかということとの間に関連を示す傾向が示された、 $\chi^2(1) = 2.77, p < .10$. それ以外の分析においては、本文と同様に有意な結果を示すことができなかった。

*¹⁹ Tidwell et al. (1996) は、大学生を対象に Hazan & Shaver (1987) の強制選式アダルト・アタッチメント尺度を 3 度にわたり測定した (2 度目の測定は 1 度目の測定の 4-6 週間後に行われ、その 1 週間後に 3 回目の測定が行われてた)。

*²⁰ 各アタッチメントスタイルの信頼性を検証するために、アタッチメントスタイルを独立変数、親密性回避尺度得点、おやび、見捨てられ不安尺度得点を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、親密性回避尺度得点において、アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された、 $F(2, 271) = 275.34, p < .001$. Tukey の HSD を用いた多重比較の結果、回避型 ($M = 83.0, SD = 8.26$) は、安定型 ($M = 53.1, SD = 9.91$) とアンビバレント型 ($M = 55.2, SD = 12.25$) より有意に親密性回避尺度得点が高かった。また、見捨てられ不安尺度得点においても、アタッチメントスタイルの有意な主効果が示された、 $F(2, 271) = 92.80, p < .001$. Tukey の HSD を用いた多重比較の結果、アンビバレント型 ($M = 80.8, SD = 10.74$)、回避型 ($M = 60.3, SD = 18.35$)、安定型 ($M = 47.5, SD = 11.84$) の順に有意に見捨てられ不安尺度得点が高かった。

公表論文

岡島泰三 (2006). 恋人の反応性認知尺度の作成. *臨床教育心理学研究*, **32**, 9-15.

岡島泰三 (2008). 内的作業モデルの変化に関する研究の展望と今後の課題. *臨床教育心理学研究*, **34**, 33-40.

岡島泰三 (2010). 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性. *青年心理学研究*, **22**, 33-44. (査読あり)

鳥居 瑤子・岡島泰三・桂田恵美子 (2011). 大学生の一人でいられる能力と愛着スタイルとの関連－「一人行動に対する不安耐性」尺度の作成－. *臨床教育心理学研究*, **37**, 33-39.

岡島泰三 (2011). 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性－高坂氏・松岡氏のコメントに対するリプライー. *青年心理学研究*, **23** (2), 221-225. (査読あり)

村木祐実子・岡島泰三・桂田恵美子 (2012). 青年期の愛着スタイルと自立との関連. *臨床教育心理学研究*, **38**, 33-38.

岡島泰三・桂田恵美子 (2012). 青年期におけるアタッチメントスタイルと対人認知：交際期間の違う恋人の応答性の認知. *人文論究*, **62** (3), 55-67.

上條真美・岡島泰三・桂田恵美子 (2013). 青年期の愛着スタイルと情動生起の関連性について. *関西学院大学心理科学研究*, **39**, 31-36.

謝辞

本博士論文が完成に至りましたのは、たくさんの方々からご指導とご支援をいただいたおかげです。ここで感謝の言葉を述べさせていただきます。

まず、論文作成に当たり、出来の悪い私に対して、長期間にわたり辛抱強く細やかなご指導とご助言をいただきました、関西学院大桂田恵美子先生には、どれだけ言葉を並べても感謝の言葉が付きません。そして、ゼミ検討を通じて適切なご示唆とご助言をくださいました院生・研究員の皆様、心より感謝いたします。

さらに、調査にあたり、関西学院大学応用心理科学研究センター 客員研究員鈴木まや先生と関西学院大学理工学研究科風井浩志先生には調査にご協力していただき、本当にありがとうございました。同じく、調査の場を提供してくださり、さらには、限られた貴重な時間を割いていただいた四条畷保健センターの皆様に感謝の意を述べさせていただきます。

そして、学会等においてご助言いただいた先生方にも感謝を述べさせていただきます。本調査に参加していただいた学生、ご夫婦の皆様、本当にありがとうございました。最後になりましたが、これまで私を支えてくれた家族と、私が苦しいときにもそばに居続けてくれた妻昭子、いつも笑顔を投げかけ精神的に支えてくれた息子の楽にも感謝したいと思っています。

皆様、本当にありがとうございました。

付録 I 日本語版強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度 (戸田, 1988)

あなたの感情を最もよく表しているのはどれですか？当てはまるものに○をつけてください。

1. 私は比較的容易に他人と親しくなることができるし、またその人たちと気楽に頼ったり頼られたりすることができる。見捨てられることや、逆に、あまりにも親しくしてくる人について、心配することはほとんどない。
2. 他人と親しくなることは、私にとっていくぶん重荷である。私は他人を心から信頼することはできないし、他人に頼ることもできない。誰かがあまりにも近づいてきたり、たびたび恋人が、私が快いと感じる以上に親密になることを求めたりすると、イライラしてしまう。
3. 他人はいやいやながら私と親しくしてくれていると思う。しばしば、恋人が私を本当に愛していないのではないかと、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある。私は他の人と完全に一体になりたいと思うが、この願望が時に人々を私から遠ざけてしまう。

付録Ⅱ 対初対面の人関係尺度：対人関係性尺度（高井，1999）の質問項目の
“人”を“初対面の人”と変更して用いた。

初対面の人に対してあなたが行う行動がどれくらい当てはまるかを以下の 1～5 に○をつけてください。

（評定尺度：全く当てはまらない 1—2—3—4—5—6—7 非常によく当てはまる）。

1. 私は初対面の人との関係がこわれてしまうことが
こわいので、ありのままの自分を出せない．．．．． 1・2・3・4・5
2. 私は初対面の人を表面的に判断してしまいやすい．．．．． 1・2・3・4・5
3. 私は初対面の人のことでも、自分のことのように
感じることが多い．．．．． 1・2・3・4・5
4. 私は初対面の人とのつき合いに臆病なほうである．．．．． 1・2・3・4・5
5. 私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする．．．．． 1・2・3・4・5
6. 私は初対面の人からどう思われようとありのままの
自分を生きている．．．．． 1・2・3・4・5
7. 私は初対面の人に対して好意的になれない．．．．． 1・2・3・4・5
8. 私はいつも初対面の人を理解しようと心がけている．．．．． 1・2・3・4・5
9. 私は少しぐらい傷つくことがあっても、自分のありのままの
姿で初対面の人と接している．．．．． 1・2・3・4・5
10. 私は初対面の人を信用しない．．．．． 1・2・3・4・5
11. 私は初対面の人より劣っているか、すぐれているかを気にする．．． 1・2・3・4・5
12. 私は初対面の人のおちを気持ちよく許せるほうである．．．．． 1・2・3・4・5
13. 私は初対面の人に対して心を閉ざしているような気がする．．．． 1・2・3・4・5
14. 私は初対面の人に批判されると非常に傷つくので、初対面の
人の前で自分の意見を言うことを避けようとしてしまう．．．．． 1・2・3・4・5
15. 私は初対面の人の良いところも悪いところも、ありのままに
受け入れられる．．．．． 1・2・3・4・5

16. 私は初対面の人がどうしてそうしたのかを知ることに関心がある. . . 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
17. 私は初対面の人に自分がどう思われているかということが
とても気になる. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
18. 私は初対面の人の言うことに耳を傾けるよりも、自己主張を
優先してしまう. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
19. 私は自分の弱さや欠点を余り隠そうとしない. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
20. 私は自分と合わない初対面の人でも、その初対面の人の
優れている点を認めることができる. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
21. 傷つきたくないの、初対面の人にはありのままの
自分を出せない. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
22. 私は初対面の人を理解しようとするよりも、自分のことを
わかってほしいという気持ちの方が強い. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
23. 私は自分に対する初対面の人の評価は余り気にしない. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
24. 私はちょっとしたことで、初対面の人に世話をしあける
ことが楽しい. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
25. 私は初対面の人に対して、自分のイメージを悪くしていないかと
恐れている. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
26. 私は初対面の人の良いところ、すぐれているところを進んでほめる. . . 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
27. 私は初対面の人とは少しぐらい傷ついても本音で言い合っている. . . 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5
28. 私は何かにつけ、すぐに比較してしまう. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5

付録Ⅲ 日本語版 Relationship Questionnaire (加藤, 1998/1999)

ここでは、あなたの『人に対する考え方』についてお尋ねします。以下の文章をよく読んで、それぞれ最も当てはまると思う番号に○をつけてください。

<タイプ1>

私にとって、人といつも心が通じ合う関係を持つことは、簡単である。私は人に頼ったり頼られたりすることに抵抗がない。私は一人ぼっちになってしまうとか、人があるのままの私を受け入れてくれてないのではないかとということを心配しない。

まったくあてはまらない 7 6 5 4 3 2 1 非常に当てはまる

<タイプ2>

私は人といつも心が通じ合う関係がなくても平気だ。私にとって大切なのは、人に頼っていないと感じること、自分で何でもできていると感じることだ。私は人に頼ったり頼られたりすることが好きではない。

まったくあてはまらない 7 6 5 4 3 2 1 非常に当てはまる

<タイプ3>

私は人と完全に気持ちに通じ合うようになりたい。しかし、人は私が望むほど私と親しくなりたと思っていないと思う。私は親密な関係を持ちたいのだが、私が人のことを大切に思うほど人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる。

まったくあてはまらない 7 6 5 4 3 2 1 非常に当てはまる

<タイプ4>

私は人と親しくなることに抵抗を感じている。私は人と心が通じ合う関係を持ちたいのだが、人を信じきることはできない。また人に頼ることが苦手である。人とあまりにも親しくなりすぎると傷ついてしまうのではないかと思う。

まったくあてはまらない 7 6 5 4 3 2 1 非常に当てはまる

次に，上の4つのタイプ（タイプ1～タイプ4）の中で自分に**最も当てはまるタイプ**を1つ選んでください。

該当するタイプ 1つに○印を ==> タイプ1 タイプ2 タイプ3 タイプ4

付録Ⅳ 初対面の人に対する行動に関するコーディング項目

① 閉鎖性・防衛性

a. 相手にここを閉ざすか。 ※逆転項目

5. 自分から話しかける。会話が終わっても、また自分から話しかける。
4. 自分から話しかける。会話が終わったら、もう話しかけない。
3. 話しかけられたら、答える。その後、自分から話しかける。
2. 話しかけられたら、答える。その後、自分からは話しかけない。
1. 話しかけられても、頷くだけとか、ほとんど反応なし。

b. 好意的であるか。 ※逆転項目

5. 自分から相手に笑顔を向ける。
4. 話しかけられたら、笑顔を向ける（毎回）。
3. 話しかけられたら、笑顔を向ける（毎回ではない）。
2. 相手のほうを見るけど、ほとんど笑顔なし。
1. 相手のほうを見ず、笑顔もなし。

c. 自分の意見を言うか。 ※逆転項目

5. 自分から意見を言う（そのときの感情、実験について、…）。
4. 聞かれたら言う、その後は聞かれなくても自分から言う。
3. 聞かれたら言う、聞かれたことに関して補足したりする。
2. 聞かれたら言う、補足などはなし。
1. 自分の意見を言わない。

d. 腕を組んでいるか。

5. ずっと腕を組んでいる。
4. 話しかけられたら腕をほどく、その後また腕を組む。
3. 話しかけられたら腕をほどく、そのまま腕を組まない。
2. 腕を組んだり、組まなかったり（話しかけは関係なしに）。
1. 腕を組まない。

e. 座っているときの身体の向き。

5. 相手と逆方向に身体を向ける。
4. 相手と逆方向に身体を向ける、話しかけられて正面を向く。

3. 正面を向く.
2. 正面を向いていたが、話しかけられて相手に向ける (身体全体を).
1. 相手のほうに身体を向ける.

② ありのままの自己

a. 自分のことについて言うか.

- ・「これから実験ですよ？」に対する答え.
- 5. 質問に答えて、自分のことについて話す (初めて実験を受けるんです, …).
- 4. 質問に答えて、相手の実験の内容について聞く.
- 3. 「はい」などの言葉だけで、その後自分から話すことはない.
- 2. 頷くなどの行動のみ.
- 1. 言葉も行動もなし.

b. 自分のことについて言うか.

- ・「緊張していますか？」に対する答え.
- 5. 質問に対する答えを具体的な理由とともに話す (電流が怖いんです, …).
- 4. 質問に答えて、相手に質問を返す (緊張しましたか, …).
- 3. 「はい」や「いいえ」などの言葉だけで、その後自分から話すことはない.
- 2. 頷くなどの行動のみ.
- 1. 言葉も行動もなし.

c. 表情や話し方.

5. 相手のほうを見てよく話す、笑顔も多い、話してないときでも相手のほうを見る.
4. 話すときだけ相手のほうを見る、相手を見ていないときでも笑顔あり.
3. 話すときだけ相手のほうを見る、相手を見ているときは笑顔あり.
2. 話すときにほとんど相手のほうを見ない、笑顔なし.
1. ほとんど話さない、相手のほうも見ない、笑顔もなし.

③ 他者受容

a. 相手の言葉に同意するか.

5. 言葉と行動（頷き）で同意する，さらにその理由など言葉を付け加える.
 4. 言葉と行動で同意する（毎回）.
 3. 言葉と行動で同意するときと，言葉のみ・行動のみの時がある.
 2. 言葉のみか，行動のみ.
 1. 同意しない，行動もなし.
- b. 相手の質問に答えて，そこから展開させるか.
5. 質問に答えて，自分からも質問を返す．一度沈黙になってもずっと質問をする.
 4. 質問に答えて，自分からも質問を返す．一度沈黙になっても何度かは質問する.
 3. 質問に答えて，自分からも質問を返す．一度沈黙になるともう質問をしない.
 2. 質問に答えるが，自分から質問は返さない.
 1. 質問に答えるが，言葉はなく，頷きなどの行動のみ.

④ 自己優先

- a. 話の内容.
5. 自分のことばかり話す，相手のことは聞かない.
 4. 自分のことについて話す方が多い.
 3. 自分のことについて話すのと，相手のことを聞くのと半々ぐらい.
 2. 自分のことについてあまり話さない．相手のことをよく聞く.
 1. 自分のことについては全く話さない

付録V 日本版 the Experienced in Close Relationship (中尾・加藤, 2004)

以下には、いろいろな人が恋愛関係の中でどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが恋愛関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。現在の恋愛関係での経験だけでなく、いろいろな恋愛関係の中であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について下の7件尺度を用いて評定してください。回答は、それぞれの文の右にある評定尺度上のもっとも当てはまる番号に○印をつけてください。

下線は真ん中です (評定尺度:全く当てはまらない 1—2—3—4—5—6—7 非常によく当てはまる)。

- | | |
|---|---------------|
| 01. 心の奥底で何を感じているかを恋人に見せるのはどちらかというと好きではない。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 02. 私は見捨てられるのではないかと心配だ。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 03. 私は恋人と親密になることがとても快い。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 04. 私はいろいろな人との関係について、非常に心配している。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 05. 恋人が私と親密になろうとするやいなや、私は自分から恋人との | |
| 距離を取ろうとしている自分に気付く。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 06. 私が恋人のことを大切に思うほどには、恋人は私のことを大切に | |
| 思っていないのではないかと心配する。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 07. 私は、恋人が非常に親密になりたがってくると、いごこち悪く感じる。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 08. 私は、恋人を失うのではないかとけっこう心配している。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 09. 私は恋人に心を開くのに抵抗を感じる。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 10. 私はいつも、恋人が自分に対していていてくれる気持ちが、 | |
| 私が恋人に対して抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 11. 私は恋人と親密になりたいのだが、いつの間にかついつい後ずさりしている | |
| ことが多い。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 12. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるために、ときどき | |
| 恋人はうんざりして私から離れていってしまう。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 13. 私は恋人があまりに自分と親密になってくると、とてもイライラしてしまう。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 14. 私はひとりぼっちになってしまうのではないかと心配する。 | 1—2—3—4—5—6—7 |

15. 私は、あまり人に話さないような自分の考えや気持ちを恋人に話すことに抵抗がない。 1—2—3—4—5—6—7
16. 私が恋人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき恋人はうんざりして私から離れていってしまう。 1—2—3—4—5—6—7
17. 私は恋人とあまり親密にならないようにしている。 1—2—3—4—5—6—7
18. 私には、恋人が私を愛してくれているということを何度も何度も言うてくれることが必要だ。 1—2—3—4—5—6—7
19. 私は比較的容易に恋人と親密になれると思う。 1—2—3—4—5—6—7
20. 私は、恋人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる 때가ときどきある。 1—2—3—4—5—6—7
21. 私は自分が恋人に依存することゆるすことがなかなかできないと思う。 1—2—3—4—5—6—7
22. 私は、（恋人に）見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。 1—2—3—4—5—6—7
23. 私は恋人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない。 1—2—3—4—5—6—7
24. 私は恋人に自分のことを好きになってもらうことができなかったら、私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。 1—2—3—4—5—6—7
25. 私は恋人に何でも話す。 1—2—3—4—5—6—7
26. 私は恋人が私が親密になりたいと望むほどには私と親密になりたいと思っていないと思う。 1—2—3—4—5—6—7
27. 私はたいてい、自分の問題や心配事を恋人と話し合う。 1—2—3—4—5—6—7
28. 私は誰かとつき合っていないと、なんとなく不安で不安定な気持ちになる。 1—2—3—4—5—6—7
29. 私は恋人に頼ることに抵抗がない。 1—2—3—4—5—6—7
30. 私は、私がいって欲しいと望むほどに恋人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう。 1—2—3—4—5—6—7
31. 私は、恋人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。 1—2—3—4—5—6—7
32. 私は、必要な時にいつでも恋人が私のためにいてくれないとイライラする。 1—2—3—4—5—6—7
33. 困った時恋人に助けを求めると、何かちょっとは（状況が）よくなる。 1—2—3—4—5—6—7
34. 恋人にダメだなあといわれると、自分は本当にダメだなあと感じる。 1—2—3—4—5—6—7
35. 私は恋人になぐさめや元気づけたりすることをふくめ、いろんなことで助けを求める。 1—2—3—4—5—6—7
36. 私は、恋人が私のことをほっといて一人で何かをすることが重なるにつれて腹が立ってきてしまう。 1—2—3—4—5—6—7

付録VI 恋人の反応性認知尺度 (岡島, 2006)

各項目で、a.恋人が行っている行動について、b.その行動がどのくらい頻繁に起こるかについてお答えください。

① 恋人は私が話しているときに…

目を見る 1-2-3-4-5-6-7 目を見ない

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

② 恋人は私からのメールを…

返す 1-2-3-4-5-6-7 返さない

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

③ 恋人は私が手をつなごうとすると…

つながない 1-2-3-4-5-6-7 つなぐ

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

④ 恋人は私の話を…

聞いていない 1-2-3-4-5-6-7 聞いている

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑤ 恋人は私に微笑みかけられると…

無表情である 1-2-3-4-5-6-7 微笑み返す

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑥ 恋人は私からの電話に…

出ない 1-2-3-4-5-6-7 必ず出る

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑦ 恋人は私から会おうと誘われると…

会う 1-2-3-4-5-6-7 会わない

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑧ 恋人は私の話…

返事をしない 1-2-3-4-5-6-7 返事する

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑨ 恋人は私との電話を…

すぐきる 1-2-3-4-5-6-7 ずっと話す

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

付録Ⅶ love 尺度 (藤原・黒川・秋月, 1983)

次のそれぞれの質問文を読み、右側にある 1～9 の回答肢の中から、恋人××さんに対するあなたの気持ちに一番近いものを 1 つ選んで○印をつけて下さい。

9. 非常にそう思う
8. そう思う
7. ややそう思う
6. どちらかといえばそう思う
5. どちらでもない
4. どちらかといえばそう思わない
3. あまりそう思わない
2. そう思わない
1. まったくそう思わない

- | | |
|---|-------------------|
| 1. もし××さんが元気がなさそうだったら、
私は真っ先に励ましてあげたい。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 2. すべての事柄について、私は××さんを
信頼できるという気がする。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 3. ××さんに欠点があってもそれを気にしないでいられる。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 4. ××さんのためなら、ほとんど何でもしてあげるつもりだ。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 5. ××さんを独り占めしたいと思う。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 6. ××さんと一緒にいられなければ、私は
ひどく寂しくなる。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 7. 私は一人でいると、いつも××さんに会
いたいと思う。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 8. ××さんが幸せになるのが私の最大の関心である。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 9. ××さんの事ならどんなことでも許せる。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 10. 私は××さんを幸せにすることに責任を感じている。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 11. ××さんと一緒にいると、相手の顔を見つめることが多い。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 12. ××さんから信頼されると、とてもうれしく思う。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |
| 13. ××さんなしに過ごすことは、つらいことだ。 | 1－2－3－4－5－6－7－8－9 |

付録Ⅷ 自分の応答性尺度

各項目で、a.あなたが行っている行動について、b.その行動がどのくらい頻繁に起こるかについてお答えください。(これらの項目は、あなたの意図を評価するものではありません。先行研究からも、これらの項目は、仕事などのあなたの現在の状態によってさまざまに変化することが示されていますので、安心してお答えください)

① 私は恋人が話しているときに…

目を見る 1-2-3-4-5-6-7 目を見ない

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

② 私は恋人からのメールを…

返す 1-2-3-4-5-6-7 返さない

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

③ 私は恋人が手をつなごうとすると…

つながない 1-2-3-4-5-6-7 つなぐ

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

④ 私は恋人の話を…

聞いていない 1-2-3-4-5-6-7 聞いている

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑤ 私は恋人に微笑みかけられると…

無表情である 1-2-3-4-5-6-7 微笑み返す

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑥ 私は恋人からの電話に…

出ない 1-2-3-4-5-6-7 必ず出る

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑦ 私は恋人から会おうと誘われると…

会う 1-2-3-4-5-6-7 会わない

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑧ 私は恋人の話を…

返事をしない 1-2-3-4-5-6-7 返事する

いつもそうだ 1-2-3-4-5-6-7 予測がつかない

⑨ 私は恋人との電話を…

すぐきる 1－2－3－4－5－6－7 ずっと話す

いつもそうだ 1－2－3－4－5－6－7 予測がつかない

付録IX 一般版 the Experienced in Close Relationship (ECR-GO; 中尾・加藤, 2004)

以下には、いろいろな人が対人関係の中でどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが普通の対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。現在の対人関係での経験だけでなく、いろいろな対人関係の中であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について下の7件尺度を用いて評価してください。回答は、それぞれの文の右にある評価尺度上のもっとも当てはまる番号に○印をつけてください。

下線は真ん中です（評価尺度：全く当てはまらない 1—2—3—4—5—6—7 非常によく当てはまる）。

- | | |
|---|---------------|
| 01. 心の奥底で何を感じているかを人に見せるのはどちらかというと好きではない。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 02. 私は見捨てられるのではないかと心配だ。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 03. 私は人と親密になることがとても快い。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 04. 私はいろいろな人との関係について、非常に心配している。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 05. 人が私と親密になろうとするやいなや、私は自分から人との
距離を取ろうとしている自分に気付く。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 06. 私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に
思っていないのではないかと心配する。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 07. 私は人が自分に対して非常に親密になりたがってくると、いごち悪く感じる。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 08. 私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 09. 私は人に心を開くのに抵抗を感じる。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 10. 私はいつも、人が自分に対していていてくれる気持ちが、
私が人に対して抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 11. 私は人と親密になりたいのだが、いつの間にかついつい後ずさりしている
ことが多い。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 12. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるために、ときどき
人はうんざりして私から離れていってしまう。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 13. 私は人があまりに自分と親密になってくると、とてもイライラしてしまう。 | 1—2—3—4—5—6—7 |
| 14. 私はひとりぼっちになってしまうのではないかと心配する。 | 1—2—3—4—5—6—7 |

15. 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。 1—2—3—4—5—6—7
16. 私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人は
うんざりして私から離れていってしまう。 1—2—3—4—5—6—7
17. 私は人とあまり親密にならないようにしている。 1—2—3—4—5—6—7
18. 私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言って
くれることが必要だ。 1—2—3—4—5—6—7
19. 私は比較的容易に人と親密になれると思う。 1—2—3—4—5—6—7
20. 私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを
示させようとしているのを感じる 때가ときどきある。 1—2—3—4—5—6—7
21. 私は自分が人に依存することゆすことがなかなかできないと思う。 1—2—3—4—5—6—7
22. 私は、（知り合いに）見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。 1—2—3—4—5—6—7
23. 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない。 1—2—3—4—5—6—7
24. 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかったら、
私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。 1—2—3—4—5—6—7
25. 私は人に何でも話す。 1—2—3—4—5—6—7
26. 私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思って
いないと思う。 1—2—3—4—5—6—7
27. 私はたいてい、人と自分の問題や心配事を話し合う。 1—2—3—4—5—6—7
28. 私は誰かとつき合っていないと、なんとなく不安で不安定な気持ちになる。 1—2—3—4—5—6—7
29. 私は人に頼ることに抵抗がない。 1—2—3—4—5—6—7
30. 私は、私がいてほしいと望むほどに人がそばにいてくれないと、
イライラしてしまう。 1—2—3—4—5—6—7
31. 私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。 1—2—3—4—5—6—7
32. 私は、人が必要な時にいつでも私のためにいてくれないとイライラする。 1—2—3—4—5—6—7
33. 困った時、人に助けを求めると、何かちょっとは（状況が）よくなる。 1—2—3—4—5—6—7
34. 人にダメだなあとといわれると、自分は本当にダメだなあと感じる。 1—2—3—4—5—6—7
35. 私はなぐさめや元気づけたりすることをふくめ、いろんなことで助けを求める。 1—2—3—4—5—6—7
36. 私は、知り合いが私のことをほっといて一人で何かをすることが重なりと
腹が立ってきてしまう。 1—2—3—4—5—6—7

付録X 配偶者の応答性尺度

a. 各項目で、**配偶者（妻・夫）**が行っている行動についてお答えください。

⑩ **配偶者は私が話しているときに…**

目を見る 1－2－3－4－5－6－7 目を見ない

⑪ **配偶者は私からのメールを…**

返す 1－2－3－4－5－6－7 返さない

⑫ **配偶者は私が手をつなごうとすると…**

つながない 1－2－3－4－5－6－7 つなぐ

⑬ **配偶者は私の話を…**

聞いていない 1－2－3－4－5－6－7 聞いている

⑭ **配偶者は私に微笑みかけられると…**

無表情である 1－2－3－4－5－6－7 微笑み返す

⑮ **配偶者は私からの電話に…**

出ない 1－2－3－4－5－6－7 必ず出る

⑯ **配偶者は私の話…**

返事をしない 1－2－3－4－5－6－7 返事する

⑰ **配偶者は私との電話を…**

すぐきる 1－2－3－4－5－6－7 ずっと話す

b. 上述の配偶者の行動は、どれくらい一貫性がありますか

いつもそうだ 1－2－3－4－5－6－7 予測がつかない

付録 XII Marital Love 尺度

次のそれぞれの質問文を読み、左側にある 1～9 の回答肢の中から、妻（夫）に対するあなたの気持ちに一番近いものを 1 つ選んで○印をつけて下さい。

9. 非常にそう思う
8. そう思う
7. ややそう思う
6. どちらかといえばそう思う
5. どちらでもない
4. どちらかといえばそう思わない
3. あまりそう思わない
2. そう思わない
1. まったくそう思わない

- | | |
|---|--------------------------|
| 1. <u>妻（夫）とは今でも恋人のような気がする</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 2. <u>妻（夫）のためなら何でもしてあげるつもりだ</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 3. <u>妻（夫）と一緒にいると、妻（夫）を本当に
愛していることを実感する</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 4. <u>妻（夫）とはお互いに出会うためにこの世に
生まれてきたというような気がする</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 5. <u>妻（夫）のことならどんなことでも許せる</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 6. <u>妻（夫）は魅力的な女性（男性）だと思う</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 7. <u>妻（夫）は言葉に出さなくても私の気持ちを
理解してくれる</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 8. <u>妻（夫）が幸せになるのが私の最大の関心だ</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 9. <u>どんなことがあっても 妻（夫）の味方でいたい</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |
| 10. <u>妻（夫）を一人の人間として深く尊敬している</u> | <u>1－2－3－4－5－6－7－8－9</u> |

付録 XI 配偶者に対する自分の応答

各項目で、**あなた**が行っている行動についてお答えください。(これらの項目は、あなたの意図を評価するものではありません。先行研究からも、これらの項目は、仕事などのあなたの現在の状態によってさまざまに変化することが示されていますので、安心してお答えください)

⑩ **私は配偶者が話しているときに…**

目を見る 1－2－3－4－5－6－7 目を見ない

⑪ **私は配偶者からのメールを…**

返す 1－2－3－4－5－6－7 返さない

⑫ **私は配偶者が手をつなごうとすると…**

つながない 1－2－3－4－5－6－7 つなぐ

⑬ **私は配偶者の話を…**

聞いていない 1－2－3－4－5－6－7 聞いている

⑭ **私は配偶者に微笑みかけられると…**

無表情である 1－2－3－4－5－6－7 微笑み返す

⑮ **私は配偶者からの電話に…**

出ない 1－2－3－4－5－6－7 必ず出る

⑯ **私は配偶者の話…**

返事をしない 1－2－3－4－5－6－7 返事する

⑰ **私は配偶者との電話を…**

すぐきる 1－2－3－4－5－6－7 ずっと話す

b. 上述のあなたの行動は、どれくらい一貫性がありますか

いつもそうだ 1－2－3－4－5－6－7 予測がつかない